MONSTER HUNTER　～ある料理人の珍事～

白濁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＯＮＳＴＥＲ　ＨＵＮＴＥＲ　～ある料理人の珍事～

【Ｎコード】
Ｎ１０４６Ｅ

【作者名】
白濁

【あらすじ】
※三話、加筆修正中

ユノン・ビーバー……首都に構える大衆食事処『ビーバー食楽園』を切り盛りする、ちょっと性格のねじ曲がった若き店主。彼は料理人の傍ら、Ｇ級クエもビストロＵシリーズ一式で制覇してしまう、腕の良いハンターだった……。
この物語は、そんな彼と彼の幼馴染の少女セシル・ラ・フランが織り成す、他に類を見ないぶっ飛んだ日常を描いた、テンション高

め（時々バトル）なコメディです。

第一話……The person who cooks a monster.

>i3431—492<

第一話……The person who cooks a monster.

緑が原初のままに生い茂り、海と太陽に激励された密林。

広漠たる『乾きの海』、夜になれば幾千の星々の恩恵を授かる砂漠。

あらゆる生命を昼は霧で以て潤し、陽が落ちれば毒を以て蝕む沼地。

氷雪を迎える白銀の山脈。吹雪けば白き闇に染まる雪山。

火焔に彩られた炎熱地獄。古の脈動を今も尚刻み続ける火山。

そして……始まりを唄う森丘。

原始の生物が地を駆け、空を飛び交う世界。

その中に人々はいた。

神の知恵を受け継ぐ種族、即ち人間。

しかし、人が如何に知恵者であろうとも……この世界のルールは人に有益なものとは言い難い。

狩るか……狩られるか。

飛竜と呼ばれる種族。

生態系の頂天を永きに渡り人間と争うこの種族は、正しく飛行する大型生物。

爪牙は鋭利に研ぎ澄まされ、その皮膚は岩の如き鱗と殻に覆われている。

それだけではない。

中には毒を持つ者さえいる。だけならまだしも、火、水、果ては雷電までも自らの牙として使役し得る者さえいる。

何世代も続いて今尚、人間はこの世界ではそんな飛竜という脅威と戦っていた……大自然を生き抜く猛者、ハンターとして。

◇　◇　◇

限りなく黒に近い青、夜の色だ。

その色は太陽が西に沈むに連れ、空を覆いだす逃れようのない闇。

もう日が落ちて大分経つ。談笑する人々の明るい声や、行きかう荷馬車の心地良い振動……、昼間の街の喧騒はなりを潜め、商いの店のほとんどが閉まり、多くの人はそれぞれの家に帰った。

暗い夜は昼に比べてやや静かだが、寂しさはない。闇を掃うようにあちこちの家の明かりや街道の松明が灯り、原始的な炎の光が石造りの街道をぼんやりと優しく照らす。その明かりの下でまた、笑い合う人や、商いに興じる人、懐かしい音色のする笛や弦楽器を巧みに弾く人などが、夜の街に穏やかな賑やかさをもたらしてくれていた。

そんな中ひと際明るく、やんややんやと賑やかな木と石で造られた大きな店――

「オーダー入りますニャ！　“モスのタレ焼き”ですニャ！」
「あいよ！」
獣人種アイルーの給仕が注文を叫び、俺はお玉片手に大声で答えた。
ここは『ビーバー食楽園』。赤道に近い熱帯の大国……アスタルト、その首都にある大衆の食事処で、店は今晩も人、人、人でごった返す満員御礼。盛況でなによりだ。
そして俺の名はユノン・ビーバー。この『ビーバー食楽園』の料理長、三代目店主で、今日も今日とて料理器具を手に肉を焼き、野菜を炒め、魚をおろして人々の舌鼓を打たせようと努めていた……。その全ては祖父のいた高みに近づくためだ。
俺の祖父である初代店主は、国境を越えて大陸中にその名を轟かせた偉大な料理人だった。名をジオ・ビーバー。
祖父の伝説は数知れない……、一説によると古龍種すら食材にしちまったらしい。
今ではどこまで本当の話なのかは分からない……、ただ本当でも嘘でも、俺もいつかは祖父の名に代わり、この名を大陸中に知らしめる料理人になってみせる。あの世で見てろや、じいちゃん。

「ふう……」
出来上がった料理を給仕に託して、今までにもう何百何千と心の中で呟いてきたか分からん祖父への下剋上の想いを胸に、一息ついた。
厨房は暑い。額の汗を拭うが、前髪からポタリと汗の玉が落ちて石の床に染みを作る。ブロンドくずれの灰色の俺の髪は、伸びてきたために最近鬱陶しく感じていた。視界の邪魔はもちろん、料理人としては不衛生だ。
「ふう……」
もう一息ついた。早朝の準備から深夜の仕込みまで、料理人の一

日は長い。身体は慣れてるけど、それでもこの一息は出てしまう。それも毎度毎度同じ時間に……。多分、自分の中での一種の区切りのようなもんだろう。疲労のせいとは考えたくない。考えたり口に出したりするから疲れるんだ。

「……」

受け継いだ店のホールを厨房の奥から見る。友人や仲間、家族連れや上司に部下、時には一人静かに食事を楽しむ人など客層は様々だ。

木や石、獣の皮や骨で造られた、外観も内装もオリエンタルな雰囲気のうちの店はかなり広い。素人目にざっと見ても百人は軽く入りそうだし、実際のところ、問題なく入る。八人掛けの丸テーブルが九つに、厨房に面したカウンター席が十人分。立ち食い席にも十人分くらいのスペースがあるし、全体的に詰めればまだ入る。

そんな店内が満席の大盛況だ。全席喫煙可だから天井には煙草の煙がまるで雲のように漂い、酒の飛沫がそこかしこで舞う。それらと湯気のたつ料理の香りの中、陽気な奴が歌い、踊り、気風の良い奴が合の手で煽る。そりゃ、やんややんやと賑やかにもなるさ。これだけ人が飽和した状態なら、活気が湯水のごとく溢れるのも当然の成り行きと言えるだろう。

妙な言い方になったが別に鬱陶しいワケじゃない。むしろ俺は来てくれる人に大変感謝してるし、これからも彼、彼女らを満足させるべく精進する次第だ。

中には祖父の代からの常連中の常連もいる。祖父の味を知っているため味にはうるさいが、祖父を越えんとする俺としては望むところだ。彼らを満足させることは、祖父の偉業に近づけることと同じ意味を持つ。そう考えると俄然躍起になるってもんだ。

日々は果てしないが、確かなやりがいと手応えを一日一日に感じてる。そうだ、俺は今、充実しているんだ。

「っしゃ！」

気合いを込めて自分の頬を強く叩くと、俺は注文のあったモスを

準備し出した。ボケっとしてる暇はない。お客が待ってくれるなんて思ったらバチが当たる。

「今日も精が出るのう、三代目」

そう声がすると、俺の脚に何か柔らかな感触のするものが当たった。見ると、板前スーツを羽織り、頭に巻いた鉢巻きが勇ましいキッチンアイルーがいた。脚に触れたものは、どうやら彼の肉球らしい。

ボサボサの毛並みのこのアイルーの名はガメニー。俺が物心ついた頃から厨房で働いている、うちの古参の料理人（猫）だ。口元の茶色い毛が白くなってるあたり、かなりの老齢のはずだが、当の本人は気にした様子もなく“生涯現役”と豪語して何とも頼もしい。調理では主に煮物を担当し、今は煮物料理のオーダーがないため、好物であるサシミウオの燻製をくわえていた。

言うまでもないがピーク時で百人近い人が入るうちの店を、俺一人でやりくりするなんて不可能だ。猫の手とかけたシャレを言うつもりじゃないが、当然キッチンアイルー達の手を借りている。

通常キッチンアイルーは五匹までしか雇えないが、うちは大型の料理店だから五匹でも足りないという理由で、特例として八匹のキッチンアイルーを雇ってる。全体を見る俺に始まり、煮方、活け造り、焼き、盛り付けと、それぞれのスペシャリストが一匹ずつ。それに洗い方や見習いも含めて、うちの店の味と営業は成り立ってる。基本的に手先が器用で知られるアイルーだが、特に俺がスペシャリストと呼んでるアイルー達の技術は圧巻で、作業の早さもさることながら味も秀逸、最早匠の技とでも言うべき達人の域に達している。獣人種アイルーは多彩な職種で人間社会に適応すると言うが、うちのキッチンアイルー達は取り分けて馴染んでると言っても、決して言いすぎじゃないだろうと思う。正直な話、技術の面では俺もうかうかしてはいられない。

「あんまり根詰めなさんなや。俺ら料理人は身体が資本ですけえ」

「おう、心配すんな。まだまだイケるぜ！」

アイルーらしからぬ流暢な人語で俺を気遣ってくれるガメニーに、にかっと笑って余裕をアピールしてやった。ガメニーはキッチンアイルーという職に生涯従事するため、猫にとっては鬼門とも言うべき猫舌とナ行の発音を克服してる。後者はどうでもいい気がするが。

ガメニーだけじゃない。焼きや活け造り、盛り付けの担当も、それぞれの作業に適せるために鬼門を破ってくれている。これも俺が日々の修行に没頭する要因と言える。キッチンアイルーがここまでやってくれているのに、人間の俺がこの程度でへたれるワケにはいかないからな。

さて、と俺は改めて調理台の上にある立派に太ったモス丸々一頭と向き合った。屠畜(とちく)後、きっちり計算した期間を置いて熟成させたもので、しかも生前は良質のキノコをたらふく食わせてたから、きっと肉質も抜群に良いだろう。

俺は出来上がりを想像して胸を躍らせながら、調理を開始した……その時――

「ユ～ノンッ！　お疲れ様♪」

笑い声や歌声が賑やかな中、不意に厨房の方へ投げ掛けられる、俺にとっては聞き慣れた声がカウンター席から聞こえた。

「ん？　セシルか？」

カウンター席に目をやると、そこには見慣れたのセミロングの金髪に白い肌、そして無邪気さがうかがえる大きな蒼い瞳が印象的な女の子がいた。

彼女、セシル・ラ・フランは頭以外を盾蟹『ダイミョウザザミ』の装備で固めた俺の幼なじみにしてハンター。そして、まあそんな間柄であるから、必然的にうちの店の常連だ。

セシルはたまたま空いたカウンター席の一つに座り、身を乗り出すような姿勢で何がそんなに楽しいのかニコニコしながら身体を揺らしていた。こんな感じでセシルはいつも元気で落ち着きがない。

「頼んだヤツ。どうだった？」
調理の手を休めずにセシルに聞いた。
「うん！　アプトノスの生肉だよね？　ハイ！」
ずずい、と生肉のごっそり入った抗菌仕様の袋を渡され、作業を中断してカウンター越しに受け取る。丁度店にあるアプトノスの肉のストックが切れかかっていたため、俺はセシルに生肉集めを頼んでおいたのだが、ずっしりとした抱え込んだ袋の重みが全てを雄弁に語ってくれた。大漁だ。
まあ俺も兼業ハンターだから、このぐらいの量の生肉の収集程度なら自分で行ってもよかったんだが、店を空ける時間がとれなかったからな。
ちなみに、料理人兼ハンターといういささか特殊な職の掛け持ちをしている俺の服装は一般的なコック服ではなく、ビストロUシリーズというハンター用の装備服だ。言っておくが、今着ているビストロUで狩場に出たようなことは一切ない。ちゃんと戦闘用五着、厨房用五着の計十着を使い分けて、衛生面で問題ないようにしている。
「おー！　サンキュな！　どれ……」
保存のために塩漬けされた肉塊を一つ取り出して肉質の状態を見る。と言っても、剥ぎ取ったばかりの新鮮な生肉に文句のつけようなんてない。
……はずなんだがなあ。
「……」
「〜♪」
セシルは俺を見ながら相変わらずニコニコ笑っている。ご苦労様と労って褒めて欲しいのだろう。目が合い、そんな彼女に俺は極上の笑顔をプレゼントした。
そして俺は手に持った肉塊をおもむろに――
「没」
セシルの顔面に投げつけた。べちっと生々しい音を立てて、生肉

はセシルの顔にぶち当たり、ぼとりとカウンターのテーブルに落ちる。セシルは肉がぶち当たった衝撃で大きく仰け反り、座った状態で危うく後ろに椅子ごと倒れそうになるところだったが、なんとか持ち直した。

「なんでよ！？」

鼻の頭を赤くしてセシルが怒鳴るが、俺も怒鳴り返す。こいつ、とんでもねえことしやがって……

「何でよじゃねーよ！　俺言ったよな！？　肉集めるなら武器変えてくれって確かにお前に言ったよな！？」

「いーじゃんいつも通りで！　どこがダメなのよ！？」

「どこもかしこもだよ！　何だよコレ、傷だらけじゃねーか！　こんなもん料理に使えねーよ！　しかもお前の片手剣毒属性って嫌がらせかこの野郎！」

そう、最大の原因はそれだ。彼女の武器は毒怪鳥『ゲリョス』の皮膚や内臓器官から造り出す『デッドリィタバルジン』という軽量の戦斧で、討伐に使う武器としては確かに優秀だが、生肉集めには向いてない。その証拠に、剥ぎたての肉の組織が毒で壊死しかかってる。僅かに腐敗臭もする。つまり、食えない。

このセシルという少女がどんな奴なのか、もう少し詳しく説明しておこう。

セシル・ラ・フラン。アスタルトに籍を置く、ハンターズギルド公認の上位ハンター。

組合（ギルド）を通してハンター達に斡旋される依頼（クエスト）の難易度は大きく三つ、下位、上位、G級に大別され、上位ハンターともなれば中々の腕前なのだが、ここで言う“上位”の肩書とセシルのハンターとしての腕前は、全く以て関連性がないことを予め（あらかじ）言っておく。これを踏まえた上で聞いて頂きたい。

クエストレベルが上がるということは、当たり前だが依頼の難易度が上がるということだ。が、こいつは受注したクエスト……特にキークエストと呼ばれるハンターランクを左右する（先述の言葉を

使うと　下位↓上位　上位↓G級　という具合に、より難易度の高いクエストに挑める能力があるかどうかを審査する、試験的な意味を持つもの）クエストがあるのだが、そのことごとくに俺を連れ回し、自分はほとんど傍観を決め込んで、メインターゲットであるボスモンスターの相手は俺に丸投げという、腹立たしいを通り越して呆れかえるようなやり口でランクアップを果たしてきたのだ。

手伝ってきた俺も俺だが、本意ではなく仕方がなかったのだ。

俺は料理人として食材調達のためのフィールドワークに出ることがある。その際、当然何らかのクエストを受注しなけりゃならんのだが、俺は店からほとんど離れられない。そのために、契約の手続きをセシルに任せるのだが、ここであいつは俺をキークエストに巻き込みやがるのだ。

例えば昔、厳選キノコ目当てで森丘に行きたかったことがある。個人的には森丘の素材ツアーでも受けれれば充分だった。だがセシルは自分のキークエストの消化を図って、同じ森丘でも『リオレウス討伐指令』を受注してきやがったのだ。

あの時のことは今でも鮮明に思い出せる……。久しぶりに厳選キノコを調理したくなった俺は、調達のためのまとまった時間をとるために、常連さんに前もって説明し、キッチンアイルーにもその旨（むね）を伝え、森丘への採集を入念に企画した。

企画する段階で、俺が森丘に行くことをどこからか嗅ぎつけたセシルが、

「私も手伝う」

と、申し出てきた。一人が一度に運べる量には限界があるし、何より二人の方が一人でやるより効率も良いので、俺はありがたく手伝ってもらうことにした。

休憩や営業後など店での僅かな自由時間を……。

繰り返す……、料理人の、貴重な、自由時間を、だ。当日の散策

のルート決めや、キノコ以外の食材の探索、等の企画の進行に費やしてしまったため、クエストの手続きは全てセシルに任せることになった。その分の時間まで余す所なく使い込んで、俺はもうホントに万全を期した状態で当日に臨もうとしたのだ。ここまで言えば理解して頂けただろうか……、俺がどれだけ楽しみにしていたのかを。

そうして満を持して迎えた当日。空はきれいに晴れ渡った絶好の採集日和。はっきり言って、ピクニック気分で緩々（ゆるゆる）に油断しきってた。

厳選というだけあって、見つかる確率の低い厳選キノコだが、その日は最初のエリアから移動する度に立て続けに採集できた。幸先の良いスタートに気分を浮つかせ、俺は木陰でたむろしていたランポスも、突然出てきたチャチャブーも笑顔で蹴散らしながら先へ進んだ。

「帰って何つくろうかな～♪」

崖上にある森林や洞窟への分岐路にあたる草原に足を踏み入れると、俺のテンションもいよいよ自分じゃどうしようもならないぐらいに有頂天になっていた。セシルからは素材ツアーと聞かされていたその時は、何の疑いもなく厳選キノコ片手に採集に勤しんでいた。

久しぶりの厳選キノコの手触りを楽しみながら崖下を見下ろすと、眼下に広がる木々や草原は快晴の空の下で青々と葉を輝かせ、ゆったりと流れる川もキラキラと太陽の光を反射して綺麗だった。

その川をザブザブとアプトノスの群れが横断するのを見て、

「平和だ」

と、呟いて深呼吸。淀みのない新鮮な美味い空気を胸いっぱい吸い込んで……吐く。本業の仕事に何も文句はないが、慌ただしい日常を離れて大自然の中に身を置き、その雄大さを前にすると、普段の生活に対して“大変なんだよな～”という想いをつい抱いてしまう。いっその事、ハンター業に専念してしまおうか……、とも思ってしまう。

いやいや、考えまい。病（やまい）は気から。全ては気の持ちよう。そうだ、

俺には俺の料理を待ってくれてる人が沢山いるんだ。常連客、そうでない客、ガメニー達キッチンアイルー……。
大変で大いに結構じゃないか。むしろ素敵なことだ。今日のことは気分転換、あるいはリフレッシュするための一日と割り切って、店に帰ったらまた頑張ろう。
そうやってポジティブに思考を働かせ、手の中のキノコを見て、再びあれこれと調理法を考え出した。
そこで俺の平穏な採集タイムは、突如として終幕を迎えることになる。
気分転換？　リフレッシュ？　馬鹿言っちゃいけない。セシルに手続きを一任し、ちゃんとクエストの内容を確認しなかった時点で、事態は既に背水の陣だった。
「ん？」
フ……と暗くなった。上から影が差して、俺に降り注いでいた日の光が遮断された。
しかし雲ひとつない快晴だというのに一体何が？　鳥か？　と、妙に思いながら上を見上げると……、
「ギャオアアアアァァァッ！」
リオレウス。『空の王』と呼ばれる飛竜種の代表。好戦的でメチャ凶暴。
「……へ？」
呆気にとられるのも束の間……、ドでかい咆哮と共に飛来してきたそのリオレウスに、即座に敵とみなされた俺は、ワケも分からぬまま一人で討伐する羽目になった。
激闘の末、何の準備もなかったものの、なんとか討伐に成功した俺は頻(しき)りに頭をひねった。ギルドに指定された、ただの素材ツアーに使われるはずの森丘の区画で、下級飛竜イャンクックならまだしも上級飛竜のリオレウスが出現するなんて異常だったからだ。
もしこれが、ギルド側が充分に森丘を調査してなかったことによるものなら、これはちょっとした事件だ。今回訪れたのが俺だった

からよかったものの、レウスに慣れてない奴が来てたら、下手したら死んでたかもしれない。レウスを無視せずにわざわざ討伐したのも、そういう理由があったからだ。

俺は帰ったらこのことをすぐにギルドに報告しようと、使命感に燃えていた。尊い命が無駄に散ってしまうことを未然に防ぐ崇高な使命だと……、ぶっちゃけた話、そんなこと考えている自分にちょっと酔っていた。

俺がそんな決意を固めているとはつゆ知らず、帰路を行くアプトノスの竜車の中で、セシルは安らかな寝息をたてて眠っていた。そんなセシルに「お前にはまだ早い……、俺のような選ばれしハンターは、いつも使命が付きまとう……」なんてことをセシルが寝てるのをいいことに、調子に乗って俺様ヒーロー的なことを口走ったりもした。今思い出すと自殺したくなるほど恥ずかしいが、あの時は竜車から見える夕陽が壮大で、そんなこともついうっかり言っちゃうくらいムード満点だったんだ。

そして、帰って受付窓口にてレウスが出現したことを、ややオーバーアクション気味の身振りで、討伐した時の様子も若干脚色しつつ説明した俺に返ってきたのは、あまりにも、あんまりな内容の話だった。

俺は受付嬢から教えられ、ようやく受注したクエストの全貌……、つまり、俺が受けたクエストが『森丘素材ツアー』ではなく、本当は『リオレウス討伐指令』だったことを知った。

全てを理解して愕然とする俺の後ろで、その場から抜き足差し脚で逃げ出そうとしていた黒幕を捕獲。言うまでもなくセシルだ。紅潮して顔が熱くなるのを感じ、怒りと羞恥で歯軋り止まらない中、俺はセシルの首根っこを掴んで猫のように宙ぶらりんにした。てゆうか何が「お前にはまだ早い」だ！　何が「選ばれしハンター」だ！　俺はこいつの手の平で踊らされてただけ（ヒーロー発言ははっきり言って自爆以外の何でもないが）じゃねえか畜生！

その後、巧妙に受注書を俺に見せなかったあざとい手際に感心し

た半面、久しぶりのバケーションを台無しにされたことへの怒りを抑えることなく、思いっきりセシルを叱り飛ばしたが……、三日もすればどこ吹く風だった。
まあ道具ポーチいっぱいに厳選キノコを集めた功績に免じて（正直全然割に合わんが）、それ以上ギャーギャー言うのは無しにした。疲れてたし。

……こんな過去の話で理解を求めるのも難しいが、兎にも角にも、セシル・ラ・フランとは人に危険極まりないリオレウス討伐をふっかけさせるような、そういう奴なのだ。こいつのハンターランクは名ばかりの肩書であり、俺がついてないと下位クエストすら危ういという実状である。
「うぅ……、急いで持って来れば大丈夫と思ったんだもん……」
むぐぐ……と悔しそうに唸る。
先述のように俺を陥れるような腹黒さを持つセシルだが、基本的に感情豊かで性格も明るいこいつは、無理が無ければ言われたことに嫌な顔一つせずに了承してくれるような優しい一面もある。ただし根が半天然でほとんど考えなしに行動するから、毎度毎度それが何かしらのトラブルにつながってしまうのだ。その辺のことも事ある毎にこいつに指摘してるんだけど、一向に改善された試しがない。
「発想は正しい。すぐに焼けばある程度は殺菌できるし保存も効くだろうさ……、けどお前はデッドリィの毒素を甘く見過ぎだ」
「うぅ……」
デッドリィは刀身から常に新鮮な毒が染みだす仕組みになっている。毒自体も強い毒性をもってるから、これで生肉なんか切ったらしばらく放置するだけで『どうぞ捨てて下さい』てな状態になる。
「つか分かってんならお前がその場で焼いて来い！　もったいない！」
声を大にして叱り付ける。何度言っても注意しないことに腹が立

つし（要はこいつ、俺の言うこと聞き流してんだ）、それ以上に食材を無下に扱ったのが俺は料理人として許せなかった。少なくとも、この袋に入ってる生肉分のアプトノスの命が、セシルの不注意で無駄になっちまったんだから。

「……肉焼きセット忘れたんだもん……」

ショボーン……と、涙目になってプルプル震え出すセシル。……ベタなへこみ方しやがって……。

「ほら」

手に収まるくらいの器に、コクのある甘辛いスープでじっくり煮込んでおいたモスの足をのせ、セシルの前に差し出す。コラーゲンを多量に含む、口当たりの良いゼラチン質の食感が女性客に大人気の常連用の裏メニュー。ガメニーが作りおきしてくれた物だから、勝手にセシルに出したりして良かったかな？　と思ってガメニーを見ると、特に気にした様子もなくニコニコ笑いながら頷いてくれていた。

セシルはジーッ……、とほこほこと湯気の出てる熱々のモス足と俺を交互に、そして不思議そうに眺めていた。食べていいのか殊勝にも躊躇っているらしい。

「さっさと食え、下げちまうぞ？」

俺がそう言いながら器に手をつけようとすると、セシルは慌てて中身をフォークで切って食べた。

「……美味しい♪」

ニコっと笑顔が戻る。セシルの顔は同年代の中から見ても可愛い方だろう。だから、こういう時の無垢な……心底“料理が美味い”と、言葉よりも雄弁に語る笑顔をされると、怒る気を削がれてしまう。ずるい笑顔だ、ホントに。

「……ごめんなさい」

すぐにしょんぼりと俯いては、食べて笑顔になるセシル。

顔の忙しい幼馴染に俺は苦笑する。正直、食材を無駄にしたのはまだ許せないが……。

「でも、腐敗臭が人間のユノンに嗅ぎ分けられるんなら、毒生肉とかどうなるの？　モンスターはもっと臭いに敏感だよね？」
顔を上げてセシルはそんな事を聞いてきた。
「毒生肉は毒を塗る前に上薬を塗るんだ。そうすりゃ腐敗しないし、毒自体は無臭だからモンスターは気付かない」
それに罠肉に手を付けるのは、ババコンガとかティガレックスとか、鼻の効くモンスターだからな……、そこまでしないと罠肉にならない。
「ごめんね？　今度から気を付けるよ……」
「むぐ……」
消え入りそうな声でセシルは謝罪した。腹黒さのない本気の目で、しかもちょっと潤んでるもんだから、それ以上強く言えなくなっちまった。ったく……、謝るぐらいなら最初から人の言うこと聞けって話だが、馬耳東風なんだよなあ、何度も言うが。
俺は『モスのタレ焼き』の仕上げに入る。タレをかけた上から数種類の香草を混ぜたものを振りかけて、最後の焼く作業にとりかかる。食欲をそそる香ばしい匂いが店中を包む。
「気をつけろよな……あ～、話は変わるんだけどさ……」
焼けたモス丸々一頭を火から離して皿にのせる。こんがり肉で言うG並みの良い焼け具合だ。
それを盛り付けてアイルーの盆に渡すと、どうやらそれが今晩のラストらしく、気付けば閉店時間が迫って、あれだけの数のお客も疎らになってた。キッチンアイルー達も、それぞれの作業のラストスパートに入っている。
「？　何？」
「今度食材調達に密林に行くから……、一緒にどうだ？」
あるモンスターを久しぶりに調理して振舞いたくなってた俺は、これまた久しぶりに密林への食材調達を計画していた。またどんな手口でキークエストに駆り出されるかも分からん、と警戒していたからセシルには黙っておいたが……、落ち込まれても困るので切り

出した。セシルは良くも悪くも存在感があるから、こいつのテンションが低いと周りの雰囲気まで暗くなる。
「……一緒に行っていいの？」
フォークをモゴモゴ咥えながら、見上げるように見つめてきた。上目遣いっていうヤツで、不覚にもその仕草を可愛いと思っちまった。
「い、嫌ならいい。あ～あ、お前にも食材集め手伝ってもらいたかったんだけどなあ？」
照れ隠しも兼ねて、あさっての方向を向いてわざといやらしい言い方をする。嘘は言ってない。なんだかんだでセシルは採集だけはきっちりやってくれるんだから。
「そっか……、食べ物いっぱい採れたらユノンのお店助かるんだよね？」
「ま、まあな」
くっ、変わらずの上目遣いだからまともに顔が見れねえ。無自覚だから質悪い。
ちなみに補足するが、俺の食材調達には、この店にとってかなり重要な意味がある。ハンターとしての報酬が貰える上に、本職で必要な材料費も大幅に軽減できるという……、“一石二鳥”とも“一粒で二度美味しい”とも言えるメリットがあるのだ。自分で言うのもアレだが、俺の調理出来るモンスターの範囲は広い。飛竜種でも牙獣種でも、大抵は食い物に出来る自信がある。こうやってモンスター丸々調理できるからこそ、味に自信のある物を安い値段で提供できるんだしな。……うちの店がこの街に深く根ざしてる、最大の要因はここだ。
「……ダメか？」
で、セシルだが……、俺の申し出にしばらくぽけ～っとした顔をしていた。急な話だから無理か？　と思ったが、徐々にニンマリと表情が明るくなって、「ううん、行く！」と、良い返事が帰ってきた。

嬉しそうに身体を揺らしながらニコニコ笑う幼馴染を見て、“とりあえず一旦全て水に流してもいいかな？”とか思った俺は甘いんだろうな。この後、あまつさえ晩飯を御馳走することになったし。

「残さず食べろよ？」

「残さず沢山食べるよ！」

腕を高く挙げてドンと来いやとアピールする。お～し、沢山食べてもらおうじゃねえか。

大概いがみ合ったが、これが俺らの関係だ。気兼ねなく、心地良くて、良いところも悪いところもお互い全部知ってる。気心が知れ過ぎて互いが互いに容赦ないのが玉に瑕（きず）だけど。

好きだから？　いや、違うね。確かにセシルに色々と散々に言ってる俺が、それでも尚セシルにものを頼むのは変に見える。が、そりゃ何のことはない、しょうもない理由なのさ。

俺は友達少ないんだよ。

第一話……The person who cooks a monster.

というワケで如何でしたでしょう？　つまんなかったらホントご免なさいｍ（＿）ｍ　モンハンの世界は最高です。私もモンハンワールドへ飛び込んでみたいです。そして焼くのです肉を。あ～でもレウスとマジガチで戦り合う自信は無いな（↑瞬殺確定

第二話……Capture. And it is an accident.

密林。

気候は熱帯、海に面して広域に渡って鬱蒼とした熱帯雨林が広がる地帯。温暖で年間の総降水量が多く、そのため植物は成長するがままで平均樹高も高い。深い緑の森は時に視界を遮るが、森丘に並んでそれだけ植物に恵まれているのだから、当然草食動物も繁殖し易い。

そんな密林だが、その草食動物を捕食する危険な肉食動物（飛竜とか）も数多く潜み、姿を見せる。まあ、危ないっつってもハンターとしちゃ望むところだ。そりゃ新参にはキツかろうが、乗り越えりゃその分だけ見返りも素晴らしい。動植物とか鉱物とか資源も豊富だから、ハンターを生業とする人間には、密林はむしろメリットの方が多いぐらいだろう。

しかしだ……、先述の通り熱帯の気候であるために――

「……暑っ」

「暑いぃ……」

気温も湿度も高いから不快指数も結構ひどい数値だったりする。本日は晴天なり。しかも真昼間。照りつける燦々とした日差しと湿気とが、二つ相まって俺とセシルを容赦無く蒸す。焼く、ではない。蒸されるんだ。

「まぁ狩りに支障は無いからいいんだけどな……」

狩猟用のビストロUシリーズ装備に身を包んだ俺は、ベースキャンプの準備をしながらグッと伸びをした。密林の気温に音を上げているようではハンターは勤まらない。

ちなみにビストロUだが、ビストロシリーズは一式と言っても腕と脚用の装備が無いので、俺はとりあえず防御の面でも性能の面でも優秀なG級装備の『マカルパZ』を腕と脚に備えてきた。魚鱗から作られ、頑丈なのに質感は柔らかく動きやすいのが魅力だ。

「だね。砂漠に比べたら大分マシだし……」
同じくベースキャンプの準備に勤しんでいるセシルも同様に伸びをした。腕を上げた拍子に、茹でて何日か放置した蟹肉みたいな色したザザミ装備がカシャッと鳴る。
「……でも」
「うん……」
やっぱり暑いもんは暑い。

快晴の密林は木々や草花が青々としていて、生命の息吹に満ち溢れていた。
ベースキャンプは絶壁に囲まれた砂浜。崖の陰で俺たち二人は、それぞれの準備に勤しんでいた。日差しがキツい分、日陰がやたら涼しくて快適に感じる。波打ち際の向こうに見える幾つもの大瀑布からは、一体どこからこれだけ流れてきてるのか不思議に思えてくるほどの量の水が蒼海に流れ落ち、水煙を巻き起こしながら混ざり合っていく。立ちのぼる水煙と波飛沫とが風に舞い、密林の青と緑の世界の中を漂っていく様は、いつ見てもやはり壮大で涼しげな絶景だった。時折優しく吹く潮風が日向・日陰に生えている椰子の大きな葉を揺らせば、さながら南国のバカンスにでも来ているような気分になる。
が、現実はこのベースキャンプから出てしまうと、途端にモンスターがそこかしこに蔓延(はびこ)ってるようなとこなんだけどな。安全なリゾート施設、誰か作ってくれねえかなあ……。
などと、輝く水面のマリンブルーに魅せられた現実逃避に耽(ふけ)っていると、
「ドスファンゴはユノンが自分で狩るの？」
こんがり肉で腹ごしらえをし終わったセシルが、片手剣『レッドサーベル』を砥石で磨きながら尋ねてきた。
「ああ。まあ狩るっつうか捕獲するけど」

俺は口寂しかったから、二つ目のこんがり肉に齧り付きながら答えた。食える時に目いっぱい食っておかないと、力が出ない。前にセシルに「食べ過ぎ」と言われたことがあるが、燃費が悪いんだから仕方ない。

「日中のこの時間だからな。周回ルートうろついてりゃ嫌でも会うだろうけど……、俺、他にも食材見たいんだよ」

ドスファンゴは牙獣種であるブルファンゴの長で、厚い毛皮に覆われた、通常のブルファンゴより大型の個体だ。ブルファンゴの長だが群れやハーレムを形成することはなく、常に単独で縄張りの中を歩き回り、ハンターのような侵入者を発見すると、見逃さずに必ず遠くからでも突進を仕掛けて攻撃してくる気性の荒さを持つ。猪突猛進を体現したようなモンスターで、でかい図体で結構な速度で突っ込んでくるから、もしその巨体の一撃をまともに食らえば痛いどころじゃすまない。てゆうか、下手すりゃ普通に死ぬ。まあ、同じ牙獣種の桃毛獣や雪獅子と違って、攻撃は単調だから慣れれば突進は簡単に避けられるし、至極狩り易いんだけどな。

「二手に分かれるからさ、お前が先にドスファンゴと遭遇したら攻撃しないで足止めしといてくれ……できるか？」

「むかっ、私そこまでヘボじゃないもん」

流石に癇に障ったらしく、ムッと頬を膨らましてセシルはそっぽ向いた。そうだよな？　ドスファンゴの攻撃くらい避けきれるよな？

戦闘時の機動力は持ってる武器によるが、セシルは数ある武器の中でも動きやすい片手剣を愛用する。一撃一撃の威力は低く、その代わり手数が多く回避行動にも即座に移れる片手剣の使い手は、前衛型の中でも特に機動力に優れるため、かく乱や囮役、視野が広ければパーティ全体を見渡して統率するリーダー的な役回りになることも少なくない。

また、総じて片手剣は重量が軽いため、全ての武器の中で唯一、剣を構えたままの抜刀状態で、回復薬などのアイテムが使用できる特性がある。人間の比じゃない瞬発力を有するモンスターを相手に

する場合、一秒や一瞬といったタイミングが重要になる。そういった場合の隙が、使い手次第で充分に解消できることも片手剣の魅力だろう。汎用性という面なら全武器中最高といってもいい（ちょっと使いたくなってきた）

と、まあ片手剣のメリットを長々と語ったのだが、セシルがこれらの例を今までどれか一つでも実践したかと言われれば、そんなことは過去に一度としてない。ビビりでヘタレのこいつが片手剣を使うのは、その機動力をフルに活かしてその場から逃走するためである。

とはいえ、今回の相手は高（たか）がドスファンゴだ。ハンターの世界に絶対はないため油断は禁物だが、ドスランポス同様、新米ハンターがいの一番にぶち当たるようなボスモンスター。いくらなんでも遅れをとるとは思わんが……。

「心配しすぎだよ～。確かに私そそっかしいけど、ドスファンゴはもう慣れてるから大丈夫だよう」

「お前のはそそっかしいとは言わん。危なっかしいとは言うだろうが」

でもまあ、ここまで言うなら大丈夫だよな。うん。

「それより楽しみだな～♪　久し振りだよね？　ユノンの『ドスファンゴ料理』」

言いながらセシルの顔がだらしなく緩む。

そう、今時の新米ハンターがドスファンゴにド突かれて泣きをみている中、俺達はそれらとは一線を画す目的で狩りに来ていた。

「最近ファンゴに縁が無かったからな……。スープにでもするかな？」

俺らの目的は飽くまで『食材調達』。新米ハンター達には充分脅威に成り得るドスファンゴすら、俺にしてみれば食材のカテゴリー入りになる（自慢するワケじゃないが）。ドスファンゴだけを言えば、そこにはハンターとモンスターという自然界の崇高とも言うべき相互関係も、殺るか殺られるかのサバイバルな掟もない。コック

と食材、捕食者と餌だ。
何故ドスファンゴかというと、先日久々に牙獣種に手を掛けたいという衝動に駆られた、というだけに過ぎない。俺は日中の休憩を利用してギルド本部が直々に運営する集会所に足を運んだ（アスタルトのギルドは国営のため、首都にギルドがある）
討伐や採集の依頼が書かれた羊皮紙が乱雑に張りまくられた巨大掲示板を一望して、良さげな牙獣種の討伐依頼は何かないかと探し、そして見つけた。
内容は『商隊の移動ルートの確保』……この密林には、多くの商業団体や組織が移動の際に使うルートがある。が、最近棲み付いたドスファンゴがそのルートを飲み込むように縄張りを形成してしまったお陰で、移動が困難になってしまったみたいだ。既に幾つかの商隊が被害に遭い、俺らの街への出荷・入荷は一部停滞。可及的速やかにこれを討伐して欲しい。と、そういった概要だ。
うちの店も酒や食材を仕入れる飲食店だから、これがどれほどの痛手になるかはよく分かる。だから即決で受注した。まあ『ビーバー食楽園』の仕入れ先はまた別の路（みち）で商売に出てる（その上G級ハンターを擁するキャラバン）から実害ゼロなんだが。
「やた♪　私一番に飲みたい！」
足をパタパタさせながらセシルははしゃいだ。
「それは……無事に生肉を集められたらな？」
俺は今回のドスファンゴ捕獲兼食材調達で、懲りもせず（ホントに）セシルに生肉集めを頼んでいた。それを聞いてセシルは不思議そうに唸り出す。
「ん～……、何で『レッドサーベル』なの？」
研ぎ終わった片手剣を軽く素振りしながら、セシルが言った。
『レッドサーベル』は火竜の素材で作る火属性の片手剣で、骨片手剣を強化していくと最初に行きつく属性付きの片手剣だ。溶解した鉄のような色の反りのない真っすぐな直剣と、火竜の甲殻を模したような盾とで一セットになっている。何故俺がセシルにこれを持

たせたかと言うと、
「片手剣の中じゃそれが一番火力が低いからだよ。それなら切っても良い具合に焼けるだけだからな。それから、あんまズバズバ調子に乗って切りまくるなよ？　切るなら急所を一か所に絞ってそこだけを切れよ、オーケー？」
まあ一番の理想は切れ味の高い武器で一撃の下に討ち倒し、ほとんど傷の無いきれいな状態で生肉を集めてもらうことだ。だが生憎セシルにそんな器用な芸当は出来ない。なまじ切れ味の良い武器なんか持たせたら、手数にまかせてズタズタに切り刻むのがオチだろう。
だからこその『レッドサーベル』だ。切れ味も属性値も半端だから、先述のような事態にはならないはずだ。
「おっけ～、おっけ～♪」
……そう信じたい（超不安）
「さてと……」
肉を平らげ、残った骨を焚火の跡に放り込み、指についた肉汁をペロりとなめて俺は立ち上がった。腰に下げるのは愛槌『銀鍋【喜喜】』。幾多の狩場を一緒に戦い抜き、勝鬨をあげてきた俺の相棒。
一応前衛型の武器なら全種類一通り使いこなせるけど、俺は（特に食材調達の時は）ハンマーを使うようにしている。斬撃系の武器だと、食用になる部位まで謝って傷つけてしまうかもしれないからだ。
相棒のグリップ部分をぎゅっと握り、滑り止めに巻いてる帯が緩んでないことを確認して日向に出る。そろそろ出発しよう。
「二手に別れるぞ。セシルはアプトノス、俺はドスファンゴ。もしドスファンゴをセシルが先に見つけたら、角笛で俺に知らせてくれ。すぐ行くから」
それは片手剣で貴重な……、特にボスクラスの上物の食材に傷を付けてほしくない俺の希望だ。セシルを悠長に放ったらかしたらズタボロの生ゴミにされかねないからな。それだけは断固として避け

たい。
角笛は位置を知らせられるが、同時に相手モンスターを興奮させ、攻撃的にさせる危険も伴う。まあ、さっき念を押したし、問題ないだろ。
「駆け付けた俺がドスファンゴの相手をして……」
「で、私は戦線離脱して引き続きアプトノスを狩るんだよね？　うん、分かったよ」
セシルは元気よく答えた。これが今日の二人の役割分担にして狩りの全貌だ。
「じゃ、俺は山道を行くからセシルは海沿いのルートから探してくれ」
「了解！」と手を振ってセシルが海沿いの道を行ったのを見て、俺も山道を駆け始めた。

この時、入れ違いにベースキャンプ上を飛行する影に、俺達は気付かなかった。

「特産キノコ～……、あった！」
密林の山側のルートは、崖に沿うようにエリアが点在する。今俺がいるのは、その崖側の最後のエリア。ここから更に崖に沿う道もあるが、そこを行くと登った山を一気に下って海に出る。
「ん～、流石に厳選は生えてないか？」
で、俺は何してるかと言うと、お目当てのドスファンゴを探しながら、特産キノコの採集もしていた。
普通ハンターは特産キノコを精算・納品が義務付けられているが、俺はハンターであると同時に料理人でもあるから、納品せずにそのまま食材として持ち帰る許可が国から下りている。無論、全ての料理人がそうというワケじゃない。俺の場合、料理人として相当修行した上に、国の役人やその他のお偉いさんに死ぬほど頭下げて頼み

込んだ。その結果、特例中の特例としてようやく認められた特権だ。
……それにしても。
“……来ねえな。こりゃ先にセシルが遭遇するかな？”
今いるエリアはドスファンゴの縄張り……つまり周回ルートだ。このエリアに到着して結構時間が経つが、一向に奴が現れる気配はない。多分入れ違いになったか、そうでなければセシルと出くわして、もうすぐ角笛が鳴るはずだ。
「ま、じっくり採集しとくかな」
多少じれったい気もするが焦ることはない。そう自分に言い聞かせて、集めたキノコの使い道を頭の中で模索する。特産キノコは単品で調理しても充分美味いが、肉との相性も良い。他の食材との組み合わせ次第で、違った味わいが堪能できる利点があり、そのことも踏まえて思案する。
“スープにしようかな？”
スープにしたなら具材としての食感はもちろん、何より風味が良い。
「玉ねぎとまず炒めて……、その後白ワイン。メインはコンソメで、ミルクと一緒に入れて煮込んでクリーミーに……うん、良い感じだ」
地面からもいだキノコを片手に、そんな風にぶつぶつと呟いていた。過去に作って客受けの良かった物の引き出しを参考にしながら、レシピを頭の中で構築する。
ブブブブ……
不意に耳障りな音、そして不穏な気配が背後から近づいてくる。
「……」
じっ……と動かずに待ち、『そいつ』がすぐ背後にまで迫ったのを直感で感じ取ると、俺は腰に下げたハンマーに手を掛け、それと同時に一瞬で構え、振り返る。『これ』は……！
「オラァ！」
振り向きざまにハンマーを豪快に一振り。すると案の定手応えがあり、その一撃を受けた『そいつ』はバラバラに散って地に還る。

「またランゴスタか……、どうなってんだ一体、さっきも散々飛び回ってたぞ？」
甲虫種・ランゴスタ。大きな羽で空中を飛びまわるハチ型のモンスターで、獲物を発見すれば、付かず離れずの距離を行き来し、隙あらば尾の針でブスリと麻痺毒を注入しようとしてくる、あらゆるハンター共通の嫌われ者。環境適応力に優れるランゴスタは、例外に漏れずここにも姿を現していたが、今日の密林はいくらなんでも多すぎる。ここの前のエリアにも四、五匹いたし、今も遠くに数匹見える。
“気付かれると面倒だな……さっさと採集しちまおう”
別にランゴスタごとき一撃で瞬殺できるが、んなことに一々神経使ってられないし、何より食材にならないのが一番面白くない。過去に一度、試しに形を残した状態のランゴスタ（ランゴスタは仕留めると、大体がさっきみたいにバラバラに散ってしまう）を一匹丸ごと煮込んでみたことがあるが、半端じゃないぐらいエライ目に遭った。
まず煮汁が見たことない色に変色し、鼻がねじ曲がるような異臭を放ち出した上、味の方もとても食えたもんじゃなく、おまけに時間差で麻痺の症状が出た。特に臭いはあまりの臭気に、あろうことか（俺のミスだが）店の外に漏出し、近隣住民から苦情が殺到。俺は大ブーイングとバッシングの嵐に単身晒され、危うく創業ン十年だった店の看板を降ろすところだった。
以来、もう二度とランゴスタには手を付けまいと固く誓った。たった一匹のランゴスタの死骸を風呂に入れたようなもんなのに、その反響は最悪の方向に、予想外に大きく、そして呪いのように強烈だった。
そんな波乱しかなかった中でも、とりあえず学べたことは二つあり、一つは『甲虫種は食材に適さないこと』、もう一つは『ランゴスタは死んだ後の方がむしろ恐ろしいこと』だ。まあ、今になって冷静に考えると、食えると思ってた当時の俺もどうかしてたんだが。

“……思い出したら気分悪くなってきた”
頭を振って脳を揺さぶり、忌々しい記憶を忘却の彼方へと追いやる。美味いスープのことを考えよう。虫の異臭よりコンソメの香りだ。ゲテモノよりキノコの旨味だ。
「セシルが何杯も飲まないように注意しないとな？」
隣で草を食(は)んでる雌のケルビの頭を撫でながら、俺は笑った。

ブオオオオオ……

「！」
角笛の音だ。やっぱセシルが先に出くわしたな。
けど何だ？　この妙にくぐもった音。まるで室内の音を外から聴いたような……。
「あ、洞窟の中か」
それに気付いて、採集したキノコをポーチの中に入れ、走り出そうとした。が、顔を上げた俺の視界に飛び込んできたのは、奥の茂みの陰から見える桃色の毛並み……。
“しまった、コンガか……これの匂いに勘付きやがったな？”
体勢を低くして道具ポーチの中にある、今入れた幾つかの特産キノコを見る。
“ランゴスタの次はコンガか……ったく、次から次へと……”
心の中で小さく舌打ちするが、自然の中にいるんだからこればっかりはしょうがない。
コンガは樹木の多い地域に棲む、四肢の発達した猿のような外見のモンスターだ。縄張り意識が強く、侵入者には容赦なく攻撃してくるが、別の理由で攻撃してくることもある。その理由がキノコだ。
コンガは雑食性だが特にキノコを好む。キノコを持って遭遇すると有無を言わさず襲ってくるし、鼻が利くので今みたいにキノコの匂いを辿って追われたりする。
“でもまあ、無理に相手する必要はないな。……幸い、まだこっち

には気付いてないみたいだし、このままここを離れるか……”
既にこのエリアのキノコは全て採集し終えた。俺は体勢を低くしたまま、しきりに鼻で周囲の匂いを嗅いでいるコンガに、気配を悟られないようにエリアから脱した。

角笛の音が鳴らされた洞窟は、複数ある密林の洞窟エリアの中でも最大の広さを誇る空間だった。洞窟の中だが過去の崩落の影響でできた壁の大穴で内と外がつながっていて、また、当然日差しも入ってこないため、風通しが良くて涼しい。足を踏み入れると、直射日光に晒されて汗ばんでいた肌を、ひんやりとした空気と風が撫でる。

「グオオオォォ！」
到着するなり大きな牙獣と赤い鎧が向き合っているのを見た。ドスファンゴとセシルだ。侵入者に敵意を剥き出しにして突進してくるドスファンゴを、セシルは軽くステップしながら紙一重で躱している。散々心配していたが杞憂だったみたいだ。まるで踊るようにドスファンゴを軽快に翻弄するセシルの表情は『全然余裕』といった様子で、むしろどこか楽しげにも見える。
「セシル！」
セシルは俺の呼び声に振り向くと、二パッと笑いながら俺の元へ駆け込んだ。それを逃がすまいと、後ろからドスファンゴが追い掛ける。
ハンマーのグリップを握りながら俺も走り出し、セシルとすれ違い様に両手に持ち直して構える。
「サンキュな！　生肉頼んだ！」
「ＯＫ♪」と手を振りながらセシルが洞窟から出て行ったのを確認すると、俺は顔を引き締めて眼前に迫るドスファンゴに向かい合った。
“でけえ……クイーンサイズはあるな”

ブルファンゴのリーダーだけあって大将の風格があるのは今更言うまでもなかったが、真ん前から見て気付いた。こいつは立派なボスだ。牙獣と呼ばれるに相応しい立派な牙は左右非対称で、先端は左右共に歪(いびつ)に削れている。急速に接近してくるにつれ、空気の圧が先んじて前方からのしかかって俺の身体を刺激する。

呼応するように昂(たかぶ)る感情を抑え、脚は走らせたまま肩の力を抜く。視線を奴と絡ませ、しかし視野は広く保ち、奴の身体全体が収まるように視界を調節する。

もろに正面衝突しそうになるその直前、体を捻って抑えていた闘争心を解き放つ。

「ハアッ！」

ズドン！　と、ドスファンゴの頭にハンマーを打ち込む。力を込めた一撃はドスファンゴの突進の勢いを完全に相殺して奴を停止させ、加えて左目も潰して、赤い血が奴の目の窪みから溢れ出た。

ベチャッ

“……ん？”

「グ、オオオォォォ！」

激痛に怯むドスファンゴ。初撃は上手くいったが本来ボスクラスのモンスターの正面に立つのは得策ではないため、俺は接近と同時に奴の側面に移動しようとする。

しかしドスファンゴは接近も追撃も許すまいと牙を振り上げて牽制してきた。迂闊に近づくハンターを弾き返す強力な攻撃だが……これには奴の『癖』が出る。

さっきも言ったがドスファンゴの牙は左右非対称だ。で、この左右での牙の長さの違いだが、どうやら人間で言うところの利き手の差がそのまま出ているらしい。つまり、攻撃やその他の用途に於いてよく使う方の牙は必然的に短くなるというワケだ。

奴を見ると、俺から見て左側……つまり奴の右側に生えている牙の方が短くなっている。咄嗟(とっさ)の状況ほど自らの癖が出易くなるのは人間と一緒らしく、案の定ドスファンゴは右に向かって牙を振り上

げ、時計回りに身体を回転させて牽制に出た。
が、ここまで事細かに分析しといてそれをむざむざ喰らうほど俺もアホじゃない。最初っから冷静に奴の左側面に移動しておいた俺は一発のダメージも被ることなく、連続の打撃を二発、三発、四発と、人間で言うと側頭部に該当する箇所にピンポイントで打ち込んでいく。
ベチャッ！　ヌチャッ！
“こいつ……濡れてる。泥でも浴びたか？”
初撃で感じた水音がまた聴こえた。てっきり泥かと思ったがそうじゃなく、妙にぬめっている透明感のある液体にドスファンゴは塗れていた。
首を傾げるが今は狩りの最中だ。目の前の敵に集中しなきゃならない。
「グオオオォォ！」
側面から攻撃し続ける俺を追うように、我武者羅に牙を振り回してドスファンゴは暴れた。
その牙に当たらないように、俺は奴の脇をくぐり抜けて奴の後方に陣取る。
いつまで暴れ回っても一向に手応えがないから冷静になったのか……、ドスファンゴは回転を止め、右目を見開く。だが、そこに縄張りに侵入した俺の姿は無い。片目の利かない狭まった視界の中、怒りにうち震える牙獣の猛者は俺を探そうと鼻息を荒げて躍起になっていた。
「こっちだ」
声のした俺の方向に勢いよく振り返るが、それは奴にとっては致命的なミスだった。奴は振り返る動作にも癖を出してしまい、先ほど同様に時計回りに俺の姿を追おうとしたのだ。
俺は奴の振り返り様に渾身の一撃を見舞う。ほとんどの生物の共通の弱点である目を再び狙い、右目も潰して奴の視力を奪った。直撃した際、奴自身が振り返った勢いもあってダメージはかなり大き

く、おまけに度重なる頭部への打撃が功を奏して、奴はふらついて仰向けに派手に倒れた。
『めまい』だ。これは打撃武器、それ以外ならボウガンの徹甲榴弾の専売特許とも言うべき現象で、頭部へ集中攻撃すると対象を一定時間全く無防備な行動不能の状態にすることができる。
決定的な好機を逃さず、身体の奥底に眠る狩猟本能を呼び覚まし、ハンマーを奴目掛けて打ち降ろす。
「っしゃあ！」
まだだ。
「オラァ！」
まだ足りねえ。
「ウラァァ！」
もっと！
「ウリャアアアア！」
もっとだ！
「ドオリャアアアアアアアア！」
時間にして十秒くらいだろうか……その間に厚い毛皮に覆われたドスファンゴの大きな身体は、俺の打撃によって所々が陥没していった。クイーンサイズの立派なボスだけあって、これだけの攻撃を受けながらも力尽きることなく、朦朧とする中でも意識をつなぎ止めようと足掻こうとした。
が、
「グオオオオッ！？」
バチバチと痺れるような新たな衝撃がドスファンゴを襲う。『シビレ罠』という砂漠に棲息する小型の肉食竜、ゲネポスの牙の麻痺毒で対象を拘束する罠だ。攻撃を終え、未だ昏倒するドスファンゴの隙を突いて今仕掛けた。
“よくよく考えるとハンマーで散々シバかれた挙句にシビレ罠とか絶対キツいよな……今、楽にしてやる！”
罠に苦しむドスファンゴの負傷した顔面部に、すかさず俺は『捕

獲用麻酔玉』を二つ投げ当てる。
「……グオオォォォォ……」
なけなしの集中力で意識を保っていたドスファンゴだったが傷口に麻酔薬が浸透したために、遂にその意識は深い眠りに落ちた。大きな寝息を立てながら相変わらずの仰向けの体勢だ。
「うっし……、依頼達成……」
ハンマーを腰に仕舞う。食材確保と同時に商隊の懸念も解消……と、言いたいところだが、俺は何か物足りなさを感じた。
“随分呆気なかったな……本気で打ち込んだけど、それでもあの程度で捕獲できるくらいにまで弱るか？”
しかもクイーンサイズ級のこれだけデカいヤツが、だ。体が大きければ必然的に生命力がついて、その辺の同じドスファンゴよりもずっとタフになる。にも関わらずこいつはここまで弱っちまった。

……

「ま、捕まえられたから良しとすっか」
何はともあれ依頼成功だ。あとはコイツを縛りあげてベースキャンプから台車を持って来て……、セシルには牽引用のアプトノスを連れて来てもらうか。
“セシルはどこだ？　アイツさっき海岸の方に出たから……そこから生肉集めにいくなら、俺がコンガを見かけたとこに多分行って……ん？”
セシルの行き先を予想しながら飲料水代わりに元気ドリンコをグイッと飲んでいると、今しがた捕獲したドスファンゴの身体が目についた。
近付いて間近に見てみると、改めて正体不明の液体の異様さを知った。
俺はそれに、軽く触れた。

“痒い……こりゃ泥じゃねえ、酸だ……”

その時だ。

ブオオオオオ……

「！？」

角笛の音……、聞き間違えかと思った。クエストを受注した段階で、密林に出現するボスクラスのモンスターの活動周期も同時に把握してここに来た。

今この周辺の密林にはドスファンゴしかいない。俺はギルドの前もった調査でそう確認している。

だから……今聞こえたのは聞き間違えかもしれないと、俺は思った。

しかし、

ブオオオオオ……

「……」

再び聞こえてきた角笛の音。

今日これまで、密林を歩き回ってるから俺は知ってる。今この密林に俺ら二人以外にハンターはいない。そうなると必然的にこの音の主はセシルだ。

俺もハンターだ。角笛の音を二度も聞き間違えたりはしない。つまり、

「セシル！」

セシルに何か予期せぬ事態が起きたとしか考えられなかった。しかも角笛を二度も吹く程の何かが、だ。

捕獲したドスファンゴもそのままに、俺は音の方角へ急いだ。音の聴こえた具合からすると……場所は同じ洞窟内……。

“『ランポスの巣』か！”

『ランポス』は密林や森丘のような草木の生い茂る森林地帯に隠れ棲む、鳥竜種に分類される肉食竜だ。基本的に群れで行動する奴らだが、これまで遭遇しなかったところから察するに……さっき俺が捕獲したドスファンゴがこの辺一帯を縄張りとしていたから、恐らく群れごと追い出されたんだろう。

『巣』というなら今いるエリアも奴らの産卵場所があるから一応『巣』になるが、奴らの巣はここだけじゃない。奴らが獲物をおびき寄せる、狩り場となるエリアが存在し、そこも『巣』と呼ばれている。セシルのいる場所はそこだ。

“ツタを登った方が……ダメだな”

奴らの産卵場所であるここからセシルがいるであろうエリアまで直通できるルートがあり、そこは崖をツタを掴んで登るのだが……。

「またコイツらか！」

登った先々で待ち構えるようにランゴスタが飛び回っていた。これじゃ、どんなに登っても落とされちまう。

となると、

“迂回するか”

セシルが出た海岸側とは逆のルート……こっちの方がエリア一つ分近いから、とりあえずこのエリアの出口に向かって俺は走り出し、そのルートを目指す。

“でも……妙だな？”

俺は現在の密林の状況を整理する。まずランポスがいない。俺が見かけたコンガもセシルの敵じゃないだろう。大体からしてアイツが危機的状況から角笛を吹いて俺を呼ぶ時は、決まってボスと対峙した時だ。

“何だ？　何がいたんだ一体？”

深まる疑問と冷静に向き合うが、実際に見てみれば分かることだ。

俺は全力で地を蹴って、広大な地下空間を駆け抜けた。

第二話……Capture. And it is an accident.

第二話『捕獲。そして異変』でした。さて、一体彼女の身に何が起きたのやら……、コメディ描写が少ないですがその内入れたいと思ってます。それから引き続き感想等ございましたらどうぞよろしくお願いしますm（__）m

第三話……遭遇（前書き）

第三話でございますm（__）m

第三話……遭遇

ユノンがドスファンゴと対峙した洞窟の外で、海岸に出ていたセシルは崖側のエリアへと坂道を上って移動していた。

“ランポスがいないってのは助かるな～♪”

セシルは順調にアプトノスの肉を集めていた。普段ならランポスの妨害があったりするのだが、密林をドスファンゴが縄張りとした今日の今現在まで、遂に一匹の姿も見ることはなかった。それというのもドスファンゴの性格によるものが大きい。

ドスやブルなどのファンゴは総じて気性が荒く、また、ハンターを縄張りから積極的に排除したがる傾向にあるのはよく聞く話だが、これは彼らの種としての祖先であるイノシシが古くから狩猟の対象とされてきた動物の一つで、そのせいで非常に神経質で警戒心の強い動物になってしまったことに起因する。

彼らを捕食してきたのは何も人間だけではない。先述のランポスのような肉食竜からも、彼らは餌としての扱いを受けてきたのだ。

祖先より大きく、より強靭に進化したファンゴは本能的に祖先の警戒してきたものを理解しているとされており、そういった理由でドスファンゴの矛先はランポス達にも向けられ、そしてランポスを始めとする肉食動物達は密林を追われているのだ。

“でもアプトノスはいるんだよね”

余談になるが彼らは余程のことが無い限り草食獣を襲わないとされる。これは彼らの食性による。

ファンゴは草食に傾倒した雑食（植物：動物＝９：１程度）であり、そのため同じ草食で、彼らに対して害意を持たないアプトノスや、その他密林を代表する草食モンスターの『ケルビ』などは、攻撃する必要がないらしい（その証拠に同じエリア内でケルビ等と共生しているところが発見されている）例外があるとすれば彼らと食性が近く、見境なく食い荒らすコンガで、餌のキノコを巡って争う

ことがあるようだ。
「こりゃ楽勝だね」
日はまだまだ高く、日差しは容赦なく照りつけるが、ユノンの注文に没頭するあまり、いつの間にか暑さもそれほど気にならくなっていた。
セシルは背の高い木々がほとんど生えてない、見通しの良い広場を軽い足取りで走り抜ける。崖上にあるので落ちれば危険だが、セシルは気にした様子もなく慣れた具合に構わず進んだ。
この辺りのエリア同士を繋ぐ道は崖側に面していて、また、老人でも楽に行き来できそうなほどに、なだらかな坂道である。日差しを遮る木々はないが広大な密林の絶景を一望できる為、景色を楽しみたい者にはかえって好都合と言える。セシルもその一人だ。
緩やかな傾斜を、重力に逆らわず駆け降りる。
向かい風……、思い切り吸い込むと、雨の後の森のような心地良い匂いが、セシルの胸を一杯に満たした。
眼下に広がる緑の絨毯は、彼女の目にいつも眩しく映った。

「ん、もうちょっと欲しいかな？」
背の低い草木が疎らに生える崖上のエリアで、ふと、セシルは雑菌の繁殖を防ぐ抗菌仕様の袋を覗き込み、袋の中の肉の量に不満気に唸る。しかし、彼女は草食竜の出そうな目ぼしいところは粗方探していたので、難しい顔をしてうんうんと更に唸った。
「……ん？」
首をひねっていると、たまたま顔を向けた先に洞窟内部に続く入り口を見た。今しがたユノンと合流した洞窟とは別のルートの洞窟。その先は……
「『ランポスの巣』、だよね？」
そこまで言ってセシルは以前ユノンから聞いた事を思い出した。
ランポスが拠点としている根城の一つであるこの『巣』ではラン

ポスが群れで蔓延っており、たまにうっかり迷い込んで来るアプトノスやケルビのような草食モンスターを襲うことで飢えを満たしているという。　しかし、ある時間帯に全てのランポスが餌を探しに外部に出払うというタイミングがあり、それと入れ違いにアプトノスが草を、あるいは桃毛獣コンガがキノコを食べに『ランポスの巣』に入っていることがあるらしい。今がその時間帯なら、セシルにとっては願ったり叶ったりであるが、そもそも今の密林にランポスはほとんどいない上に、いたとしてもドスファンゴを警戒して身を潜めているのだ。この好機を利用しない手はない。

「ダメ元で行ってみよっかな？」

セシルは『ランポスの巣』へと入って行った。アプトノスがいれば良し。最悪ランポスやコンガに出くわしても、引き返してベースキャンプに戻ってユノンを待てば良いと考えた。

“集まらなかったものはしょうがないよね”

普段はユノンの店の食材を凄惨に扱う彼女だが、人間の都合で草食獣・竜を乱獲して無闇に生態系を乱すワケにもいかないという自覚ぐらいはちゃんと持っていた。

「ん～、やっぱり洞窟は涼しい～♪」

この日の外はいつもより風が吹いていたので、普段の密林の気候に比べれば幾分か過ごし易かったが、それでも熱帯の日差しに変わりない。洞窟の入り口の日陰に入ると気温ががらりと変わって涼しくなり、やはり日の光の有無の差は大きいと言えた。

セシルにとっては本日二度目となる洞窟エリアは、天井に開いた大穴から陽光が降り注ぐ……謂わば『洞穴』と呼べる場所だった。この穴は大型のボスモンスターの出入り口になり、そのため、ランポスやコンガが出現するぐらいで他に大した障害もなく休眠し易い環境であるのも相まってか、飛竜種や牙獣種はここを専らねぐらとして使う。

狙い通りアプトノスの小さな群れが、地面に僅かに生えた草を食べに来ていて丁度好機だったようだ。しかし、アプトノスよりも目

についた存在があり、それはセシルの意欲を減退させる。
「ブブブブ……」
ランゴスタである。普段のセシルであれば気にも留めないところだがこの日は違った。
ランゴスタは通常であれば一つのエリアに二、三匹程度が獲物を求めて徘徊するように飛び回る。が、王立学術院の調べによると定期的に密林で大繁殖することが判明しており、その時期に於いては密林の広域に渡る様々な区画でこの甲虫種が大量に見受けられる。恐らく今日はその時期の真っ只中なのだろう。
「……うへぇ」
セシルがざっと見て恐らく二十匹以上が大して広くもない洞穴の中を所狭しと飛び回っていた。奴らがいなければこの岩の部屋は清閑なはずである。しかし今は一匹一匹の羽音が重なって怖気のするような不協和音が耳に障り、そのような時期でなければ原始的な魅力に満ちた天然の洞穴は、目に見えて不快さが付きまとう羽虫（はむし）の楽園と化していた。明らかな異常発生だ。
そんな中で平然と草を食べているアプトノス。このアプトノスだけがずば抜けて無神経なのか、それとも全ての草食竜が甲虫種に対して無関心なのかは不明だが、いずれにせよ多くの人間（ハンター）がランゴスタに刺される被害が相次いでいるこの世界で、その光景は皮肉にもとれるシュールさがあった。納得するには首肯し難いが。
「そ、それはともかく」
何であれ折角見つけたアプトノスである。殺気に勘付かれて逃げられるわけにはいかないので、セシルは迫り来るランゴスタを適当に無視し、足元のジャリジャリとした砂地を鳴らさないように腰を屈めて慎重にアプトノスへ近付いた。その甲斐あってアプトノスの群れはセシルの接近に気付かずに未だ暢気に草を貪っている。
“……よし！”
充分に接近し、既に片手剣の刃の及ぶ距離にまで迫った。
セシルは頭を低くした姿勢から立ち上がり、レッドサーベルを抜

き放つとほぼ同時に斬りかかる。セシルに気付いたアプトノスの一匹が高い声で鳴き出して仲間に警戒を呼び掛けるが、その声に反応するより前にセシルの刃が彼らを襲った。
アプトノスの首に向かって大きく跳び込みながら縦に斬りつける。アプトノスの皮膚は貧弱な武器でも容易にその刃を通すため、セシルの攻撃に首が大きく裂けて鮮血が飛び散る。
まだ小さい幼竜を狩るのには流石に気が引けたが、セシルは良心の呵責に耐えながらアプトノスから肉を剥ぎ取った。
集めた生肉を袋に詰めると袋はパンパンに膨れた。それを見てようやくセシルは満足そうに笑ったのだった。
しかしそこに、
「あ痛！？」
ガッ、と空中からランゴスタが頭部防具（ヘルム）目掛けて体当たりの攻撃を仕掛けてきた。セシルを獲物と見なしたのだ。
ランゴスタの捕食対象は多岐にわたり、時には自身よりも遥かに大きい体格の生物を襲うこともある。ならば人間などは当然のことながら捕食の範囲内に入り、そして一度目を付けられたが最後……ハンターは彼らに執拗につけ狙われることになる。
「ちょ、ちょっと待ってよ……」
言いながら身を屈めてランゴスタの尾針から逃れようとするセシルだが数の不利が圧倒的だった。先ほどの攻撃に飽き足らず、他のランゴスタも次々にセシルを刺そうと距離を詰めて迫る。
どこに身を置いても目の前を飛び交う羽虫達を、元々生理的に虫類を受け付けないセシルは遂に我慢できなくなって切り捨てた。
「もー！　気味悪いなー、もー！」
苛立たしげに片手剣を振り回すセシルと、バラバラと散っていくランゴスタ達。
一つ振る毎に二匹以上は必ず仕留められるところを見ると、先ほどよりもランゴスタ達はその数を増やしているようだった。
その事実に余計に嫌悪感を募らせたセシルは、一刻も早くここか

ら去ろうと泣きそうになりながら踵を返した。
しかし、
「……え？」
セシルの進行方向に塞がるように一匹、二匹、
「ブブブブ……」
三匹、四匹、
「え、ちょ……！」
「ブブブブ……」
十、十一、十二……。洞穴には他のエリアに繋がるルートが幾つかあったが、ぐるりと見回すとその全ての行く手をランゴスタの大群に阻まれていた。
周囲は生きたランゴスタの群れ。足下には散って砕けた群れの残骸。洞窟の天井にぽっかりと空いた穴から差し込む日差しがそれらの黄色と紫の縞模様をギラリと気味悪く照らした。
“な、何、何、な～に～！？”
明らか異様な雰囲気に、セシルは脚が竦(すく)んで立ち尽くしてしまった。
その時、
「ブブブブブブブブブ！」
群れの有象無象よりも抜きん出た一際大きな羽音に、異質な気配。天井から射し込む陽光が形作る足下に映るセシルの影が、『それ』の影に覆い隠された。
「……」
ぞくりと背筋に怖気が奔り、セシルの額を冷や汗が伝う……、振り返りたくない、後ろにいるはずであろう『それ』を認めたくない……、しかし頭の中でどれだけ自分に言い聞かせて危機的状況から逃避しようとしても何か変わるはずもなく、それは彼女も本能的に理解していたために……意を決して振り返った。
「ヒッ！」
『それ』を見てセシルが思わず仰け反ったのは生来の虫嫌いが災

いしたのはもちろん、本来のクエストとは全く関係のないイレギュラーな遭遇だったからに他ならなかった。

『クイーンランゴスタ』

女王虫と呼ばれる超大型のランゴスタ。呼称の通りランゴスタを統率する女王的な存在で、陽の光を透かして七色の彩りを見せる翅(はね)は美しいが、外殻は通常のランゴスタ同様黄と紫の縞模様、しかもその巨体のせいで幾分も禍々しい。

“な、何でクイーンランゴスタが！？”

ワケも分からずセシルは挙動不審に陥ったが、クイーンが現れた理由なら既に彼女の足元に散乱していた。

通常、クイーンは密林や樹海等にある背が高く幹の太い巨木の中に巣を作り、また、年間通して巣に篭って卵を産み続ける為に普段はハンターの行き来するエリアに出てくることはない。

だがクイーンの従える兵隊ランゴスタが大量に失われ、群れが危機に瀕すれば話は別である。そして、今に至るまでに洞窟の床一面をランゴスタの死体だらけにしたセシルはまさしくクイーンの怒りの琴線に触れたのだが、彼女にはその自覚が無い上に、それどころではなかった。

にじり寄るようにセシルに接近する、女王の虫特有の複眼には彼女しか映っていない。慌ただしく翅を動かし、縦横無尽に飛翔しての威嚇行為……、明らかに激怒していた。

「ブブブブブブブブ！」

「ち、ちょっとちょっと！」

産まれて初めて目にするクイーンランゴスタに、青ざめた顔で泣きながら『ランポスの巣』から逃げようとするセシルだが、彼女の行く手に新たに現れた数多の兵隊ランゴスタが遮る。

その兵隊の隙を突こうにも、女王虫が空中で左右に素早く飛行して彼女の進行方向を塞いだため、巧く逃げ出せない。

時には飛竜を相手にする（要ユノン）彼女だが、甲虫類は生理的にダメだった。しかも対峙するのは尋常ではないサイズを誇る女王虫。尚の事無理である。

「そうだ、角笛！」

ブオオオオオオ！

洞窟に雄々しい笛の音が響く。

しかし、角笛の音はモンスターの意識を惹きつけ、気性を昂ぶらせる性質があり、現に今も女王虫とその配下の兵隊を興奮させてしまっていた。

だが勝算がないワケではない。

“ユノンがさっきの所にいるなら、すぐに来てくれるはず！”

女王虫達に殺られるのが先か、ユノンが来るのが先か……、しかし逃げ切る自信はあったので勝てる賭けだとセシルは踏んでいた。

ブオオオオオオ！

セシルは可能な限り笛を吹き続けた。とにかく緊急事態を伝えようと必死だったが、同時に女王虫達も昂ぶって機敏に飛翔する。緊急を知らせるはずの角笛は、彼女を窮地に追い込む魔笛と化していた。

「あ！」

強く吹いた拍子に角笛が砕ける。一定の確率で壊れるのはセシルも知っていたが、今のセシルにとっては絶望以外の何でもない。

「ユ、ユノ〜ン！　助けてええええ！」

泣きながら叫んで狭い巣の中を逃げ惑うセシル。片手剣を無茶苦茶に振り回してランゴスタを切りながら角笛の音で更に興奮した女王虫達から逃れようとしていた。

付かず離れずの距離を保ち、時に接近しては体当たりや尾針の攻

撃を仕掛け、所狭しと動き回ってセシルを翻弄する兵隊ランゴスタ達。
このままではまずい。今はまだ体力に余裕があるが、その内ジリ貧になるのはセシルにも容易に予想できた。
打開策はないものかとセシルが振り返ると、クイーンランゴスタの尾がぶるぶると震えていた。
“な、何？”
その様子を怪訝な面持ちで見ていると、女王虫は尾の先端から伸びる針をまるで照準でも合わすかのようにセシルに向けた。
そして、

ブシャアアアア！！

「うあッ！？」
女王虫の尾針から濁った液体が射出され、セシルは突然の事態に反応できずにそれを頭から被った。
「きゃあああああああ！！」
悲鳴を上げるが、何も出来ずにまともに浴びてしまったセシル。しばらくして射出は収まったが、セシルはその場にぺたんと疲れ切った様子で膝をついた。
「な、何で？　力が抜けて……」
自身の身に何が起こったのか分からず、纏わり付くように全身に付着した液体と、突如として襲い掛かって来た疲労感、そして言いようのない恐怖にセシルの顔が青冷める。
一般のランゴスタの麻痺毒と異なり、女王虫は浴びた生物の防御力を低下させる毒液を体内に持つ。これがクイーンランゴスタの最大の特徴であり、対処としては耐久力を一時的に上げる『忍耐の種』でもあれば良いが、ただでさえイレギュラーな女王虫の出現である。此度の彼女にそんな持ち合わせは当然無い。
「イヤ……、嫌ぁ……」

呆然としている間に大きな羽音を立てて、徐々にセシルに接近する女王虫。セシルは腰が抜けて上手く声が出せず、鉛でも詰まったかのように重い四肢を何とか動かして、へたり込んだまま後退りした。が、遂に壁に追い詰められてしまう。

ブブブブブブ！

羽虫の女王は尾をグッと引き、その先端で妖しく輝く針をセシルに向けて穿とうとした。

セシルは絶体絶命の状況から、身体はガクガクと震え、目からは大粒の涙が零れた。

「ゆ……、ゆの……」

喉の奥からは不規則な呼吸と儚げにユノンを呼ぶ声が漏れる。しかし小さ過ぎる声はユノンには届かず、目の前で不気味に羽ばたく女王虫には尚の事その想いは通じる事はない。

命運を悟った故か、涙で揺れるセシルの視界が白く染まり出した。

その時――

「こっち向きやがれ、虫野郎がああああ！」

突如聞こえた雄叫びに、声の方角を見るクイーンランゴスタだったが反応が遅い。

ズドンと、間一髪のところで駆け付けたユノンのハンマーの一撃を受け、クイーンランゴスタは洞窟の岩肌に叩き付けられた。

その拍子に虫類独特の色をした体液が飛び散り、崩れた岩壁から砂煙が巻き上がる。

「無事か、セシル！」

「ぎ、ギリギリセーフ……」

岩壁を背に座り込み、泣きながら情けない声を絞り出すセシルの無事を確認して、ユノンは一先ず安堵の息をついた。

「とんでもねえ奴が出てきたな」

「もうビックリだよ……、こっちは何の準備もしてないってのにさ」

ユノンに手を貸してもらい、立ち上がろうとしたセシルだが膝が崩れて再び座り込む。予想以上に衰弱が激しく、脚に力が入らないようだった。
頭を軽く掻き、「仕方ねえな」彼女の上半身を右腕で、両脚を膝左腕で膝から抱え込み、所謂『お姫様抱っこ』でセシルを持ち上げた。
「えへへ、楽チン♪」
「んなこと言ってる場合じゃねえな」
言われてセシルがユノンの視線の先を見ると……、

ブブブブブブブブ！

徐々に晴れてきた砂煙の中から、女王虫の輪郭が浮き出てきた。全快の羽ばたきが、残る砂煙を吹き飛ばし、軍隊が隊列を組むように兵隊ランゴスタが並んで飛翔する。
複眼にはユノンを映し、襲い掛かろうと尾針を構え、そして
ブシャアアアアア
先程のセシル同様に防御力を低下させる毒液を撒き散らした。
「セシル、すまん！」
「きゃん！」
急いでセシルを投げ捨てるように降ろす。そしてユノンは躱そうともせず、黙って毒液の洗礼を受けた。
「ゆ、ユノン！？」
叫ぶセシル。
毒液の射出は長く、ユノンは未だにそれを浴び続けている。クイーンランゴスタはこの愚かな乱入者に対して勝利を確信した。
だが
「・・・それが」
クイーンランゴスタはユノンの異様な気配に気付いた。
怒りと殺意。

クイーンランゴスタにとっては今まで幾度となく感じて来たものだったが、目の前の人間から感じ取ったそれは過去最大であった。
しかし、気付いたところで手遅れだった。
「何だああアアア！」
毒液の射出が続く中、ユノンは毒液を浴びながら踏み込んで渾身の一撃をクイーンランゴスタに見舞った。
狙いは、尾針。
まるで釘を逆向きに打ち込むかの如く尾針をハンマーで叩きつける。
尾針はクイーンランゴスタの体内にめり込み、そして防ぎ切れないハンマーの衝撃はクイーンランゴスタの尾の甲殻を破砕した。
ブ・・・ブッブッブブ
破壊された甲殻の隙間から蓄えていた毒液やら体液やらがびちゃびちゃと大量に溢れだす。
思いもよらぬ一撃で激痛に苦しむ事になってしまったクイーンランゴスタは怯んで後方へと飛び下がった。
しかし、見逃すユノンではない。
走りだしたユノンは、それこそ毒液を浴び続けたとは思えないような加速をみせ、そしてとどめの一撃をクイーンランゴスタの“胸”にあたる部分に叩き込んだ。
キーーーーーッ！
断末魔の悲鳴をあげながら、クイーンランゴスタは他のランゴスタのように四散した。ただし、体液を撒き散らしながら。
飛び散った体液は残りのランゴスタ達にかかり・・・司令塔を失ったランゴスタは“ランポスの巣”から飛び去って逃げて行った。
・・・
しんと静まり返る洞窟内。
ふうっと息をつくユノン。セシルの方に駆け寄り安否を確認する。
「セシル？無事か？怪我して無いか？」
膝を付いて目線を腰を抜かしているセシルに合わせて尋ねる。

しかしセシルの返事は無い。呆然としている。
「セシル？・・・お～い。」
目の前で手を振って意識を確認する。しかしセシルの目はユノンの目を真っ直ぐ見つめている。
と、
「・・・ヒック。」
「？」
「ぶえええええんユ～ノ～ン～！」
丹を斬ったように泣き叫びながらユノンに抱きつくセシル。あまりにも急だった為にユノンもたじろいだ。
「あああああああ怖かったよおおおおおお！」
「あ～・・・分かった分かった。よく頑張ったな？偉いな？」
ポンポン頭を優しく叩きながらセシルを慰めるユノン。ランポスが戻って来る前に帰りたいのだがしばらくそうやってセシルにされるがままになっていた。

第四話……「俺に言わせりゃドスファンゴに使えないトコなんざ無え！！」（前編）

とりあえず一区切りです。そんな第４話ですどうぞ。　m（＿＿）m

第四話……「俺に言わせりゃドスファンゴに使えないトコなんざ無え！！」

「え！？」

ビーバー食楽園の裏口の前で、ザザミ装備を外したグリーブ姿のセシルは驚きの叫びを上げた。

クイーンランゴスタを討伐した後、まだ麻酔が効いていたドスファンゴを縛りあげ、そしてビーバー食楽園の裏口前の火竜二頭分くらいはありそうな割と広い更地でドスファンゴを解体していたのだが・・・セシルはユノンの言葉に驚きを隠せなかった。

「お肉・・・使わないの？」

そう、ユノンは肉を使わないと言い出したのだ。しかしそれには理由がある。

「そりゃ使えないさ。ブルならともかくドスだと肉質が硬くて料理には出来ないよ。」

まあ中には硬めの肉を好む人もいるにはいるけど・・・と、補足しながらユノンはドスファンゴの解体を進めていく。

「じゃあ、前にご馳走してもらったドスファンゴの料理は？お肉使ってたじゃん？」

前に食べさせてもらった料理の疑問点をユノンに問うセシル。矛盾しているとセシルは思ったのだ。

「ああ尻尾は別だぞ？腹とか肩は歳取ったら硬くなるけど尻尾だけは肉汁が増すからな。」

それを聞いてセシルは納得した様子だったが、今度は残念そうな顔になった。

「何だか勿体ないね？こんなに大きいのに・・・。」

解体台の端に寄せられた大猪の牙を撫でながらセシルは眉を伏せた。

するとユノンは心配ないと言ってセシルに説明を加えた。

「肉は料理には使わないけど無駄にはしないさ。棍棒で叩いた後で

塩を塗り込んで天日に干せば普通のより質の良い干し肉ができるしな。俺が料理に使うのはそれ。」
　と言って指差したのはセシルが撫でている牙・・・よくよく見れば台の端は牙や骨が集められていた。
「・・・何？」
「大きな骨と牙でスープのダシをとるんだよ。ブルでもスープは作れるけど、ドスの方が旨味は格別だ。更に・・・」
　ユノンは言葉を区切って外して置いてたポーチをゴソゴソと探って何かを取り出した。それは――――
「特産キノコだ！」
「ついでに探しといたら結構生えてた♪こいつをスライスしてスープに入れりゃ文句無しだ」
「・・・」
「よだれ！　よだれ！　汚い！」
　言われて慌てて口元を隠すセシル。
「毛皮は？」
　口元を拭いながら残った素材の用途が気になったセシルは聞いてみた。
「・・・絨毯にでもして軒先に敷くかな？あんだけ剛毛なら靴底の汚れもよく落ちるだろうし」
　言いながらユノンは骨と牙、そして切って剥いだ尻尾の肉を纏めて持って裏口の戸を開く。
「さ～て仕事だっ。向こう一週間はドスファンゴのスープでグルメ達を楽しませようか！　セシル、味見一番乗り頼んでいいか？」
　洗ったザザミ装備を磨いていたセシルは味見と聞くや否や明るい笑顔を浮かべて
「うん！」
　大きく頷いた。

ＭＯＮＳＴＥＲ　ＨＵＮＴＥＲ　～ある料理人の珍事～

この物語は、今日も今日とて美食家達の予想もつかない豪快な美味なる料理を作りだす、一風変わった青年の珍奇なるお話である。

第四話……「俺に言わせりゃドスファンゴに使えないトコなんざ無え！！」（後

この話を思いついたのは近所の焼肉屋でテールスープを飲んでからですね。ふと“ドスファンゴって上手い事料理出来たりしないもんかな？”とかピンと浮かんだので（↑馬鹿です。一度考え付いたらモンスター全部食えそうな感じしてきたんですよ。とりあえずまたネタが浮かんだら書いていきたい所存ですm（__）m

第五話……肉にも色々ございまして（前書き）

２ヶ月ぶりの更新ですｍ（　　）ｍ　因みにサブタイは作者近況です。

第五話……肉にも色々ございまして

「おいユノン！ステーキ頼む！アプトノスで！」
「あいよ！」
「・・・」
「ユノン！俺もステーキだ！モスでな！」
「あい承知ぃ！」
「・・・」
「ユノンさん！俺達はブルファンゴでお願いします！」
「応！ちょっと待ってな！」
「・・・ん～？」
夕方のビーバー食楽園は忙しい。というのも、利用客の多くが意識の上で“昼過ぎには狩猟を終えたい。帰りたい。”と思うからであり、結果として日が沈みかける頃にちょうど狩場から戻ってくるからである。
尤も、今日多くのハンターが同じ意識を持っていたのは偶然の一致だが。
「んんんん？」
さて、そんな混雑したビーバー食楽園のカウンター席に今日も店主ユノンの幼なじみセシルは腰掛ける。
だけではなく何が腑に落ちないのかしきりに頭を捻っていた。その晴天の蒼色をした瞳が見つめるのは厨房から運ばれる様々な種類であるはずの焼かれた肉。“はず”というのはセシルから見ると全部同じ肉にしか見えないからである。
「ん？んん？」
「何さっきから唸ってんだ？」
尋ねられて捻った首の向きを声の方、厨房へ向ける。銀色に光る網の上でこれまた肉を焼いているユノンの怪訝そうな顔と目が合った。
「それ何のお肉？」

セシルは逆に尋ね返した。網の上の肉はジュージューと音を立てながら色を変え、ユノンがへらで返すと綺麗に網目の焼け跡がついて火の中に肉汁を落としていた。セシルは何とはなしにこの肉をブルファンゴの肉と予想した。

「ポポのフィレステーキ」

ハズレ

「んんんもおおおおお！！！」

次から次に、更にまた次々と出てくる数多くの肉にセシルは憤慨した。どの肉も見た目が似ている為に混乱を招き、ジタバタと悶えまくっている。

「・・・見苦しい」

尤もである。

ユノンにしてみれば質問を質問で返された上に突然店内で喚かれたのだ。“ビーバー食楽園”は一般の飲食店である。ギルドの酒場と同等の騒がしさが店内にあっても接客が大前提である以上笑い声は許されても喚き声はご遠慮いただきたいのだ。普通なら今すぐにでも首根っこ掴んで店の外に放り出すところだが――――

そこは長年一緒にいた幼なじみ・・・ユノンはセシルの気持ちをちゃんと理解している。

「昔っから分かんない事があると駄々こねるよな？お前」

ユノンは溜め息混じりにケラケラ笑いながらデザートの熱帯イチゴの盛り合わせをセシルの前に置いた。

果実特有の甘味と酸味が匂いを通してセシルの味覚を刺激する。控えめにかけられた琥珀色のシロップが不思議な光沢を与えるイチゴのデザートを恍惚の表情でセシルは頬張る。

「美味し♪」

他の作業に入るユノン。厨房の奥に見えるたくさんの籠から、ハーブのような綺麗な緑の葉を摘み取っては脇に抱えたボウルに入れていく。

籠がいくつもあるところを見ると何種類もあるようだ。

「ユノンはさ？たくさんお肉焼いてるけど、全部違いってあるの？」
腹立たしい程多種な肉を見せられたセシルはそれぞれの区別がどうしてもつかない。目の前の幼なじみは見分けがつくのか疑問だったのでぶつけてみた。
「全然違う」
きっぱりと、そう言った。
料理人を生業にしている以上、見分けられて当り前と補足するユノン・・・だったが急に何かを思いついたように片方の眉を吊り上げて見せる。
「よし、お前にレクチャーしちゃる。肉講義だ」

営業が終わり、給仕達の掃除も終わり・・・窓の外は暗く、夜の闇も濃くなろうというそんな時間帯。ユノンとセシルは変わらず厨房とカウンターという互いの位置で対峙する。
「ほい」
そう言いながらセシルの前にコトリと小皿を置く。皿の上には一口サイズのサイコロステーキ。
「何コレ？」
「何の肉だか当ててみ？コレは簡単だから」
言われて肉をフォークで突き刺す。厚みのある肉は驚く程すんなりとフォークを通し、ジュワッと溢れ出す肉汁は見てるだけで食欲を呼び起こす。良い具合に焼かれてはいるが見た目にはやはり他の物と見分けはつかない。
「ん・・・」
セシルは食べた。咀嚼する。柔らかいが程よく噛み応えがあり、良い食感だったがそんな事より真っ先に感じた特徴があった。
「・・・何だろ？良い匂い」
噛み続ける度に鼻から抜ける肉とは別の香りにセシルは気付いた。
嗅いだ覚えのある香り。それも、つい最近・・・

「・・・キノコ？」
「うん、キノコ。」
先日食べたテールスープの風味に近いものをセシルは感じた。
「コレもしかして・・・モス？」
「お、さすがに分かるか」
ユノンが出したのは特産キノコの群生地で狩られたモスの肉である。
モスはキノコを主食とし、剥ぎ取りの際に体内からキノコがそのまま出てくる程（つまり丸呑みする程）キノコを好物とする。
そのような生態である為に肉質は言わずもがな・・・キノコと密接な関係を持っている。
故にその肉、更に言えば今回の様な一級の肉ともなればキノコの薫りが立ち上り、美食家や高官等と取引される。
「次」
続いてユノンが出したのはやはりステーキだった。
しかし
「何かコレ・・・変」
その肉は瑞々しさがなかった。ジューシーでないとも言える。
「ん」
とりあえず食べて見るセシル。
「サーロインだけど、何の肉か分かるか？」
「・・・うぇ」
しばらく噛んで味わっていたセシルだったが、顔をしかめてフォークを置いてしまった。
「ドスファンゴ」
「当たり」
ニヤニヤしながら答えるユノンをセシルは恨めしそうに睨んだ。確信犯だったようだ。
「硬いし、パサパサしてるし、不味いよ～」
口に含んだ水で口直ししながセシルはユノンに余ったドスファンゴのステーキを突き返した。

「悪い悪い♪」

その後も肉の試食会は進んだ。
アプトノス、アプケロス、ポポ、ケルビ、ガウシカ・・・
多種なだけならまだしも背中や腹といった部位ごとの食感の違いまで教えてもらい、セシルは徐々に面白く感じていた。
「ふひ～・・・お腹いっぱいぃぃぃ」
「どうだ？肉って言っても色々あって人の好みも色々なんだよ」
厨房から片肘を突いてカウンター席を見やるユノンは自分で作ったまかないをつまみながらセシルにそう言った。
一方のセシルは欠片とは言え極上の食材を何種類もたらふく食べた為に、頬は緩みきって同い年の男の子の前にも関わらず無防備にまどろんでいた。
「これで、ユノンのお店にあるのは全部？」
「そうだな・・・いや――――」
肯定を否定に覆してユノンは氷結晶を敷き詰めた冷蔵庫を睨んだ。
「・・・何？」
ユノンのただならぬ様子にセシルは息を呑みながらもそう尋ねた。
その疑問に、長い間をおいてユノンは答えた。

「竜の肉って知ってるか？」

第五話……肉にも色々ございまして（後書き）

ドラゴンボール、ファイナルファンタジー、マッハＧＯＧＯＧＯ、色々実写化されてます。順番的にそろそろモンハンでしょう（↑何の順番だ。

第六話……リュウノテールじゃないそうです（前書き）

初めての方は初めまして。忘れた方も改めて初めましてm（＿）m厚かましくも未だ連載しとります。まあみっともない。

第六話……リュウノテールじゃないそうです

「竜の、肉？」
「ああ、市場にはほとんど出回らず・・・手に入ったとしても、ある程度腕のたつ料理人やキッチンアイルーしか扱えない食材なんだけど―――」
言いながら冷蔵庫を開けるユノン。ユノンより二回りは大きい冷蔵庫の中からは、敷き詰められた氷結晶の白い冷気が漂い出てきた。
ユノンは冷気の奥に手を突っ込んだ。
「冷たっ・・・え～一番奥の～冷凍スペースの～・・・」
ガタガタと冷蔵庫を掘るように探す。雑多な中が更に雑多になっていき、ユノンもそろそろうんざりしてきたその時
「あった」
見つけて引っ張り出した目当ての物は、肉・・・に見えなくもない紫に色味掛かった気味の悪い物体だった。
「・・・」
「絶句すんなよ・・・超高級食材だぞ？」
そんな事言われても困る。と、セシルは言いたくて仕方ない。それだけ強烈な存在感がある食材だった。
「まあ素敵・・・馬鹿野郎」
“素敵”までは笑顔（苦）だったが“馬鹿野郎”の辺りは真顔だった。
しかしそんな普段見ないセシルの一面にもユノンは臆せず、紫色の有機物を火にかける。
「それを食べろって？」
眉間に皺を寄せ真顔から渋い顔に変わりつつあるセシルを横目に、ユノンは黙って肉を焼き出す。
「睨むなよ・・・まあ見てろって♪」
嬉々として肉片を炙るユノン。現状で大概肉を食べたセシルはげん

なりした様子で見届けていたが、そんな不快感も覆す現象がユノンの持つ網の上で起こった。
「・・・！？」
セシルの見開いた目の先には・・・青味が徐々に消え、紫から赤にその色を変える魔法のようなステーキだった。
「凄い・・・」
「うっし！完成っと・・・まぁ食ってみ？」
ユノンは焼きたての肉を香辛料も何も付けずにダイレクトに皿に乗せてセシルの前に出した。
対面するセシルは先程の光景に驚いたものの、やはり満腹感は否めない・・・渋々、と言った感じでフォークを“竜の肉”に突き刺し、そしていざ食さんとしたその時、肉類でありながら何とも胸のすく良い香りがセシルの鼻腔をくすぐる。
「・・・♪」
さっきまでの憂鬱はどこへやら・・・期待大、といった感じでセシルは勢いよく頬張った。
「ん～♪」
肉の表面に染みでた肉汁が舌を刺激する。
――しかし、肉は噛んでなんぼである。
セシルは食欲のまかせるままに肉を軽く一噛みした。

「・・・」

一瞬沈黙。そして――――
「んんんん！」
セシルの身体が反り返り、手足がバタバタとせわしなく暴れ出した。
実はこの肉が毒肉で盛大に痙攣してるとかそういうワケではない。
猛烈に感動しているだけである。
「んんんんん～♪」
小踊りするように身体全体を跳ねらせるセシル。その目尻には涙が

大粒になって溜まっている。
それほどまでにこの肉の旨味は格別だった。
ブーツの底のような肉厚を感じさせない程柔かみのある肉。咀嚼で千切れた繊維からは極上の旨味のある肉汁がジュワっと溢れでる。
さらに――――
「お？おお！？」
〈攻撃力が上がった〉
〈防御力が上がった〉
〈体力が上がった〉
〈スタミナが上がった〉
〈自然回復力が上がった〉
ありとあらゆるステータスが上昇した。
「凄い！今なら火竜も素手で狩れそう！」
「・・・そりゃ無理だ」
使った金網を金タワシでガシガシと洗いながら、苦笑いでユノンは答えた。
「ねぇ♪ねぇねぇ♪♪コレってさ、飛竜のどこのお肉なの？」
これほどの逸品である。さぞや厳選に厳選を重ねた食材に違いない。
セシルはそう思っていた・・・が

「心臓。」

・・・
「・・・は？」
「まぁ正確に言うと心臓に付いた贅肉っつーか・・・内臓脂肪？」
「・・・」
「旨かっただろ？飛竜数百匹に一匹有るか無いかの激レア食材で――――」
「げろり」
セシルは皿に竜の肉（咀嚼済）を戻した。

「をい！」
カウンターへと身を乗り出してユノンは憤慨した。皿の上には一度セシルの胃に入りかけた肉が無惨に鎮座している。
「ドえらいもん喰わせてくれたね・・・私がレバーとか駄目って知ってるクセに」
「肉だっつってんだろ！お前な・・・お前なぁ！コレ一体いくらすると思ってんだ！？」
異様なまでに冷ややかな態度のセシルと鬼気迫るまでに怒り狂うユノン。
骨髄、延髄、そして“モノブロスハート”のような心臓ｅｔｃ・・・飛竜種の内臓器官は条件さえ満たせば保存のきくものが多い。今回の竜の肉もその一種である。
尤も、この肉はユノンの言うように内臓ではなく純粋に肉なのだが・・・
「だって・・・心臓なんて言われたら抵抗感あるし、あのお肉最初凄い色してたし・・・」
「～～～！」
後悔先に立たず。ふてくされるセシルに最初に説明すればよかったなどと考えたところで食材は生ゴミのままである。
ユノンはガシガシと乱暴に頭を掻きながら、今更ながら理由を話し出した。
「心臓に、近い肉はっ・・・栄養が、豊富なんだよ。新鮮な血が、ずっと、通ってたから・・・」
怒鳴りたい衝動を堪えてる様子が丸分かりだった。高級だろうがそうでなかろうが食材を無駄にされた事はやはりユノンには耐え難い。半分は自業自得だが。
「あの気味の悪い色はな、“鬱血”させてたんだ。腐ってたワケじゃない。あの一切れに飛竜の血が凄い密度で凝縮されてたんだよぅ」
崩れ落ちるようにカウンターに突っ伏し、今にも泣きそうな顔でさめざめと説明するユノン。

「鬱血って・・・食材として危なくないの？」
その通りである。細菌等の繁殖は冷凍できる環境ならば防止出来るが、それでも鬱血が続けば細胞に酸素が供給されない為、壊死するのが普通なのだ。
しかし今回は食感も舌触りも解凍した物とは思えないほどの肉質だった。疑問は尽きないがユノンの説明は続く。
「冷凍した状態が続くと質が落ちるのが普通だけどあの肉だけは別物だよ。あの部位は特に保存性が高いから。美食家達の間じゃ十年に一度っきりの食材で、百万とか二百万とかの値で取引される希少なモンだったのに・・・それを厚意で解凍して、焼いて、あまつさえ喰わせてやったのにお前ときたら・・・」
生ゴミと化した小さな肉塊を睨みながらユノンはいつかの女王虫に放ったような殺気を放ち出す。
「・・・ちなみにコレ、おいくら？」
ここへ来てセシルはようやく焦りだした。その様子を見るや否や、ユノンはそれはそれは恐ろしい作り笑顔でセシルの顔に迫った。
「よく聞け・・・お前が一回も力尽きずにリオレウス百匹討伐したって全然足りないくらいの額だ」
セシルは青ざめる他なかった。
「・・・どうしても金銭的に無理なら、今なら食材調達補助という肉体労働一回こっきりでチャラに出来る好条件を用意してるがどうよ？てゆうか手伝え」
「いいともー！」
滝のような汗を流しながらセシルは全力で了解した。そんな都合の良い取引があるなら受けない理由はない。
「ユノン料理長！その食材とは何でございましょうか！？」
最早なりふりなど構っていられるものか・・・おべっか見え見えの拙い敬語を喚きながら自らの獲物を確認する。
「・・・“霜降り肉”だ」

第六話……リュウノテールじゃないそうです（後書き）

セシル嬢のキャラが前回とかなり違いますが、キャラクター設定の段階でこの一面は確立してたのでイメージ崩された方はごめんなさいm（__）m察しの良い方はこの先の展開が大方読めたのではないでしょうか。次はなるべく速く更新致します。

第七話……渡る世間は金ばかり（前書き）

ご無沙汰してます。相変わらずの亀さん更新で申し訳ありませんm（＿＿）m文字数そんなに多くないクセに。

第七話……渡る世間は金ばかり

後日――――よく晴れた朝の空の下、アスタルトの首都には王城から街を目覚めさせる吹奏楽器の甲高い音色が響き渡る。
それに伴って街の様々な店が足早に開き出し、通りを行き交う人の数も増え、あれよあれよという間に賑わっていった。
「ふんふ～ん……」
そんな中、集会所へと向かうセシルの心中も晴れやかだった。
自分の食わず嫌いと勘違いで駄目にしてしまったユノン秘蔵の食材『竜の肉』大層破格であったその逸品はやはり弁償かと思いきや……食材調達を一回手伝うだけで不問にするという何とも都合の良い話を提示されたのだ。
乗らない理由は無い。リオレウスの狩猟およそ百回分に相当する額を一回の狩りで帳消しにすると言っているのだ。ランクが上位とはいえ、実質的な狩猟技術は下位レベルに等しいセシルは間髪入れずに快諾した。
そんなこんなで集会所に鼻歌混じりで向かう今日のセシルは――
「霜降り肉～、霜降り肉～……」
あわよくばつまみ食いしようという卑しさ満載だった。

「……うあ」
人でごった返す集会所。採集から討伐まで、あらゆる依頼がここで受注出来る。しかしここは酒場も兼　業している為、酒の匂いとヤニ臭さがこびり付いてどちらにも縁の無いセシルには些か苦痛だった。
顔を軽くしかめながら着くなりセシルはユノンの姿を探しだした……が、毎度毎度ビストロシリーズしか着用しない彼を見つけるなど至極容易だ。

「ユノ〜ン！」
ユノンは受付のカウンターで丁度受注していた。受注書にペンを走らせていた手を止め、振り返ってセシルと目を合わせる。
「おう」
いつもの互いの挨拶を済ませ、セシルはユノンの元へ寄る。ユノンは再びセシルに背を向けて受注書への書き込みを再開した。
「霜降り肉を採るんだよね〜？　何のお肉かな〜？　アプトノスかな〜？　ポポも美味しそうだよね〜？」
ユノンの背中越しにセシルは猫なで声でにじり寄る。言わずもがな、試食の催促である。
「ああ、採れたら食べていいぞ？　誰も食った事のない最高の『霜降り』をご馳走してやる」
振り返らずにユノンは嬉しそうにそう答えた。
「……？」
おかしい。あまりにもおかしい。違和感を覚えてならない。
いやにあっさりと頷いたのがセシルにはどうにも腑に落ちなかった。高級食材の弁償に最高クラスの肉質である霜降り肉を採りに行く事になり、厚かましくも（自覚はある）弁償して然るべきそれを試食しようなどと言ってる自分に対してこの気前の良さは一体何なのか？
「！」
そしてセシルは気付いた。ユノンが受注書をまるで『自分に見せないように』書いている仕草と、チラリと見えた受注書が採集を意味する緑色ではなく――
『討伐』を意味する赤色である事に……。
「……ねえ、ユノン？」
「何だよ？」
「何か隠してるでしょ？」

ピクリとユノンの肩が小さく揺れる。
そして動かない。動く気配がない。微動だにしない。正に不動の極みであり、怪しさ爆発だった。
「見せて！」
「お断りだ！」
ユノンを押し退けて依頼を確認しようとするが、当のユノンはまるでとびっきりの悪戯がばれそうになって焦って逆ギレした悪ガキのようにそれを許さない。
「サッ！」
「バッ！」
「ササッ！」
「ババッ！」
セシルは高速で動きながらユノンの先にある受注書を見ようとするがユノンも負けじとセシルの眼前を高速で塞ぐ。
中腰で向かい合った若い男女の互いに譲れない何かを賭けた奇特なやり取りを、周囲のハンターはやはり奇異の視線で見守るより他ない。
サッ！
バッ！
サッ！　ササッ！
バッ！　ババッ！
ササッ！　ババッ！　サッ！　バッ！　サッ！　バッ！
バッ！　サッ！　バッ！
両者一歩も譲らず、下らない攻防を繰り広げる事約数分。
いい加減見飽きた周りのハンターが散り散りになろうとした時、セシルの変化球がユノンを襲った。
「猫だまし！」
「うおっ！？」
両の手をユノンの目の前でパチンと叩いて怯ませる。誰しもが一度は経験する（確証無し）目眩ましだ。

「くっ……はっ！？」
ユノンが慌てて振り返った時は既に遅く、セシルは食い入るような前傾姿勢で受注書をバッチリ凝視していた。
「……！」
嫌な予感は当たる。
ジッと凝視した受注書の依頼内容は、セシルの期待を激しく裏切るものだった。

『フルフル一体の討伐』

セシルの額に流れる冷や汗が頬を伝い、やがて細く小さい顎に達して受注書にポツリと落ちて濡れた染みを作る。それが合図だった。
「ばいなら！」
素早く身体を捻り、板張りの床を蹴ってセシルは脱兎の如く逃げ出す。
「逃がすか！」
瞬時に集会所の出入口にまで移動するという驚異的な身体能力を見せたセシルだったが、それを遙かに凌ぐポテンシャルを持つユノンにあっさりと首根っこを掴まれてしまった。
「放してええええええええええ！」
じたばたとユノンの拘束から逃げだそうとセシルは泣き喚いた。あまりに予想外過ぎる展開だったようだ。
「ユノンの嘘つき！　バカバカH！」
「嘘なんてついてないし～？　バカでもないし～？　Hもしてないだろ～？」
完全に呆れ果てたような目と悪巧みを完遂させたほくそ笑みの、大層余裕げな表情を浮かべながらユノンはセシルの両こめかみを拳骨でグリグリと圧迫した。
「ひぎゃあ！」
頭蓋骨が軋んで凄絶な痛みが脳にまで行き渡り、セシルは泣き泣

き悶え苦しむ。涙腺は完全開放されてしまったらしい。
「霜、降り……って、『アルビノの霜降り』の事！？」
アルビノの霜降り……盲竜と呼ばれるフルフルという飛竜種から稀に剥ぎ取れる希少素材。因みに、非食用。
「アレって武器とか防具の素材だよ！？　食べれるワケないじゃん！」
「食の文化は常に進歩し続けてるんだ。俺も一人の料理人としてその進歩に貢献しなければならない。その為には『アルビノの霜降り』の食材化は成さにゃならん大義なんだ。分かるだろ？」
「知るか！」
ギャーギャーとうるさいことこの上なく、しかも出入口でバタバタ暴れ合う二人は邪魔で仕方ないはずだがこの二人はある意味ではこの街の名物なので周りの全てのハンター達から黙認されていた。
「ユノンの鬼ぃ！　幼なじみなんだから許してくれたっていいじゃん！」
「他の食材なら拳骨五発くらいで許してもよかったけどな……アレだけは駄目だ」
言いながらユノンは更に力を込めてセシルを折檻する。脳へのダメージがいい加減ヤバめになってきたセシルはこの窮地を如何に隙をついて逃げ出すか……、痛みで思考が途切れそうな頭で思案していた。
が、
「逃げようなんて考えんなよ……、言っとくけどな、俺がギルドに一声かけりゃお前をレウス百頭連続討伐に強制出頭させる事なんざ余裕だぞ？　それとも何か？　きっちり請求通りに金払うか？　ん？」
渡る世間は鬼ばかり……まさしくこの時のユノンの鬼のような形相をセシルは一生忘れなかったという。
「わ、私が生理的にフルフル嫌いなの知ってるくせに……」
セシルの『戦いたくないモンスターベスト3』は以下の通りであ

る。
3位↓リオレウス（※手強いから）
2位↓ランゴスタ（※トラウマによる〔第三話参照〕）
1位↓フルフル（※手強い、気持ち悪い）
しかして、セシルが如何に嫌悪感を主張しようとも、ビーバー食楽園の……ユノンの私物である食材を無下に扱ったというこれは、彼が訴えを取り下げない限り逃れようのない過失であり、それ故に彼女にはこの場に於いて行使できる一切の権限が無かった。
「ごちゃごちゃうるさい！　お前仮にも上位ハンターだろうが！　その辺のプライドがあるならフルフル一匹狩るぐらい黙ってやれコラ！」
ユノンの剣幕にセシルは押し黙った。
そうだ。
ハンターである限り危険などは付いて回って当たり前。ここで逃げても問題を先延ばしにするだけでいずれは否応なしに盲竜も狩らねばならないのだ。自分のため、あるいはまだ見ぬ誰かのために。
ならば今はただ泣いて見過ごすよりも果敢に挑んで正々堂々と困難に打ち勝つ事が重要であると……、などということは精神年齢が未だ幼いセシルが思うはずもなく、
「嫌だ放して私は帰る！」
焼け石に水だった。
「さ、沼地に行こうね？」
こうしてセシルにペナルティを食らわせるべく計画されたフルフル討伐クエストの火蓋は切って落とされた。
「あの～、すみません……」
「？」
かのように見えたが、突如として見知らぬ少女に声をかけられ、事態は少しだけ変化を見せようとしていた。

第七話……渡る世間は金ばかり（後書き）

霜降りっつったらフルフルでしょう。さて、いよいよ狩りの描写に入・・・りません。もうちょい先ですなｍ（　）ｍ

第八話……赤い青年と緑の少女（前書き）

ご無沙汰ですm（__）m　前回の引きを説明する回です。あとセリフの前にキャラのイニシャル置くのやめました。

第八話……赤い青年と緑の少女

遡ること数分前の集会所――

料理バカと只のバカが人目もはばからず騒ぎだす少し前……別のカウンターでは目つきの鋭い青年が受注書にペンを走らせていた。

青年の歳の頃は二十代前半といったところで、背丈は周囲のハンターより頭一つ分程高く、髪色は赤茶、切れ長の鋭い瞳も同じ赤茶で、一見スマートだが肩幅は広くたくましい。その青年は、剣士型のレウス装備を身に纏い、背中には東洋より伝来した反り身の片刃剣――『太刀』を背負っていた。

「……」

その後ろにはガンナー型のレイア装備をした少女が、そわそわと落ち着かない様子で青年が書き終えるのを待っていた。

幼く、あどけなさが残るが、ハンターとは思えないほど白く綺麗な肌、髪と瞳の色は青年同様赤茶だが色素が薄いのか、トーンが明るく柔かみがある。まるで上等な人形が動いているかのようで、通り過ぎるハンターの多くがその愛らしさに振り返り、目を奪われ、礼儀を知らない輩は声を掛けたり連れて行こうとしたりしていたが、青年の人並み外れた異様な眼力（殺意含）に気圧され逃げていったりと、受注書に記入するだけの時間でえらい騒ぎだった。

「……これで」

やがて記入が終わり、青年はペンを元の位置に差戻して受付嬢に受注書を渡した。

「はいっ」

受付嬢はにこやかに微笑んで受注書を受け取ったが、内容を確認するとそのままの表情で小首を傾げた。

「……パーティメンバー募集？　フルフル討伐に？」

言われて、青年は一瞬困惑した。たかがフルフル……、と思って小馬鹿にされてるのだろうか？　飛竜の中では中級に位置し、特異

な外見と攻撃方法を有する為、熟練のハンターでも討伐を避けたがるモンスターである。決してパーティメンバーを募っても可笑しくはないはずだ。と、青年の頭によぎったが勿論受付嬢はフルフルを侮ってるワケではない。

「変か？」

青年は一応聞いてみた。もし、ここのハンターズギルドに登録している多くのハンターにとって、フルフルが取るに足らない討伐の対象だとすれば、ここにいるハンター達の平均的なレベルは相当なものかもしれないと思って探りをいれてみたのだが、

「というより、難しいわよ？　この辺は素材的にもフルフルと縁の無い人ばっかりで、一緒に行ってくれるかどうか……」

青年が思うような理由ではなかったようだ。

言われて周りを見てみると……確かにフルフルの素材を使用している者は見られない。むしろ、もっと上級の飛竜や素材を使った装備をした者がそこかしこにいた。一応、青年の装備・レウスシリーズの基になるリオレウスも上級飛竜に位置してはいるのだが、青年のそれは下位のものだ。

モンスターには同種であっても上位と下位に分断され、上位モンスターは厳しい自然環境と生態系を勝ち上がり、更に数多くのハンター達を葬り去っている。その為外殻は多くの戦闘を経てより強固に、内臓器官も発達しているので、その強さ・討伐の難易度は下位とは雲泥の差が出る。

上位・下位の区別は、その素材を使った装備にも表れる。要領は同じでも、強度が違えば加工の方法も違うので、上位と下位のシリーズは同種のモンスターであってもデザインが若干違う。

そして青年がざっと見渡しただけでも、ほとんどのハンターが上位素材による装備だったので、平均的なレベルはかなり高いと言える。

「新規の契約で……」

と、青年は切り出した。要は自分を売り込んで他の人数に空きの

ある、尚且つ自分より経験豊富で強い人のパーティに参加させてもらおうという試みだったが、これは誰が呼んだか『寄生』と言われ、余程頼み込んでへり下らなければ成功しないし相手にされない。
「それも時間が掛かると思うわ。この王都にいる殆どのパーティは気心の知れた人同士じゃないと組まないし、それ以外はソロにプライド持ってる人ばっかりだし……」
だが、この意見も難しいようだ。
受付嬢がそう言うと、青年は眉間に皺を寄せ、切れ長の鋭い視線を更に細くして「う～ん」と唸り出す。端から見ると誰か殺しかねないような雰囲気に、彼の後ろに控えていた少女などは後退(あとずさ)っているし、周りの普通に酒を飲んでただけの連中も冷や汗だ。
受付嬢も難しい顔をして、
「この受注書も何かの被害があって来たものじゃないからね～」と付け加えた。
被害届がそのまま受注書になる例は少なくない。
村や里の襲撃、毒による環境汚染、貴族の私有地に巣作り等……そういった被害から来る類の依頼であれば、義理人情から自ら志願するハンターや、被害者の身内のハンター（いればの話だが）などもいるので、彼らと組めれば……と、受付嬢は思ったが今回はそれも期待出来そうになかった。
頭をしきりに捻り、それでも何とかしようと考えてくれる受付嬢に、青年は先ほどの困惑を反省して、大層好感を持った。しかし、やはり目つきが異様に悪い為、無愛想にしか見えないどころか先ほどの表情のままなので周囲に恐怖を振りまき散らしてる。
青年も首を捻る中、不意に受付嬢は、
「貴方達、この国に来てギルドに登録したばっかりだしね～……」
と言った。
そう、青年と少女はつい先日別の大陸から海を渡ってここ、アスタルトに来たばかりで今日などはギルド登録して初の集会所デビュー。しかし、今この瞬間に於いてはその事実は二人の首を締める。

王都内で顔が利くか通るか割れるかして、同業同士で顔見知りのよしみなんぞもあれば一抹の希望にも縋(すが)れるところだが、彼らにはソレすらなかった。
気風の良いハンターは割りと多いので、一～二ヶ月もすれば話も聞いてくれるのだが、いかんせん数日しか経ってない。
まさに打つ手なし。となると、いよいよフルフルの討伐は青年と彼の後ろに控えている少女だけで行かなければならないのだが、やはり青年には心許ない。

「ばいなら！」「逃がすか！」

と、不意に聴こえた悲鳴にも似た大声と怒号。
何事かと振り返ると入り口付近で、ビストロシリーズの青年とザザミシリーズの少女が取っ組み合って騒いでいた。
ユノンとセシルである。
「……何だアレは？」
訝しげな表情で青年は呟いた。当然である。今日び、ビストロシリーズなんていう見た目がふざけてるとしか思えない装備をしている奴が集会所にいれば、彼でなくとも同じような顔をするというものだ。
しかし、そんな態度をとるのは青年だけで、それ以外の周りの反応は至って冷静。それが当然の事のように無視する者、その騒ぎを酒の肴にする者、笑いながら野次って囃し立てる者もいる。
「あの二人、面白いでしょ？　ここの名物なの」
「いいのか？　かなり騒いでるが……」
窓口の受付嬢に向いている青年の後方出入口前では、セシルの両こめかみをユノンが両拳で圧迫している。そのまま持ち上げられて宙ぶらりんになっているセシルは、足をバタバタさせながら悲鳴をあげていた。
「別にいいのよ。私も他の人も見ていて楽しいし、それに他の人と

違って何か壊す事もないからねっ」
「……」
改めて出入口に向き直る。
周囲の連中はいい。
受付嬢の言った通り楽しげにそのやり取りを見物している。しかし当の二人はどうだ？　片やユノンは悪意丸出しの笑みを浮かべながら、血管が浮き出る程腕に万力を込めてセシルを弄り倒し、片やセシルはそれに為す術なく、相変わらず地に足のつかない状態で顔だけは凄惨なまでに歪んでいた。もとの顔立ちが可愛い為、その光景は余りにも惨たらしい。
（……助けるべきだろうか？）
まぁいらん世話である。
「ねぇねぇ、ユノン君達今度どこに行くって？」
受付嬢は先ほどユノン達が受けた依頼の内容が何なのか、ユノン達を受け持った別の受付嬢を呼び止めて確認した。
プライバシーに障る為、本来第三者に見せるべからずの受注書だが、ネタにされてなんぼのあの二人は例外中の例外なので最早見せびらかされ放題だった。本人には知らされてない（言えるワケがない）暗黙の了解である。
「これ」
色違いの制服を着た彼女の同僚はユノン達の受注書をぺらりと翻して見せた。
「……わおっ」
内容を見るや口笛混じりに同僚から受注書を手に取り、彼女は青年らを呼んでこまねいた。
「……？」
「？」
セシルを解放させるべきか悩んでいた青年と少女は、疑問符を浮かべながら受付嬢に近寄った。
「君達タイムリーだよっ。あの二人、フルフル討伐しに行くってさ

？」
「え？」
思ってもみなかった情報を知らされる二人だが、さっき言われたばかりの彼女の言葉を思い出す。顔馴染みでもなければパーティに参加させてもらえないのではないかと
「あの二人は大丈夫よ。来る人は拒まないし、男の子の方はこの辺じゃ三本の指に入るほどのハンターだしね！」
この国での信頼関係の何たるやを問い質（ただ）すつもりが耳を疑う事実が返ってきた。
「……とてもそうは見えんが？」
ユノンを見ながら青年は言った。やはりユノンの装備が気になって、俄（にわ）かには信じ難い。
とはいえ、ギルドとハンターの仲介役である彼女が出任せを言うとも思えない。何だかんだ言っても死と隣り合わせの業界であるために、半端な情報はハンターにとっては死に直結するし、ギルドにとっては信頼を失うからだ。
「何か、彼の強さを裏付けるものはあるか？」
疑うようで気がひけたが、それでも青年は確認せずにはいられなかった。
「彼……ユノン・ビーバーって名前なんだけどね？　彼の使う武器は『銀鍋【喜喜】』よっ」
「……鍋？」
一気に青年の不信感が爆発した。鍋を模したハンマーがあるというのは聞いた事があるが、それが一体何の証明になると言うのか？
それ以前に鍋ハンマーで狩りなどと、ハンター業を馬鹿にしているとしか青年には思えなかった。
が、
「『銀鍋【喜喜】』はね、あの銀火竜の堅殻から作られてるの♪」
「ぎ、銀火竜！？」
考えを改めるしかない事を言われた。

銀火竜とは青年の装備の基――リオレウスの希少種にあたるモンスターであり、その通称である。
外殻が赤い通常種や蒼い亜種に対し、名前の通り銀色の堅い殻と鱗に覆われているのが最大の特徴。
ただ希少種と言われるだけあって、個体数が極端に少ない。その為、目撃情報や依頼件数もほとんど無いに等しく、実際にその強さを知ってる人間というのは、如何にアスタルト広しと言えどもユノンも含めて極々僅かである。
そして、数少ない希少種の討伐履歴と現存する戦闘経験者の話を参考に、「全然情報足りないんだけど皆知らないのはいざって時に危ないからとりあえず……」的な前置き付きで一応公表された情報は、紙の上の話のクセして大いにおっかなかった。
公表によれば行動パターンは通常種とほとんど変わらないが、攻撃性と知能は既存の通常種のデータでは計り知れない程。取り分け知能の高さは異様で、一説ではハンターの投げた閃光玉（目潰しのアイテムで投げると発光するもの）を発光する前に口で捕らえて無効化した……とも言われている。
また、そのポテンシャルの高さと、主だった活動区域が禁制区（ギルドや王室関係の許可なくして入れない）の『古塔』としている事から希少種は常に上位以上の依頼に位置付けられる。
「彼が銀火竜の素材を持って帰った時は国中大騒ぎだったわよ～？特にユノン君は王様のお気に入りだからもう国をあげてのお祭り騒ぎでね～」
下位の通常種しか狩った事のない青年には気の遠くなるような話ばかりだった。
ここまで来れば青年はユノンへの認識を改めざるをえない。
「分かった。彼と一緒に行こう……いや、やらせてくれ。是非」
「じゃ、これはもう用無しね？」
受付嬢は青年の書いた受注書を笑顔で破り捨てた。
「遅くなったけど……ようこそアスタルトへ！　貴方達に大いなる

自然の精霊の加護と、勝利の女神の祝福があらんことを！」
目を閉じ、胸の前で手を組んで受付嬢は呟くようにそう囁いた。アスタルトに伝わるハンターを激励する言葉だ。
恐らくは型通りの口上文なのだろうが、それでも青年と少女は大いに勇気付けられた。
「色々ありがとう。助かったよ」
青年は嘘偽りない本心を告げて微笑んだ。目付きが鋭い割にその笑顔は凄く穏やかだ。
受付嬢は「仕事だからねっ」と照れくさそうに笑いながら窓口の奥に引っ込んでいった。

「さて」と青年は入口でまだ騒いでいるユノンとセシルに向き直る。後は二人に討伐に参加させてほしいとお願いするだけだ。
と、
「お兄ちゃん」
「ん？」
傍らでずっと静かに控えていた少女が外見通りの可愛らしい声を出して。青年を呼んだ。二人は兄妹だった。
「私が行こうか？　お兄ちゃんが行くと……そ、その……あの人達、怖がっちゃうと思うし……」
「うっ……」
どんどん声が小さくなりながらおずおずと妹は言葉に詰まった兄に告げた。
妹としても実の兄にこんな事を言うのは凄く気が引けるだろうが、前に籍を置いていたギルドではその生まれついての目付きの悪さから、青年の交渉はことごとく失敗していたのだからしょうがない。
「そ、そうだな。頼む」
青年は申し訳なくと思いつつも妹である少女に託した。兄として、いい歳した男として非常に面目なかったが、最後の希望を自分のせ

いで絶ちたくはない。
「うん！」
元気よく返事をして少女は入口へと……、
「嫌だ放して私は帰る！」
もとい煩さ(うるさ)が最高潮に達しているダブル馬鹿の所へと向かって行った。

第九話……国とギルドとギルドマスター

「へえ……兄妹でハンター」
ひとしきりセシルに無茶苦茶した俺は、声をかけてきた兄妹と適当に空いてた丸テーブルに座り、注文したホットのモーニングコーヒーを飲みながら兄妹から詳細を聞いた。
「……」
ダメージが余程大きかったのか、俺の隣のセシルはぐったりして死体のように動かない。
やれやれ……全く以てフィジカルが足りん。そんな有様だから一人でフルフルも満足に討伐できんのだ。
「ディーゼル・アバウスだ」
「妹のアニエスです」
「俺はユノン・ビーバー。こっちはセシル・ラ・フランね」
簡単に名乗った兄妹を交互に見ながら
「よろしく頼む」と右手を出してきた兄のディーゼルと軽く握手した俺だったが、怪訝そうな表情で彼の　顔をじっと見つめて固まった。
「……な、何か？」
俺のその視線に耐えられずディーゼルは聞いた。
「いや、何怒ってんのかなって？」
目付きがおっかな過ぎる。俺にはそんな風に睨まれる理由は一切見当がつかんのだが……。
「……生まれつきだ」
ああ、そりゃすまんね。何もない風を装っていたディーゼルだったが、内心かなり凹んだようだ。
「あ、そう……フルフル討伐に行きたいってのは何でまた？」
落ち込んだ様子のディーゼルを余所に俺は尋ねた。討伐する以上何かしらの動機があるはずだけど……

「ああ、武器を強化したいんだ」
言いながら背負っている太刀に軽く手を添えた。黒い鞘に納まったベーシックなスタイルをしたその刀　は、所々に大小様々な傷があるあたり、相当使い込まれているようだった。
「神楽か」
「ああ」
俺が言ってディーゼルが頷いた。彼の持つ太刀は『鉄刀』と呼ばれる高硬度の鉱石を主な素材とする武器で、鍛えるほどに粘りのある逸品になる。神楽はその鉄刀の最終段階にある太刀で、多くの鉱石を必要とする分、高い切れ味を誇る。
ただし全ての太刀に言える事だが、太刀はその繊細な構造上、切れ味を長時間維持するのが難しいというデメリットもある。
にしてもだ……一見すると三種の鉄刀は見分けがつかんにも関わらずディーゼルの愛刀を神楽と見抜いた俺。凄くね？　ほら、アバウス兄妹も驚いてるし。
いやまあ、フルフルを狩りに行くという予測できる情報があったワケだけどさ……
「フルフルの素材で強化っていうと『斬破刀』か」
「そうだ、電気袋が欲しくて二人で何度か討伐に行ったりはしたんだが、ことごとく時間切れしてしまって……」
「……ふむ」
話を聞いた中で俺はおおよその二人の狩りの腕を計っていた。下位とはいえレウス・レイアの装備を身につけているので、それなりに技術は高いと思っていたけど、それは沢山の血と汗と、それ以上に多くの涙を飲み、死に物狂いでようやく揃えたものらしい。
あまり腕は良くはないようで、それは後に当人達の口からも苦々しげに自己申告された。
「……なるほどね」
俺は頷くとカップをくいっと傾けて、ぬるくなったコーヒーを飲み干した。

どうやら二人は俺達（性格には俺だけ）の腕をほぼ宛てにしているようだったが俺にとって、それは別にどうでもいい。
「足手まといになるかもしれないのは重々承知してる。でも迷惑をかけるつもりはないんだ。危なくなったら見捨ててくれても構わない」
「いやそんな大げさな……」
言おうとしたが言い淀んだ。何も大げさな事じゃない。危険な自然の脅威の真っ只中に飛び込むのだから、危険と判断したらパーティに寄生する二人は見捨てられても仕方ない。
ディーゼルの言っている事は、寄生するハンターの最低限の礼儀だ。
しかしだ、俺にはそれはそれとしてもう一つ別の理由があったから、若干抵抗してるワケで……。
「いや、当初の目的としてはだな……こいつに一人で狩らせるつもりだったんだよ」
「え？」
言われてビクッと反応するセシル。力尽きたふりして話はちゃっかり全部聞いていたようだ。
自分の危険があわよくばなくなるやも、などと考えていたんだろうな。
……そんな虫のイイ話を許すワケねえだろうが。
「いいじゃん、連れてってあげようよ～。……困ってるんだし」
ここでずっとテーブルに突っ伏していたセシルがようやく顔をあげた。今の今まで顔を圧迫していた為、額のあたりが鬱血して赤くなっている。
端から見れば困っている二人を助けようとしてる風にも見えるが、その実「絶対一人で行くもんか」とか「道連れは多い方が」とか思ってそうだなコイツ……。魂胆が何とも小賢しい。
「一人で、ですか？　なんでそんな……」
妹の方が聞いてきたから俺は事の顛末を最初から説明した。

ウチが有名な食事処であること。セシルに振る舞ってダメになった秘蔵の竜の肉。罰として……てゆうか腹いせ同然にフルフル狩りを強制してること。ひいては『アルビノの霜降り』を手に入れて調理しようとしていること……。

説明を重ねる度に「理解できない」といった具合に表情が強ばっていったアバウス兄妹だったが致し方あるまい。説明している俺からして内容の支離滅裂さと自分の痛々しさに、嫌な汗掻いてきてるんだから。

先刻、セシルには料理人としての使命云々を偉そうに語った俺ではあるが、常識的に考えてフルフルの身体の一部を食べようという試みなんてものは多分に意味不明であり、そのことは俺自身も重々自覚しているつもりだ。

しかしその見た目から或いは調理できそうな『アルビノの霜降り』。たったそれだけの理由と可能性に俺の好奇心は昂ぶり、そして俺の好奇心以上に、セシルを精神的・肉体的に追い詰めるという点がこちら側の主張のキモであり、今回実行に移る次第と相成ったワケだ。暴走していると言われたら何も言い返せんが。

という事で頼ってもらって悪いがアバウス兄妹の申し出にはそういった理由から承諾しかねるのだ。我ながら最低の理由とは思うけどな。

「あの、それは……」

「危険かと……」

ここまで説明して、耐え兼ねたのかアバウス兄妹は困惑の表情で、それぞれ控えめながら抗議の言葉を口にした。

う～ん、馬鹿さ加減が過ぎたか？　こんな反応されたら流石に俺の決意も揺らぐ――

「だよね？　二人共もっと言ってやってよ～。ユノンありえな～い。マジ人間見るわ～」

――ことはなかったけどな。ありがとうセシル。てめえを棚上げしたその言い草に俺の意志は殺意を孕んでより強固になったよ。二

度と迂濶な事を抜かさないようにセシルの両頬をアイアンクローの要領で押さえつけながら、俺は二人に向き直った。一切妥協したくなかったが、こうなりゃ折衷案でいくしかない。
「わかった。一緒に行こう」
抵抗するセシルをねじ伏せつつ、俺はニヤリと笑いながら承諾を二人に告げた。
「いいのか？」
「ああ、ついでにフルフルの狩り方も実戦通して教えるよ。俺のやり方でよけりゃ」
教え方が上手いワケじゃないけど、どうせならフルフルも寄生なしで狩れるようになった方が後々この二人にとっていいだろう。
「是非お願いします！　正直分からない事ばかりなんで」
満開の花のような笑顔でアニエスが俺の空いてる方の手をとってブンブンと振り回す。よく見りゃうっすらと涙ぐんでるし、そんなになって喜ばれると俺も照れくさい。
塞がっている手の中でセシルが「ムヒュヒュ」と思惑通りいったのかそんな気味の悪い笑いをこぼしていた。アホめ、俺の手の内も知らずに……。
アバウス兄妹に向けた笑顔とは違う意味でニヤリとしながら、俺は兄妹と契約の内容について確認しようとした……。
その時、

「ユノン……来てんなら面ぐらい見せな？」

鼻腔を花の心地よい香りがくすぐったと思ったら、艶っぽい女の声が聞こえた。
振り返ると青い長髪を頭頂部で結い纏めた上に、簪やら何やらで派手に飾った、耳の先端が長く尖った妙齢の美女が、太刀と同様に東方から伝わったらしい、藍色に染め上げられた服をこれまた派手に着崩して、長いキセルを美味そうにくわえながら歩み寄って来た。

本来露出の少ない華やかな服らしいが胸元も脚もどうぞ見てくれと言わんばかりに開いているから、華やかっていうか卑猥だ。おまけにスタイルもバインバインだから、男にとっちゃ目の保養なんだか毒なんだかって感じだ。俺は見慣れてるから何でもないが。

「マスター」

「小娘共から聞いたよ。盲竜狩りに行くんだって？　この前の大猪といい、最近獲物が随分ぬるいじゃないか」

俺が呼ぶと挑発的に細められてる目を更に細め、くわえていたキセルの先を突き付けながら、耳に絡みつくような喋り方で近くにあった支柱にもたれかかった。こんな感じでいつも人をくったような態度の人だ。

ちなみに小娘っていうのは受付嬢達の事だ。

「……マスター？　ビーバーさん、こちらの竜人の女性は……」

突然の来訪者に当然の事ながら何も分からないディーゼルが俺に尋ねてきた。彼女の方を見ないのは目のやり場に困るからだろう。これ見よがしにこっち向いて脚組んでるし。

ちなみに竜人というのは『竜人族』という種族を指す。長命で優れた身体能力を持ち、古来からモンスター研究に大きく貢献してきた為に、ギルドに関係した重要な役職を担う事が多い種族だ。『古龍観測所』とかな。

そして、目の前にいるこの人の肩書き『マスター』ってのは……

「そ、マスター。ギルドマスターだよ」

「「え！？」」

俺が言うとアバウス兄妹は目を限界まで見開いて驚いていた。何だよ？

「……ギルドマスターって、普通は組合の本部にいますよね？」

「うん、だからここが本部」

「ここ……王都だろ？」

だから何だよ？

「王都の中に、ギルド本部もあるんですか？」

兄も妹も信じられない、と言った様子で固まっていた。俺もマスターも、あと忘れてたけど頭を拘束しっぱなしだったセシルもそんな二人を怪訝そうに見ていた。
何だ？　何かおかしいのか？
……あ
そうか。そういえば二人は別の大陸から来たんだった。
「ここじゃギルドは国営なんだよ。どこの国でもな。あんたらがいた大陸じゃ民間の組織だったかもしれないけど」
これだろうな、二人の疑問は。他の大陸の事はよく知らないけど、確かギルドは民営だったはずだ。
で、ハンターは個々でなまじ高い戦闘力を持ってるから、国に仕えてる連中からは危惧されたり煙たがられたりしていて……結果、国とハンターズギルドは不仲らしく、ギルドや集会所も城のある都からは離れた位置にあるらしいね。
「首都に集会所がある時点でおかしいとは思ったんだが……」
「あの、国とハンターの衝突はないんですか？」
「何だい、見ない面だと思ったら新参かい？」
煙をゆっくりと吐いて、マスターが兄妹を見る。ディーゼルはやはり目のやり場に困るらしく、身体はマスターに向いてるが視線は横にずらしている。妹は視線もマスターに向いている。でも顔真っ赤。同じ女でもマスターの格好は見ていて恥ずかしいらしい。
国とハンターの関係が成り立っているのが分からないらしく、俺は両者を仲だっているものが何なのか説明しようとしたが、
「いいさユノン、私が教えようじゃないか」
マスターに止められた。新しく来た二人に興味があるらしい。
「まず、あんたらのいた大陸の話だがね……何故、国に仕える連中とハンターの連中はソリが合わないと思う？」
「それは……やっぱり過ごしている環境が違うからだと思います」
まぁそうだろうな。狩場で剣やハンマーをブン回してる人種は、城で書類やら何やらと向き合ってる人間にとっちゃ野蛮に見えるだ

ろうさ。国に仕える役人連中にしてみればモンスターだけでも脅威だってのに、単独でそのモンスターと渡り合うハンターが何人もいれば、警戒するなってのは無理な話だ。
なら、ここでは？
「そう、根本的な問題としては意識の違いだろうね。狩場を知らない役人にハンターの言い分は通じないし、逆もまた然りさ」
「はい、主義や主張が完全に異なりますから……一体どうして、ここでは国とギルドが共存できてるんでしょうか？」
アニエスが言う事は尤もだ。主義が違えばいくら話し合っても平行線になるだけだ。そう……『役人が　狩場を知らなければ』な
「簡単な話さ……ハンターが国を治めればいいだけだろ？」
気怠げにニヤニヤ笑いながらマスターは言ったが、当の二人は内容を素直に受け入れられなかったのか、一瞬反応が遅れた。
「……まさか」
「そのまさかさ。この国はハンターによって建てられた国なのさ。ここじゃ城に勤めてる全ての人間が元ハンターだし、王様だって元凄腕だよ」
まさにハンターのハンターによるハンターの為の国と言えるだろう。一般の職人や貴族はもちろんの事、王族に至るまでが、狩場を経験した上で国や街の一部となっている。
「き、貴族も？」
「あの、王族や貴族の親御様方は危険だとは思わないんですか？」
貴族の中には、時に重要な役職を親から継承する場合もあるという。アニエスはそういう貴族の事を言ってるんだろう。それだと親が子に危険な目に遭わせたくない、と思うのは当然……なんだろうけど
「ほとんど無いねえ……『獅子は我が子を千尋の谷に突き落とす』って言うだろ？　ここじゃそれを地でいくのさ」
むしろその程度で死ぬようなら由緒ある血統もそれまで、とか言って、潔いんだか薄情なんだかよく分からない主張が大多数だ。子

供の身をそれ以上案じる貴族・王族は圧倒的マイノリティとさえ言える。
　無論、親としても子供の命の危険を顧みてないワケじゃない。ずぶのド素人が突然ハンターになろうと言っても、予想外の事態が頻発する狩場にいきなり踏み込めば、ランポスの餌になるのは必至だ。そうならない為に、狩場の危険性を予め教えたり、簡単な討伐訓練で実戦したりする養成所を経て、ある程度のイレギュラーにも動揺しない知識と胆力を身に付けてハンター業に望む……というのが通例、その他だと、貴族ならお抱えの専属教官が、一般人なら親兄弟がフィールドで付きっきりで指導したりとかだな。一概には言えないけど。
　……てゆうかね？
「ここにも一応その貴族様はいるぜ？　なあセシル？」
「え゛！？」
「セシルさんが！？」
　俺の手の中で、抵抗を諦めておとなしくしていた（顔がタコみたいになってた）セシルは
「んにゅ？」とか言いながら兄妹を見る。
　俺がセシルの顔の拘束を解くと、頬が赤く腫れていた。
「う～ほっぺたヒリヒリするよ……うん、私貴族だよ？」
　とって付けたようにセシルは答えた。こいつ、さては今イチ話の流れを理解してないな……。
「北東部にラ・フランっていう行政区があって、こいつはそこを治めてる公爵の末娘なんだよ」
　言いながらセシルの頭を撫でる。気持ちよさそうに目を細め、されるがままになっている様子は猫みたいだった。
「ゆゆゆゆゆユノンさん！　貴族の御令嬢になんて事を！？」
　アニエスとディーゼルが大慌てで割って入る。
　んな事言われても、こちとら鼻水垂らして大爆笑していたような子供の頃から既にこういう関係だったしなあ……

「野蛮な……俺達のいた国だったら即留置所行きだぞ？」
冷や汗掻いて唖然としながらディーゼルが言う。野蛮て……そりゃ言い過ぎだろ？　この二人が前にいた国ってのは、随分と融通の効かない国だったんだな？
「俺はセシルの父親のラ・フラン卿から、こいつの狩りの面倒見るように言われてるんだ。貴族としての命令じゃなく、セシルの友人として、だ」
元々じいちゃんを慕っていた事もあり、身分の違いはあれど、セシルの父ちゃんはじいちゃんの調理法を受け継いだ俺を、対等……というよりは、気心の知れた仲間のように接してくれている。
だから今更セシルの扱いをとやかく言われたところで、俺自身反省の色は無色透明だし、セシルの父ちゃんも別段怒るとは思えないな。
と、そこまで説明すると、アバウス兄妹は諦めたように大きく息をつきながら、俺達に向き直った。

「……この国の事は何となく分かりました。取り敢えず、ハンターにとってはかなり暮らし易そうですね？　……正直、慣れるのに時間が掛かりそうですが……」
心の底からそう思うのだろう、アニエスが自信なさげに俯く。
俺はその様子を見て何となく、本当に何とな～くだがアバウス兄妹が、

都落ちした貴族のように見えた。

いや、まさかな？　……でも、この二人微妙に引っ掛かるんだよな……。何て言うか、育ちが良さげなんだよ。立ち振舞いとか言動が。
「さて」
俺が首を捻っていると、緩やかに立ち上がったマスターが、テー

ブル上にあったキセルの受け皿に、コンッとキセルを軽く叩きつけた。
「疑問もある程度片付いたようだし、そろそろお開きじゃないか？　あんたらは色々準備があるだろうし、ユノン、お前も店があるだろう？」
「あ、ああ」
何かすっきりしないものを感じながらも、マスターの言葉に頷いた。そう言えばそろそろ店にでないとだ。まあ、仕込みは猫達に任せてるから大丈夫だろうけど。
「そうですね……ではビーバーさん、後日よろしくお願いします」
「ん、よろしく」
恭しく頭を下げるアニエスとディーゼルにそれぞれ握手したのを皮切りに、俺達はその場を解散した。
「ユノン」
マスターがおれを呼び止めて顔を寄せる。チラチラとアバウス兄妹を見ている様子を見ると、耳を貸せ、と言いたいみたいだ。俺の首に腕を絡めて、グイッ、と引き寄せて耳打ちする。
「あの二人、何かきな臭いねえ……危険な気配は無いが、用心するに越したことはないよ。気をつけな」
俺が感じた違和感をマスターも感じていたらしい。となると、やっぱ少し詮索した方がよかったか？
「ま、その内分かるだろうさ。……それはそうとお前、盲竜を食うって話は本当かい？」
「おお、そうなんだよ！　ずっとやってみたかったんだよな、マスターもどうだ？」
嬉々として俺は誘ったが、マスターは究極の二日酔いに陥ったようなゲンナリした表情になって
「いらん、誰が食うかいそんなもん」
腕を解くと、そう言い残して奥に引っ込んでいった。ちぇ、んな嫌そうな顔しなくてもいいじゃんか。少なくともセシルが食べるの

は確定なんだ。試食というか毒見だけど。
「そうだった……うぅ、今から憂鬱だよう」
弱弱しくセシルが唸る。今の今まで忘れていたらしい。心配すんなって、俺が調理するんだぜ？
「そりゃ、そうだけど……」
まだ不安げなセシルだが、そんなことよりいい加減店に戻らないと時間的に危なかった。俺はセシルの足取りを軽くするため、魔法の言葉を発した。
「ほら行くぞ。デザート付で朝食ご馳走してやんよ」
「あ、食べる！」
一発で機嫌の良くなったセシルと一緒に店に戻る。さて、フルフル討伐か……何も起こんなきゃいいんだけどな？

第十話……実行、“折衷案”（前書き）

トライが出ましたがハードが無い為手付かずです（，◇、；）
ニコ動のプレイ動画でイビルジョーの鬼畜ぶりにワクワクしながら、
懲りずにＰＳＰを握る今日この頃です。
しかしながら、知り合いの多くが今になって２ｎｄＧを始め出したので、個人的にはまだまだ楽しめます。称号も全て集め終わった私は皆から“先生”と言われます。

誰がイャンクックか。

第十話……実行、“折衷案”

クエスト当日。俺、セシル、そしてアバウス兄妹は、アプトノスが引く竜車に乗って、ゴトゴト緩やかに揺れながら狩場へと移動していた。

流れる外の景色が熱帯雨林の生い茂る密林から、徐々に浅い霧が漂う岩肌へと緩やかに変わっていく。肺に入る空気も熱帯の濃い緑の匂いがいつの間にか消えていて、代わりに吸うだけで喉の潤う泥臭いものへと変わっていった。

セシルとアニエスは年の近い女の子同士ということもあり、お互いすぐに打ち解けて、髪の手入れ方や好みの服だの何だのと、ガールズトークに花咲かせていた。

華やかさが少し妬ましかったから、俺も負けじとディーゼルと男同士のボーイズトークを展開しようとしたが、むさ苦しい上にかなり虚しかったので速攻で終わった。そもそもボーイズって歳でもねえし……。

アバウス兄妹にとっては別大陸の初狩猟になるので、予習の意味も含めて、今回の狩場と獲物の特徴とか、対処法も掻い摘んで説明する。つっても……、皆ある程度は既に把握してると思うけど。

依頼があった場所は『沼地』……、密林に比べて涼しいが、湿地帯特有の湿度の高さと、それに伴う濃霧が視界を不自由にする。年間を通して雨天に見舞われることが多く、年がら年中地面がぬかるんでるから、滑らないように足元に注意しなければならない。何かしらのモンスターと対峙している時に、転んだりしたら隙を突かれてケガするからな。

そして今回のターゲット……、フルフル。

飛竜種に分類されるこの飛竜は、盲竜と別称されるだけあって、進化の過程で目が退化して見えていない。これは一見不自由にも思

えるが、その実閃光玉が効かないとか、寧ろハンターにとっては都合が悪かったりする。ただ、視覚に頼れない分、動きがやや緩慢で、単純な肉弾戦なら充分な余裕をもって回避行動をとれるし、攻撃の活路も見出だし易い。

しかしだ……。

「“帯電”や“ブレス”が面倒ですね……やっぱり」　アニエスがディーゼルと頷きながら言った。まあ、気持ちは分かる。

“帯電”はフルフルの基本攻撃パターンの一つで、もう名前のまんまだ、身体全体に電気を帯びて相手を牽制したり攻撃したりする。たったそれだけなんだけど、近接武器にとっては手も足も出せない状態に陥るから、乱発されるとダメージが稼げない。つまり、時間が長引いて泥沼化しちまう。沼地だけに。俺今上手いこと言ったよね？

そして“ブレス”だが、こいつがまた一癖ある攻撃だ。レウスレイアのような速度の速い火球じゃなく、地面を滑るような球体の電気を、三方向に同時に放つ。吐き出されるまでのタイムラグが長い上に、ブレス自体の速度も緩やかだから滅多な事じゃ当たらんが、万が一直撃すれば大ダメージと同時に即麻痺って、その巨体にのしかかられて落ち確定だ。

こんな感じで機動力のハンデを埋めるべく、フルフルはこの二つの他にも、色々な攻撃手段を駆使して隙をなくしている。

「視覚がないとは思えんのだがな……」

重々しくディーゼルが呟くのを聞いて、かつてビギナーハンターだった頃の自分も同じ事言ってたなぁ……、とかしみじみ頷いた。

フルフルは視覚を補う為、嗅覚が発達している。索敵の際は鋭敏な鼻で周囲を把握するけど、その様子はとても目が見えないようには、確かに思えない。

「火属性が弱点なんですよね？」

「ああ、皮がブヨブヨして衝撃を吸収する上に、身体中粘液で守ら

れてるから、俺も中々決定打を打てないんだよ。ディーゼルの太刀やアニエスの矢の刃も滑るだろ？　火属性の武器で粘液を焼き飛ばした方が、後々狩りやすい」
暗い洞窟や、厚い雲が常に上空に立ちこめる雪山に生息していることから、フルフルは乾燥や紫外線、それに熱を嫌っているんじゃないかって言われてる。
飛竜種の多くが甲殻竜なのに対し、フルフルは外殻と呼べるほど堅い皮質を持たない。ブヨブヨした柔らかい肉に全身覆われていて、さらに表皮からは粘液が分泌して外の衝撃から肉体を守っている。
この為、他のモンスター……、例えばレウスやグラビのように、斬撃や打撃を外殻の堅さで“弾き返す”んじゃなく、フルフルは相手の攻撃を皮膚で“緩衝”したり、粘液で“反ら”せたりする。
尤も、伸縮性の高い皮膚だから、部位によっては血管が透けて見えるほど薄く張った箇所もある。狙い目はそこだな。
「はい……、でもあれって、凄く気味が悪いんですよね……」
「分かる分かる～！　気持ち悪いよね～！？」
軽く青ざめるアニエスにセシルが賛同する。女の子にはやっぱり、あの見た目はグロ過ぎるみたいだ。
実際面と向かうと、何とも不気味に見えるのは俺も同感だ。セシルが身の毛もよだつほど嫌悪する最大の理由も、この外観にある。まあ、あいつの好き嫌いはいつだって第一印象からだが……。
「でも大丈夫だよ。今日のは上位のフルフルだけど、いざというときはユノンがすぐに倒してくれるから。ね、ユノン？」
……
「へっへっへ～♪」
「……ユ、ユノン？」
他力本願な事を言いやがるセシルに、いやらしい笑いで答える。
“セシル、忘れちゃいないか？　今回の俺の目的が何なのか……”

濃くなっていく霧を流し眼で見ながら、俺は顔にしばらくニヤニヤ笑いを張り付けていた。

◇　◇　◇

密林とほぼ同じ熱帯気候の沼地は、赤道付近に位置する俺らの国の領土内にある。国内の移動だから、密林までに掛かる時間の倍くらいで到着した。案の定、ベースキャンプから見える狩場の景観は、濃霧に覆われてほとんど見ることができない。苔の匂いと相まって、これはこれで沼地らしくて俺は好きだけど。

まあ視界の点は大丈夫だろ。フルフルは沼地では主に洞窟で行動するから別段問題ない。霧は洞窟の内部まではほとんど入ってこないし。

「どうします？　二手に別れて探しますか？」

ベースキャンプからの出発点は二つあり、フルフルが周回するルートへはどちらから行っても行き着くから、効率から言えばアニエスの言い分は正しい。

……だが、

「いや……、最初は俺のプランでやらせてもらう。いいかな？」

「え？　……はあ、構いませんけど」

「何か良い案があるのか？」

さて、前回言ったと思うが……、ここいらで俺が導き出した“折衷案”を実行に移そうじゃないか。

俺はあらかじめ用意していたこんがり肉一個と、回復薬五つ、それと耐寒用のホットドリンクを一つセシルに渡した。一応、支給品もいくつか渡そうと思い、支給品ボックスを開けて気付いた。危険

度の高い上位の狩場だから、支給品の到着が遅れてるんだよな。
“まあ、いいや”と思いつつ空のボックスを閉じる。皆が一様に俺の動向を見守る中、俺はセシルに向き直り、言ってやった。
「セシル」
「うん」
「じゃ、いってらっしゃい」
「へ？」

……

時間にして数秒程度の沈黙だった。全員がポカンとした表情で俺を見て、言葉の意味を探っていた。
静寂は聴覚を研ぎ澄ます……、どこからか聞こえる獣の嘶(いなな)きが、やたら近くに感じた。
俺は特に意味もなくその感覚に浸りかけたが、若干の間を置いて、俺の真意に気付いたセシルが叫ぶ。
「ロンリー(ひとりで)！？」
それに俺も答える。
「オンリー(ひとりで)」
到底信じられない、といった表情のセシルだったが、お前にそんな顔する資格はない。お前自分のペナルティ忘れたとは言わせねえぞ。
とりあえず最初は一人で行け。これが俺の折衷案だ。
「勘弁してよホントに！　ここまで来てマジでやるなんて思ってもなかったのに！」
そいつは見通しが甘かったな。食材を粗末に扱う奴は例外なく制裁だ。俺の目の黒い内は許さん。許さんったら許さん。白くなっても許さん。
「この殺人コック！　こんな命懸けの罰ゲーム冗談じゃないよ！　四人で来たんだから皆で行けばいいじゃん！」

「やかましい！　何の為にこんなとこまで来たと思ってんだ！」
「ディーゼルさん達の手助けでしょ！？」
「お前を弄り倒す為に決まってんだろが！」
「何それ！？」
後から聞いたが、“そりゃ酷い”と流石にアバウス兄妹も心の中でツッコんだらしい。それでも仲裁に入らなかったのは、怒涛の勢いで互いを罵り合う俺ら二人の間に、割って入る隙を見出だせなかったからだそうだ。
静かな沼地にギャーギャーと、俺とセシルの喚き声がこだまする。
「死んだらどうすんのさ！？」
半泣きになりながら地団駄踏んで、セシルが噛み付くように俺に訴える。
「心配すんな。一回乙ったら俺も行く。だから存分に散ってこいやコラ！」
二つある出発点の内の一つを指差して、俺はセシルへスタートを半ば強制的に催促した。相変わらず霧は深く、行き先が白く霞んでる。一寸先は白い闇だ。
「ゆ、ユノン達は？」
「俺らはここで優雅に腹ごしらえだ。今日の為にカビが生えるまで乾燥熟成させた、このアプトノスの霜降り肉を、選りすぐりのハーブで薫り付けしながら、焼き加減ミディアムで美味しく頂きます」
（※1）
カビって聞くと不潔な感じがするがそうじゃない。食用に使うのはカビに侵食されてない、中の部分だ。元々グレードの高い肉を、乾燥熟成によって更に食感と旨味を上げている逸品。竜の肉ほどじゃないが、最高の一食であることは間違いないだろう。王宮なら一人あたり二万ｚの報償金が貰えるスペシャルメニューだ。狩場で食べる食事じゃない？　当たり前だ、セシルへのあてつけ以外の何でもないからな。
「鬼ッ！　悪魔ッ！　」

半分どころか完全な泣き顔になったセシルが、真っ赤な顔で俺を非難するが、何てことはない、負け犬の遠吠えにしか聞こえないのだから。
「ごちゃごちゃうるさい、クエストはもう始まってんだ。ゴー！セシル、ゴー！」
霧の向こうへとシッシッ、と追い払うような仕草で出発点までセシルを移動させ、設置した簡易テント前で俺は高級肉焼きセットの準備に取り掛かった。
余程悔しいのか、セシルはそんな俺を涙目で睨みつけていた。背中越しに刺すような視線を感じる。へっ、痒い痒い。
「ユノンのバ～カ！」
後ろからそんな罵声が飛んできた。バカで結構。さっさと行け。

「お尻フェチ！　童貞！」

「てめえええ！」
大きく振りかぶって、組み立ててた高級肉焼きセットのパーツを、振り向きざまにセシルのいる方角に投げつける。
が、セシルはそれより先にピュ～、と霧の向こうへと走り去ってしまったので、投げつけた金属片は誰に当たる事もなく、カランカランと虚しい音を立てた。
ド畜生……、俺の密かなフェチを大声で……、何で知ってやがる！
「……何笑ってんだよ」
振り返るとアバウス兄妹が、手で口元を押さえて笑いを堪えてた。つかディーゼル、お前の笑ったとこ初めて見たんだが。
「いや……、仲がいいんだな？」
「……付き合いが長いだけだっつの」
「でも、ホントに大丈夫なんですか？　セシルさん全然自信なさそうでしたし、おまけに……あの防具じゃ……」
「……ああ」

そういやアイツ、武器も防具も前に女王虫に遭遇した時のまんま（レッドサーベル＋下位ザザミ一式）だった。大方、皆で狩るもんと油断しきってたんだろ。何の考えもなしに。

構うもんかよ、自業自得を身をもって知る良い機会だ。

「んなことより飯にしようぜ。セシルなら心配ないさ、昔“焦熱地獄”に放り込んでも生き残ったことがあるんだから。クエストは失敗したけどな」

実は過去にもセシルはうちの食材をおじゃんにした前科があり、当然のごとくブチ切れた俺は口八丁手八丁にアイツを騙眩（だまくら）かして、単身“焦熱地獄”というクエストに挑ませた。

“焦熱地獄”はギルドにたまに舞い込んでくる大連続狩猟クエストだ。周期的に活発になる火山活動の影響で、行動期間がかぶったバサルモス、ドスイーオス、グラビモス。火山に一同に会したこれらを全て狩猟しろというぶっ飛んだ内容で、期間を置いての単体ずつの狩猟は不可能と踏んだギルド側が、試しにクエストとして発注。熟練ハンター達にそこそこ受けが良かったので、以来ちょっとしたイベントと化したという経緯を持つ。

熟練以下の初心者、中堅ハンターには敷居が高すぎるのは言うまでもなく、無論、セシルが一人で攻略できるようなクエストではない。俺もあいつがコレをクリアできるとは、毛ほども思っちゃいなかった。今回同様、腹いせと嫌がらせだ。

ただ、流石にやりすぎた感があったのも事実で、俺も冷や汗を掻いたのだが、なんとセシルは生きて帰ってきた。しかもちゃんと全てのボスと対峙したようで、手ぶらの帰宅ではなく、“岩竜の涙”と“ドスイーオスの頭”、そして“クエスト失敗”の青い烙印を持ち帰って来た。グラビに手も足も出なかったらしい。

それ以来、俺はあいつの天恵のような悪運の強さに、半ば確信めいたものを持っている。故に今回のフルフル討伐に於いては、いくらなんでも死にゃしないだろうと、微塵も心配していない。

「それにだ、あいつ自身不利な状況は充分自覚してるはずさ。後手

に回っちゃいるが、何かしら対策はとるだろ」
セシルがフルフルを狩り慣れてないのは事実だが、初めて狩るワケじゃない。過去に何度か一緒に討伐していて、その時に対処法も教えてるから、最悪でも死にはしない。ちゃんと覚えてればの話だが。

「はあ……、まあ、そこまで言うなら……」
渋々と納得したアバウス兄妹と高級肉焼きセットを囲む。まだ蟠（わだかま）ってるようだが行かせちまったもんはしょうがない。
俺は“せめて落し物くらいは拾ってこないかな……”とかそんな期待をしながら、仕込んだ肉を焼き始めた。

第十話……実行、“折衷案”（後書き）

※1

“乾燥熟成”は主に牛肉に使われる用語です。作中でアプトノス肉に対して使ってますが、まあフィクションなんで御愛嬌で…（；´・ω・、）ノ

第十一話……To a cat a wish.（前書き）

新しい話と修正との板挟みで更新速度がマジで酷い（´◇`；）
あ、感想は気軽にどうぞ。気に入ってもらえたらお気に入り登録お願いします。

第十一話……To a cat a wish.

「アホ……、ユノンのアホ……」

ユノンにベースキャンプから追い出されたセシルは、霧の立ちこめる、ぬかるみだらけの平野をしばらくトボトボと歩いていた。景色が霞んで見える中、野生のアプトノスやカンタロスを無視して、倒れた朽ち木や、露出した木の根が足元を邪魔する道なき道を、以前来た時の記憶を頼りに進む。

が、何度か足を引っ掛けたり、いつもは気にならない防具の隙間から入る泥を無性に気持ち悪く感じたりと……、憂鬱だったセシルの心境に、狩場の環境が更に暗い影を落としていた。

「……はあ」

一人になってから何度目かの溜息をつく。周囲の景色は相変わらず、曇天の雲がそのまま降りてきたような霧が立ちこめ、視界を不気味な無彩色に染め上げていた。

前を見ると、丘に降り注いだ雨が濁流の川になって横断していた。この川の中にはヤオザミが潜んでいることもあるのだが、ヤオザミごときとジャブジャブと水を蹴って突っ切る。

「愚痴っても、しょうがないよね……」

川を渡り切ったセシルは観念したように独り言を呟く。彼女の見た限り、ユノンの目は本気だった。本気で彼女が嫌がるところを見たい、そんな目である。彼女が何もしないでノコノコと帰っても、きっと何度でも叩きだす気でいるだろう。

“分かるよ、付き合い長いからね……”

ほろりと泣きながらセシルは過去を振り返る。今更という気もしていたが、思えばユノンは昔からそうだったのだ。

例えば彼が店主に就いてしばらく経った頃、セシルは彼のお気に入りだったドスランポスの爪から削り出したチョーカーをうっかり壊したことがあった。その辺の露店で買った（値段も高くない）物

なので、すぐに謝ってその場は無事に収まった……と思いきや、後日ユノンは「爪に代わっておしおきだ！」などと意味不明なことを叫びながら、同じ爪から作られた大剣『蛇剣【大蛇】』を振りかざして襲い掛かって来たのだ。

そう、無事に収める気などユノンには更々なく、チョーカーを破壊された借りを物理的制裁を以てきっちり返そうとしたのだ。対モンスター用の武器を人間相手に使用するのは御法度だが、知ったことかとユノンは街中を全力で駆け抜けてセシルを追い回し、偶然巡回していたガーディアン達が割って入ったことで、事態はようやく収拾がついたのだった。仲裁したガーディアンの一人（四十二歳ベテラン）は「それまでの人生の中で一番本気で捕り抑えたかもしれない」と、この時語った。

後に『有名店主白昼御乱心事件』と呼ばれて、今でも街の各所で酒の肴に語られる程度には有名になったこの事件は、原因がセシルにあるにせよ、その原因と仕返しに釣り合いが取れてないことは明白。ともすれば一方的に自身の正当性をこじつけて、精神的優位に立ちたがるユノンの人間の小ささを露呈したという印象的な一件である。

どうでもいい話に大きく脱線したが、とにかくユノンは『やられたらやり返す』上に『やられたら倍返し』という理不尽な性分であり、ちょっと叩けばキツイお返し、一回は一回、でも力一杯……、要するに今回はセシルを命の危険ギリギリまで追い詰めなければ放免の運びとは成り得ないのである。

そうなると、セシルは覚悟を決めるしかなかった。速やかにフルフルと遭遇し、力尽きて帰る。それが彼女が今選べる最善の、しかし痛みを伴う選択だった。選択の余地がないとも言う。

“でもその前に……、一応保険ぐらいはかけてもいいよね？”

セシルは頭の中で何となく覚えている、沼地の地理を思い出す。霧が濃すぎて地形をうまく視認できないが、歩いてきた距離感と以前来た時の記憶が確かなら、今いるのは洞窟直前のエリアのはずで

あり、運の良いことに虫も獣もいないシンとした静かな道中。彼女は思い立って道具ポーチを漁った。
「えっと、マタタビ、マタタビ……、あった！」
ポーチを探って取り出したのは『マタタビ』。アイルー、メラルー、その他猫科の動物に大人気のアイテム。セシルはそれを左手に持ち、右に片手剣、レッドサーベルを構える。
“……レッドサーベル、強化しとけばよかった……”
武器の強化にはそれなりの素材と費用が不可欠だが、セシルは節約と言い張って強化自体を渋ることが多々ある。寄生ハンターであるセシルは寄生への依存から、『ユノンが強いから自分は強くなくてもいい』と、ユノンが聞いたら怒り狂いそうな高を括っていた。先述でユノンの人間性云々を思い返したセシルだったが、はっきり言って彼女も大概である。
“素材とお金をケチった結果がこれだよ”
当たり前といえる。
「えい」
涙がこぼれそうになるのを堪えて、マタタビの先端をレッドサーベルで切る。すると、火属性の炎があがって切り口を焦がした。
燻った火種に息を吹きかければ火種がみるみる広がって煙が起こり、灰色の霧の中に紛れながら立ち上っていく。
マタタビから起こしただけあって、この煙は様々な猫が反応せずにはいられない。風にのって狩場を吹き抜ければ、匂いの届く所、どんなに離れていても本能に駆られた猫を引き寄せる。つまり――
……ニャー、ニャーニャー
がさがさと周りの茂みが猫のように鳴きながら葉を揺らす。が、無論そんなはずはない。アイルー達が匂いに誘われて来たのだ。くりくりした瞳の白や黒の猫の頭が、ピョコピョコとあちこちから飛び出す。
煙のたつマタタビを地面に置くと、それにアイルーやメラルーが群がり、ゴロゴロと気持ちよさそうに喉を鳴らす。流石にマタタビ

の効果は抜群で、普段なら手に持ったピックでアイテムを掠め盗る手癖の悪いメラルー達でさえ、誰もかれもが仲間を押し退けて、一心不乱に煙の元に群がっていた。
「はい皆注目、ちゅ〜も〜く！」
手をパンパンと叩いて注意を促すと、アイルー達は耳をしきりにピョコピョコと動かして、一斉に首だけ向き直った。マタタビから離れたくないらしい。
一匹のアイルーが前に出る。羽織っているファンゴの毛皮から覗く毛並みは長くて綺麗な白毛だが、身体の所々には大小様々な痛々しい傷痕が目立つ。周りの同族がマタタビの誘惑に抗うことなくデレデレになっている中、その一匹だけはしゃんと起立し、所作も他のアイルーに比べてどこか威厳に満ちていた。
「狩場でのマタタビ狼煙は、アイルーを呼び出す秘密の合図……、おみゃあさん、わちきらに何の用ぞね？」
放物線を描いて立派に伸びた髭を弄り、やたらと時代掛かった喋り方をするこのアイルーが、どうやら群れの長らしい。
「ニャム？　よく見るとおみゃあさん、ビーバーさんとこの倅（せがれ）の連れじゃあニャいかね？」
パチパチと白くなった目を瞬かせて、群れの長はセシルをジーッと見た。目が悪いようだ。長の言うとおり、セシルは過去にユノンと二人で沼地を訪れた時に、彼に会っていた。マタタビ狼煙もその時ユノンがやっていたのを隣で見て覚えたのだ。
顔がよく見えるように、セシルは近づいて膝を地につけて座る。群れの長が「ふむふむ」と言いながらセシルを確認すると、彼女は腰を低くして話を切り出した。
「久しぶりです。あのぅ、折り入ってお願いがあるんですけど……」
恐縮しながら群れの長を伺うが、そんなセシルの顔色を見るような態度が気に入らなかったのか、それとも人間に呼ばれたこと自体が腹立たしいのか、群れの長はくしゃっと皺を寄せて顔をしかめた。
「『お願い』とな……、それは、おみゃあさんの狩りにワシら獣人

族も参ぜよ、とは言うまいニャ？　オトモの真似事は御免被(こうむ)るぞい？」

人間と親交があり、一部の者は人間社会に奉公に出ているとはいえ、獣人族は野生に生きる種族である。規律によって治安の保たれている人間界に身を置くアイルー（オトモアイルーやキッチンアイルー）なら、あるいは人間の肩を持つだろう。が、本来の野生の中にいる彼らは別である。弱肉強食という鉄の掟が支配する生態系に身を置く彼らは、人命より自然界の均衡に重きを置き、それ故に人に味方するということはできないのだ。群れの長の険しい表情は、そういった理由を鑑みてのことだ。

また、辺境の集落とはいえ、彼は長の立場にある者であり、種族と地位、二重の意味で首を縦に振れない。その上、セシルは知る由もないが、彼は獣人族の中では高潔と称される賢人的なアイルーだった。アイルーの巣に行った程度ではお目にかかれない存在であり、今のセシルのように、おいそれと話しかけることも本来なら憚(はばか)られる。つまりは敬意ある態度で向かい合わなければならないが、「違いま～す」空気を読むことをセシルは知らない。

「違う……、では何ぞネ？　言っておくが、わちきらは自然の中で他の種族と共存する者。おみゃあさんが何者と牙を交えようと肩入れはできん。無論、おみゃあさんの相手にもじゃ。どちらにも干渉はせん。分かるの？」

「はい、でも人間と契約してるアイルーならいいですよね？」

「ニャム、それならば話は別じゃ」

野生に生きるならばいづれにも干渉はしない。しかし先述にもあるように、人の世で生活を保証されてる、人間社会への貢献のために契約しているアイルーならば、この限りではない。でなければ、雇用主であるギルドやハンターからの信頼に障るからだ。

「して？」

「救護アイルーが必ず出られるようにしていて欲しいんです。……できますよね？」

要は普段より増して自分を見張っていてくれ、というだけのことだった。救護・医療アイルーは力尽きたハンターを回収し、獣人族に伝わる独自の医療技術でハンターを治療する（その際、彼らはハンターが受け取る報酬の三分の一を頂戴し、それを自らの報酬とする。つまり単純に計算して、三回力尽きればハンターの報酬はゼロ。その時点で必然的にクエスト失敗を意味する）ただし、それでも現実に命を落とすハンターはいる。救護アイルーと言えど、モンスターの目の前に出るという危険を伴う以上、完璧に救出できるというわけではないのだ。セシルの言うお願いとは、その危険を冒してでも、自分の安全を保障しろ。というものだった。

これは中々に無茶な注文である。

「ニャム、なるほどのう……しかして、それはわちきらの同胞をも危険に晒すでな……」

『自分のために命を賭けろ』と言われてるようなものだった。当たり前だが、セシルに対してそんな義理は彼らには微塵もない。当然難色を示す群れの長。

が、

「そ、こ、で♪」

渋った様子の群れの長の言葉を待たず、にんまりと不敵に笑うセシルが道具ポーチから次々取り出したのは……

「えっと……マタタビがさっき使った分以外の九つと、サシミウオが十匹、お金になる小金魚五匹に、あと猫ちゃん大好きこんがり魚Gを十匹。これでどう？」

「ニャニャ！？　ニャー！」

あっという間に両腕が塞がるほど、セシルは魚やら何やらを抱え込んでいた。そしてそれを一目見た途端、マタタビに群がっていたアイルー達の半数ほどが目の色を変えてセシルの足元に殺到した。

「この子達はおっけーみたいだね♪」

早い話が買収だった。

「ニャム……、抜け目のない……」

少々疲れたような表情になりつつも長は了承、取引は成立した。
憂いなく備えていたセシル。こうなることを見越していたのか？
という疑問は残るが、何にせよ用意周到なお陰でこうして彼らの協力を仰ぐことに成功したのだ。そしてほとんど魚しか入れていなかったために、彼女の道具ポーチは今も生臭い。どうでもいいが。
「しばし待たれよ」
群れの長は同族の若いアイルー達を見渡し、「救護アイルー、前に出なさい！」と声をあげるが、相変わらず彼以外はマタタビの煙に群がって快楽を貪っているか、あるいはセシルの腕に抱えられている魚に手を伸ばしているかどちらかだった（しかも一匹残らずである）
しばらく何度も群れの長は呼び掛けたが、一向に彼らは耳を貸さない。見るに見兼ねたセシルも一声掛けようとしたその時、
「シャーーーーーー！」
威嚇するような怒号。群れの長である。その声に若いアイルー全員がピーン、と背筋をきっちり伸ばして起立したのはもちろん、セシルも驚いて飛び退いた。
群れの長はいい加減に堪忍袋の緒が切れたのだろう、全身総毛立って「フー……フー……」と息を荒げてジロリと一同を睨み回した。皆一様に血の気の引いた青い顔をしているところを見ると、きっと今の長の顔は壮絶なものだろうとセシルは思ったが、背を向けられているため、その表情は分からない。薄ら恐ろしくて見たくもない。
「全く、最近の若いもんときたら自制することを知らん……さっさと出て来んかい！」
一喝して群れの長の小さな手からシャキンと鋭い爪が伸びる。盛大に引っ掻かれると思った他のアイルー達は、それぞれの周りにいる同胞を見渡して「誰ニャ、誰ニャ！？」「早く出て来るニャ！」大慌てで暴きに掛かった。
「ち、長老！　すまんのニャ、オイラ達が救護アイルーだニャ！」
そう言ってマタタビ狼煙側の集団の中から、バタバタとなだれ込

むように前に出てきた白いアイルー達。業務を放ったらかしてマタタビに現(うつつ)を抜かしていたようだ。腕には救護アイルーとして契約していることを証明する腕章が付いていた。
「ニャム……、聞いての通りじゃ若造共、こちらのお嬢さんをしっかり見張ってやりんさい」
群れの長は未だ怒りが冷めやらぬ様子で、ぶちぶちと文句を言いつつ救護アイルー達に指示した。救護アイルー達は「はいニャ！」と一同に威勢よく返事してセシルに歩み寄る。
「お嬢さん、みっともないとこ見せたけど心配はいらんニャ。あんたの命の安全だけはきっちり保障するから、思う存分力尽きるニャ！」
ユノンと同じことを言う救護アイルーに、セシルの顔がやや引き攣った。自分で頼んでおいて文句を言うつもりもなかったが、それでも力尽きること前提ではっきり言われると、かなりやるせないものがある。
「あ、ありがとう……（私そこまでヘナチョコに見えるのかな？）」
「さて、わちきらは帰るとするかいの……お譲さん、健闘を祈る」
「あ、はい。色々ありがとうございます！」
「ふむ、只のハンターなら聞く耳持たんところだったが……、まぁビーバーさんの倅(せがれ)の連れのおみゃあさんならよかろうて」
うんうんと頷きながら顔を上げ、草むらの奥にある獣道の帰路に向かう群れの長。他のアイルーも彼に続いてぞろぞろと歩きだす。彼らの中には子供のアイルーもいたようで、他より一回りほど身体の小さいアイルーが、まだ煙の上がるマタタビを手に持って、長の周りを無邪気に駆けていた。
セシルは再度お礼を言って、救護アイルーを引き連れて先を行こうとした。
が、そこで思い出したように声をあげた。
「あ、そうだ！」
その声に反応して、群れの長が歩みを止めて振り返る。

「ニャム？　まだ何か？」
「前にも聞こうと思って聞きそびれてたんですけど……、ユノンのお父さんとお母さんは、知り合いなんですか？」
ふと気になってセシルは群れの長に尋ねた。倅（せがれ）がユノンを指すのなら、彼の言う『ビーバーさん』とはユノンの両親のことだ。
群れの長は「ああ、そのことか……」と呟くと、じゃれ付く仔アイルーの頭を撫でながら、静かに口を開いた。
「左様、あの子の両親には大きな恩があっての。昔、この沼地で起きた十匹の桃毛獣同士の縄張り争いを鎮めてもらったのニャ。……あん時ゃ沼地のキノコがあちこち食い荒らされた上に、そこら中が彼奴らの糞だらけになっての……。何とか追い払おうと奮起した、わちきらの仲間も返り討ちにあって命を落としてニャ。酷い有様じゃった」
群れの長は遠くを見るような目で思い返した。死んでいった当時の仲間を想うその仕草は、セシルには如何（いかん）ともし難いほど寂しげに見えた。
「わちきらの力及ばず、どうしようなく途方に暮れとったのじゃが……、たまたま沼地に来たビーバーさんがそれに気付いて、一匹残らず沼地から追い出してくれたんじゃ。しかも無償でな」
「そうだったんですか……」
神妙な面持ちでセシルは話を聞いていた。普段の彼女らしからぬ表情だったが、それには理由があった。
「亡くなられたと聞いた時は、本当に悲しく、申し訳なく思うた。……結局、わちきらは御恩を返せなかった」
ユノンの両親は十年ほど前に既に他界していた。幼少期をユノンと共に過ごしたセシルは、当然彼の両親もよく知っている。明るく豪快な父親と、優しく朗らかな母親……、意地の悪いところを除けば、ユノンは両親によく似ていた。
「……」
何と言って返そうかセシルは迷ったが、言葉が見つからない。こ

の場にユノンがいなくてよかったとセシルは思ったが、それでもやはり辛い。ユノンの両親のことは、セシルも大好きだったのだ。
「ニャム、暗い話になったな。だが、悲観することはない……あの子は確かにビーバーさんの子じゃ。笑ったとこなんぞ、よう似とる」
「……そうですね」
少しだけ笑顔になってセシルは応えた。
「御恩に報いるため、あの子にだけは出来得る限りの協力は惜しまぬようにしとる。その縁で、今回おみゃあさんにも手を貸した……そう言えば、一緒には来とらんのか？　あの子の姿が見えんが……」
周囲を見回す群れの長に言われてハッとする。
「えっ……と、今日は、別行動で……」
セシルが今、自分一人でフィールドに出ている理由……この状況で説明するには、とてつもなく下らない内容であるため、群れの長には内緒にしておくことにした。下手に語ると、彼の中のユノンの両親の良いイメージを崩しかねない。
「ニャム、そうか。帰ったらよろしく伝えといてくれ。あの子と、あの子の店のキッチンアイルーにの」
「え？」
首を捻るセシル。ユノンはともかくとして、何故そこでキッチンアイルーが出てくるのか。
「キッチンアイルー？　ガメニーさんとかですか？」
「そうそう、あの子の店で長いことキッチンアイルーをやっとるガメニーはの、わちきの同郷の友なんじゃよ」
言われてみれば群れの長は、老いた具合がガメニーと同程度で、雰囲気もどことなく彼に似ている。意外な事実に「へぇ～」とセシルは感嘆し、大きく頷く。
「はい、伝えておきます！」
セシルの返事に、群れの長は再び皺を寄せて顔をしかめたように見えたが、今度は笑ってるようだった。
「ニャム。ではお前達、しっかりの」

最後に若い救護アイルー達にそう言って念を押すと、今度こそ群れの長とその同胞達は、茂みを掻き分けて帰っていった。濃霧に覆われた沼地の中、野生に生きる者達の帰る背中を、セシルは最後の一匹が霧と草むらの向こうに見えなくなるまで見送った。

そして、救護アイルーを除く全ての獣人族がいなくなると、セシルは「よし！」と自らを奮い立たせて、傍らにいる救護アイルー達を見た。

「それじゃ、よろしくね？」

「任せるニャ！」

皆、気合も充分に、霧でぼやけた視界の奥に見える洞窟への入り口へと歩き出した。

いよいよ、セシルの狩りが始まる。

第十一話……To a cat a wish.（後書き）

第十一話、『猫に願いを』でした。
不意打ちでシリアス入れたせいで軽くグダってませんコレ？

この『ＮＯＳ』内には協力な連載陣が揃ってます。対抗意識を燃やすワケではありませんが、読んでるとやっぱり刺激されますね。
特に『ベルの狩猟日記』シリーズのＰ琢磨氏と『モンスターハンター～恋姫狩人物語～』の黒鉄大和氏が凄いのです。私がビービー泣けるくらい・。・（ノД`）・。・　何が凄いって作品自体の面白さはもちろん、力強い継続力です。特に黒鉄氏は一話あたりの文章量が多く、読み応えがあります。よく一定の期間内にこれほどのものを書きあげられるなあと唖然としたものです。
というワケで、むぎとろの好きな『ＮＯＳ』内での連載作家さんはお気に入りを参照です。

第十二話……White darkness.（前書き）

お久しぶりです、（ °∀ °）ノ
いっつも遅くてごめんなさい…（;´・ω・`）ノ
十二話です。

第十二話……White darkness.

「じゃあビーバーさんは、あのギルドマスターから狩りの仕方を習ったんですか？」
「ああ、死んだ俺の両親とマスターが古い付き合いでさ。俺がガキの頃に二人とも逝っちまってからは、実質あの人（マスター）が親みたいなもんだったよ」
パーティを組むにあたってまだお互い知らないことも多かったから、俺たち三人はまずお互いの狩猟のスタイルを話し合うことになった。なったんだが何故か、いつの間にか、話の本題から微妙に逸れて気付いたら俺の昔話になっていた。
「生きてりゃ親父が教えてくれたんだろうけどな……」
炭と化した焚き木をくべて炎の中に空気を入れ、火加減を調節しながら俺はそう呟いた。
両親も料理人でハンターだった。狩りで命を落とさなけりゃ、俺に狩猟を教えたのはきっと親父だったろう。
自分の前でパチパチと音をたてながら揺らめく料理の火の中に、昔の思い出が写った気がした。
「……すまない、辛いことを聞いてしまったみたいで……」
『両親の死』という事実に触れたことに対しての謝罪だろう。ディーゼルを見ると、伏し目がちに頭を下げていた。
俺は「気にすんな」とフォローした。俺の過去なんだからコイツが気負うことは何もない。
「もう十年以上前の話なんだからフッ切ってるよ。……で、お前らの親は？」
「……へ！？」
「お、親！？」
俺の突然の問いかけに、一瞬遅れてアニエスが素っ頓狂な声を上げ、ディーゼルが慌てて聞き返してきた。何だよそのリアクション？

「うん、見た感じハンターの子供って感じはしないけど……どうなの？」
「そ、その……穀物の栽培を……」
「あ、ああ、そうだ。我々の親は農園主だ……」
あからさまに奥歯にものが詰まったような口ぶりで答えた兄妹に、取り敢えず納得したように何度もゆっくり頷いておいた。へぇ～、農園主……。
……。

『我々』……ねえ？

「ふ～ん……まあ何だっていいけどさ」
気にした様子もない風を装った俺の態度に、アバウス兄妹が安堵したように見えたのは一先ず置いておき、意識を手元の火に焼かれている料理に戻した。
生来の燃費の悪さから空腹がピークに達していた俺は、セシルを追い出した後、すぐに食事の準備に取り掛かった。キャンプでの調理はもう何年もやってるから一人で余裕だったが、途中、手持無沙汰なアバウス兄妹が「何か手伝えないか？」とそわそわしながら尋ねてきたりもした。まあ取り敢えず座ってもらったけど。
最低限の手間で、且つ最速で作ることにした。厨房より器材が不充分だったからだが、何より兎にも角にも早く飯にありつきたかったのが最大の理由だ。誰が？　当然俺が。
メニューは、最高品質のアプトノス肉はメインとして、他にも色々ほぼ同時進行で作った。
まず前菜（オードブル）は女王エビのマリネ。スープは予め（あらかじ）保温性の高い容器に入れて持参したポタージュ。猛牛バターソースを添えたスネークサーモンのムニエルまで食べ終わり、今に至る。
「それよりさ、これ見ろよ♪」
そう、いよいよメインの肉を焼いていたワケだが……こいつは我

ながら上出来と言う他ない。
「こ、これは……」
「お、美味しそう……」
俺は自前の高級肉焼きセットの他、アバウス兄妹二人にも持って来てもらっていた肉焼きセットを展開し、計三人分の肉を今同時に焼いている。三つ同時なんて無茶だろうとアバウス兄妹が疑いの視線を浴びせてきたが俺の防具を舐めんじゃねえ。こんな時のための『肉焼き名人』のスキルだろうが（全く関係ないな）。
「質も量も、クエスト中に食べるような物じゃないぞ……今更だが」
「かたいこと言うなって♪　俺の奢りなんだから遠慮せずに野外の食事を楽しもうぜ？」
まあ本音を言うと、この前偶然覗いた熟成庫の奥の方に、こいつが隠れるように吊るされてるのを見つけて、状態を確認したら、そろそろ食べておかないとヤバくなりそうだったから、丁度いいから今日の機会に持ってきただけなんだけどな……。で、発見した時点で思い出したんだが、これ俺が仕込んでそのまま忘れて放置してたやつなんだよな……いやあ、ギリギリで見つかってよかったよかった。
「セシルさん……、大丈夫かなあ？」
アニエスがか細く呟く。行きの竜車の中でかなり打ち解けてからというもの、彼女はセシルのことを頻(しき)りに心配してくれている。
順調に焼けていく肉から目を離さずに俺は答えた。
「手は打ったみたいたぜ。さっき霧に紛れてマタタビの匂いがしたから、この辺をテリトリーにしてる獣人族を呼び出したんだろ。大方、救護アイルーに絶対拾ってもらえるよう打ち合わせてんだろうさ」
俺には分かったがアニエス達は気付かなかったんだろう。アニエスがディーゼルに「気付いた？」と聞くような仕草をする。ディーゼルは首を横に振った。
「獣人族を呼び出すって……そんなこと出来るんですか？」

「ああ。まあちょっとしたツテがあってさ……と、そろそろいいな♪」

ジュージューと音をたてる肉の焼け具合を見ると、表面が焦げ付かない程度に焼けていた。焼き加減は段階的に色々あるが、今回俺は一般に『ミディアムレア』と呼ばれる段階で焼いた。『ミディアム』は芯の方まで全体的に火が通って色が変わり、ただし肉汁は生に近い状態を指す。ミディアムレアはそれよりも『レア（表面だけ焼いて中は余熱で火を通す程度）』、つまり生に近い状態だ。生焼け肉ってワケじゃない。

生焼け肉は焼き加減で言うとレアか、レアよりも更に生に近い『ブルーレア』という段階だろう。生に近いと聞くとちょっと身構えるかもしれないが、それは粗悪な肉の場合であって、グレードの高い肉ならレアぐらいで食べてもむしろ大丈夫なくらいだ。尤も、それをすき好んで食べる美食家や貴族もいるみたいだから、これはこれで一つの逸品になる。

「ウルトラ上手に焼けました～……って、今日のは言わねえか」

こんがり肉Gはまた別の焼き加減になるから、この肉をそう呼ぶことはできない。『こんがり』肉Gって言うくらいだし。

「テーブル空けてくれ、切り分けるから」

テーブルと言っても幹の太い木の切り株だが、そこに綺麗に焼けた三つの肉が乗った大皿を移し、三人それぞれの皿にそれぞれの肉を切り分け、盛り付けていく。味付けはソースとか他にも色々考えたが、肉質が抜群に良いので小細工は無しにして、ミネラルの多い特注の岩塩だけにした。

予想以上に良い肉だったようで、肉汁がジュワジュワと中から勝手に溢れ出て、焼けた表面の余熱でパチパチ弾けていた。ナイフを押し付けるだけで、極上のオイルがトロトロとナイフの刃を濡らして滴り落ち、ベースキャンプ中に漂う芳（かぐわ）しい香りが食欲をこれでもかというぐらいに刺激する。

全て切り分け終えた俺は、自分の座るキャンプ用の椅子に即座に

戻って腰掛け、迅速にフォークとナイフを構える。自分で作っておいて何だが、口内が涎でいっぱいになって、かなりはしたないことになってる。
「よし、食おうぜ！」
「……いただきます」
「い、いただきます！」
アバウス兄妹も同じだったみたいで、俺の合図を聞くや否やナイフで肉を切りに掛かる。
ギリギリまで熟成させた肉は柔らかく、抵抗なくナイフを受け入れてすんなりと切れた。先程あれだけ流れ出た肉汁もまるで底が尽きないかのように、再びナイフをじゅわりと濡らす。
俺は一口含んだ。芯に少し赤味を残す熱々のステーキはかなり厚めに切ったのに、ぎゅうっと噛むと驚くほど簡単に千切れるほど柔らかい。柔らかいがその噛み応えは顎に程よく、確かな存在感も主張している。千切れた繊維から待ってましたとばかりに溢れる鮮烈な肉の旨味のスープが口中いっぱいに広がり、塩がそれを更に引き立てて強調する。ヤバい。美味い。
「……はぁ♪」
湿気が多いが逆に瑞々しい沼地の空気を深く吸い、吐いた。ひと噛みする毎に濃厚な香りが鼻腔に抜けて二口目への欲求を煽る。俺はそれに逆らわない。逆らう理由なんてない。
「ビーバーさん……貴方は素晴らしい人だ！」
「私……生きてて良かった」
思い思いのことを口にする二人を見ると、肉を咀嚼しながら感涙にむせび泣いていた。喜んでくれて何よりだ。そんなお前らにこの言葉を贈ろう。落ち着け。
「まだ作るからな？　楽しみに待っててくれ」
この後に続くのは砲丸レタスとレアオニオンとシモフリトマトのサラダ。デザートに丁度食べ頃だった炎熟マンゴーが店にあったのでこれを持参し、飲み物は酒……はクエスト中なので避けて、食後

にコーヒーを入れることにした。気合い入れすぎてフルコースになっちまったな。
“さて、セシルはそろそろ闘り始めたかな？”
付け合わせの蒸しポテトの素朴な味を楽しみつつ、俺は洞窟のある方向の霧の彼方を見つめた。

「お邪魔しま～す……」
誰に告げるでもなく、セシルはそう小声で呟きながら洞窟区画に静かに入った。
しんとして静かな洞窟内。天井の裂け目からは光が差し込んでおり、壁面に露出した鉱脈がキラキラと照らされて綺麗だった。しかし天井からは木の根もあちこちから垂れ下がっているため、妖しく煌めく鉱石の神秘性よりも、何が潜んでいるか分からない不気味さの方が先立って不快感が募る。
また、洞窟内は吐息が白く霞むほどに気温が低い。
「寒っ……、君たち大丈夫？」
後ろから付いてくる救護アイルーをセシルは気遣うが、かくいう彼女も身震いしながら奥歯がカタカタ鳴っていた。
極めて低温の環境下に於いて、人体がスタミナを消耗し易くなるのはハンターの常識である。前もって狩場の環境を考慮し、特に一番体調に影響を及ぼす気候に対しては充分な対策をとらなければならない。
しかしその辺りはセシルもハンターである。彼女は防寒対策としてホットドリンクを既に飲み干した後なので、寒さに対して幾分か危機的状況は避けてるといえる。
「オイラ達は天然の毛皮があるからニャ。このくらいの寒さならまだ平気ニャ」
「へ～、羨ましい……皮剥いでいい？」
光が差しているとはいえ、洞窟内部は薄暗い。にも関わらずセシ

ルの瞳が無表情の中で嫌な輝きを放つ。
「……辛いのは分かるけど、オイラ達に当たらないでくれニャ。ところで……」
特に怖がる様子もなく、岩肌の出っ張った洞窟の地面を後ろ脚の肉球でてちてちと踏みしめる救護アイルーの一人が、周囲を見渡しながらセシルに耳打ちする。
「オイラ達はもう離れるニャ……そんな心配そうな顔せんでもアンタはちゃんと助けてやるから任せるニャ」
大まかに見ればアイルー達獣人族もフルフルの属する飛竜種にとっては捕食対象である。奴らのような脅威から目をつけられることのないよう、救護アイルーは注意を払わなければならないので、業務的にそろそろセシルと距離を取らなければならない。
「うん、頼んだよ？」
「ニャ、んじゃあ頑張れニャ」
未だ不安げなセシルを尻目に、救護アイルーはそそくさと自分達の体格に合った岩場の陰に隠れた。それなりに職務に従事して慣れているのだろう。彼らは姿が見えなくなった途端に気配までもが消えてしまった。
流石、とセシルは感心したいところだったが、洞窟内に入った時点で既に緊迫した状況に置かれているため、そんな暇はない。
“よ、よ～し……”
すぐさま周囲に気を配って臨戦態勢に入る。洞窟エリアは全てフルフルの行動範囲である。いつ奴が現れるか分からないから油断はできない。
ザッ……ザッ……
セシルは出来る限り音をたてないよう慎重に歩いた。自然の中に於いて人間の発する音は、野生動物にしてみればそれだけで不自然らしく、故に彼らは人の気配を悟り易いという。特に武器・防具等から鳴る金属音は人工の物以外には鳴り得ないので、モンスターの不意を突きたい時や見つかりたくない場合には細心の注意を払わな

くてはならない。
「……」
耳が痛くなるほどに、静かだった。辛うじてセシルに聴き取れるのは僅かに地を鳴らす自身の足音と、身の内から響く心臓の鼓動、そして天井から染み出した雨水が木の根を伝って滴り落ちる音だけだった。
しんと、ただ静かに……。

ピチャン……ポツ……

天井から滴る水の粒が、嘲るように彼女の防具に降って弾けた。
「……」
不意に寂しさがセシルの心に射し、彼女の背筋がぞくりと凍える。目に映る洞窟の全てが美しくも、どこか無機質で冷たい。神秘的な雰囲気の中に、言い様のない不安を孕んでいた。

ピチャン……ピチャン……

普段なら気にならない音が、洞窟の岩肌に反響して大きく感じる。感覚が否応なしに鋭くなっていた。
セシルは固唾を飲んだが、その音さえも響いてしまいそうで咄嗟に歯を食い縛る。彼女の聴覚は悟っていた。ここでならば針を落とす音さえも聴き逃すことはないだろうと。
そう思うと喉の奥を何か大きなものが塞いでいるような錯覚を憶えて息が詰まる。
“だ、ダメダメ！　今からこんなんでどうすんの！　落ち着け私、落ち着け～～～～～～……”
対峙する前からこんなに追い詰められては話にならない。セシルは緊張を解かんとして、水気の多い洞窟の空気を吸っては吐いてを繰り返す。

身体は精神の影響を受けやすい。彼女が一度(ひとたび)気持ちを切り換えると、身体もそれに倣(なら)って次第にリラックスしていった。
無駄に硬直していた身体を、適度に緊張が残る程度に弛緩させる。徐々に平静を取り戻したセシルは、両の手を腰にやって仰ぐように上を向いて背をグッと伸ばすと、ずらりと並んだ鋭い牙と血のように赤い口内……天井からフルフルの口が目の前にゆっくりと迫っていた。
「のあああああああああああああああーーーーーーーーッ！！」
セシルに気付かれたフルフルは首を伸ばしてバクンと噛み付こうとしたが、セシルは絶叫しながら更に上体を反らして何とかこれを躱す。今しがたセシルの頭があったところをフルフルの牙が空を切り、強酸性の唾液が飛び散る。
「うあああああぁぁぁぁぁ」
あまりにも唐突な遭遇に腰を抜かしたセシルは泣きながら四つんばいになり、ぬかるんだ水溜まりの中をバシャバシャと逃げた。
“ヤバかった〜！　今のはヤバかった〜！　こんなのってないよぉぉぉぉ！”
恐らく一瞬でも行動が遅れていれば、セシルの頭は今頃フルフルの口の中であろう。ほんの刹那の反応で一命を取り留めたというその事実に、セシルに凍えるような戦慄が奔った。
セシルは笑うように震える膝に力を込めて何とか立ち上がり、振り返る。
獲物を仕留め損なったフルフルは顔をひくつかせ（セシルの匂いを追っているようだ）張り付いていた天井を離れ、ズン、と着地する。飛竜種らしい巨躯は正面にしっかりセシルを捉え、完全に戦闘の体勢をとっていた。
片やセシルはグシュグシュと涙や鼻水を手の甲で拭いながら、これからどうするべきか挙動不審に陥っていた。
“ど、ど、どうしよう〜！”
あたふたしながらレッドサーベルを構えるが、考えのまとまらな

い頭では明確な解答は導き出せず、そうこうしている内にフルフルはのっしのっしと一歩ずつ確実にセシルとの距離を詰めてきている。
“えっと、確かフルフルとの戦い方は……あ、そうだ！”
と、まだ若干距離が開いている位置でフルフルがピタリと歩みを止めた。無論、攻撃の意思が失せたのではない。既に射程距離、攻撃の圏内なのだ。
「グオオオオォォォォ」
セシル目がけて一直線にフルフルの牙が猛烈な勢いで迫るが、脚は地についたままである。首を伸ばしているのだ。
「うあっ！」
ギリギリのところで横に跳んでこれを回避したセシルは、ほんの十数秒前の全く同じ体験から、酷く嫌な既視感を覚えた。
火竜や他の飛竜種のような甲殻竜ではないフルフルは、身体を覆う皮膚がブヨブヨしている……特に首の皮膚は非常に柔軟で、攻撃する少しの間ならこのように長く伸ばすことができるのだ。先刻、天井に張り付いた状態からセシルを襲撃できたのも、この伸縮自在な首があってこそだった。
「し、正面に立たないこと……」
またもや間一髪のところでフルフルの牙を逃れたセシルは、自分の立ち回りの危うさを猛省しつつ、一つ目の対処法を思い出しながらヨロヨロと立ち上がった。
「えっと、その次が……」
フルフルがセシルを真正面に捉える前に、セシルは一定の距離をとるように、小走りにフルフルの周囲を移動し出した。
“常に動いて相手の攻撃範囲から外れる……だよね？”
頭の中でユノンに教わったことを反芻しながら、セシルは常に相手の側面に位置を取れるよう動き回った。それが功を奏してか、フルフルは何度振り返っても彼女に狙いを定められないでいた。
フルフルは視覚に頼れない分、他のモンスターのように細かい軌道修正ができないのだ。しかし、だからと言って油断ならないのが

自然界の常。このような中距離で撹乱されているからと言って、フルフルの脅威を完全に封じることはできない。
“攻撃は……少ない手数で素早く！”
セシルが攻勢に出る。持ち前の俊足でフルフルの足元に急接近し、深く踏み込んで初撃を放つ。
しかし、
ヌルリ
鋭利に研がれた切っ先が滑る。体表より絶えず分泌されている粘液が、表皮への武器の到達を妨げているのだ。届かなければ当然ダメージには繋がらず、フルフルの表皮は無傷のままだった。
だが対策はあった。粘液が邪魔ならそれ自体を除いてやればいい……そして今回のセシルの武器はその的を射ている。即ち、火の属性攻撃だ。
ボンッ！
「グウウゥゥゥゥ」
セシルの片手剣に付加されている属性の効果により斬りつけた箇所に小さな炎が爆ぜ、粘液が気化・灰化して僅かだが減少した。
皮膚に感じる違和感にフルフルが唸って振り返る。が、既にセシルは離脱して距離をとっていた。
匂いを頼りにセシルを追うフルフル。その一瞬の隙を突いて、セシルは再度攻撃に出る。
“今度は……！”
ボンッ！　ボンッボンッボンッ！
跳び込みからの縦斬りに始まり、同一箇所に寸分の狂いなく連撃を叩き込むセシル。粘液はあっという間に焼け飛び、表皮がようやく露わになった。
「うりゃ！」
掛け声と共に一閃。特異な感触の皮が裂けて赤い血が舞った。一撃だけでは足りない。二撃三撃と攻撃を重ねなければ、倒すのは愚か怯ませることすらままならない。“まだまだ”と息巻いて、勢い

任せにたたみ掛けようとしたセシルだが、のうのうと追撃の機会を与えるほどフルフルも温(ぬる)い相手ではない。
「グオオオォォォォォ」
「！」
フルフルは体勢を低くし、尾の先をまるで吸盤のように展開してそれを洞窟のぬかるみに吸い付かせた。
“来る！”直感でそう感じたセシルは、すぐさま前転しながらの回避行動でフルフルの足元から脱出した。そして次の瞬間、
ヴヴヴヴヴヴヴヴ！
薄暗い洞窟の内部に異質な音が響き渡り、鉱石の突き出た岩肌が青白く照らされる。何とか距離をとれたセシルだったが、ビリッと背中を掠(かす)める感触に冷や汗を掻いた。大きく息を吐きながら振り返って、まだ「ヴヴヴ……」と気味の悪い音と光を放ち続けるその攻撃……『放電』を見る。
フルフルは体内にある袋状の器官の働きにより、電気を生み出す発電能力を備えている。これにより発生するそれはかなりの高圧電流で、迂闊に触れてしまうと下手すれば感電死しかねない危険なものだ。
“こ、これだけは絶対避けないと……”
単純に威力の高い攻撃であることもそうだが、何よりセシルの今回の装備はこの電気・雷を弱点とする『ダイミョウザザミ』の甲殻で造られた防具であり、絶縁性が極端なほど低いのだ。放電はもちろんのこと、『ブレス』攻撃（電気によって球体に形成されて射出されるフルフルの攻撃パターンの一つ）なんて受けようものなら、自身がどうなるかなど想像するに容易(たやす)い。
とはいえ立ち回りとして危うい部分はあるものの、相手の攻撃は回避し、また、自身の攻撃は適切なタイミングでしっかり加えている……総じて見ればセシルは優勢だった。
“このままなら……もしかして？”
セシルの心に僅かに希望の火が灯る。よもや倒せるか？　などと

慢心するべからずだがそのような驕りもなく、神経を摩耗しながら慎重に対峙する気でいた。

しかして、嗚呼無情……どこの世界にも『予期せぬ事』が起こり得る。

「グゥゥゥゥッ……」

フルフルは首を限界まで縮め、その妙な挙動にセシルは“怯んだ？”と思ったがそうではない。

セシルは失念していた……フルフルの起こす行動の中で、ブレスや放電と同じくらい警戒しなければならない『それ』を……。

「ギョアアアアアアアアアア！！」

『バインドボイス』……餌食となる生けとし生けるものを震撼せしめるワイバーンの咆哮である。

「うっ……あっ……！」

十数歩分くらいの距離を置いていたセシルだったが、それでも耳を全力で塞がずにはいられず、身体も強張って身動き一つろくにできなかった。このようにハンターを反射的に硬直させてしまうのがバインドボイスの最も恐ろしいところで、これは『反射的』というように生身では防ぎようのない、本能に直結する危機意識を刺激するものなのである。

周囲の空気をビリビリと震わすその咆哮は、塞いでいる手の厚みなどものともせず、鼓膜をも突き抜けて脳に、身体の芯に轟く……それは正に音波の炸裂だった。しかもここは洞窟内部、水一滴さえ過敏に響く環境である。フルフルは首を自在に伸び縮みさせながら超大な音量で鳴き続け、その音を全ての岩やら鉱石やらが反響させ、洞窟内部は音の地獄と化していた。

“……やっと止んできた”

目を閉じたまま消失していく音の奔流に安心するセシル。緊張を解いたワケではないが、それでも咆哮の責め苦に晒された聴覚の解

放感は否めない。
ほっと軽く脱力するが、
「ギョアアアアアアアアア！！」
“ま……また～？”
連続した二度目の咆哮に再びセシルは耳を力いっぱい塞ぎ、身体を硬直させた。
フルフルが連続して吠えるのはよくあることだが、ただでさえ精神的に余裕のないセシルにとってこの展開は更に追い詰められるものとなった。
焦りを募らせながら薄らと瞼を開き、咆哮の最中にいるはずのフルフルを視認しようとしたセシルだったが……瞼の向こうに見えたフルフルはとんでもない行動に出ていた。
“え……、もうブレス！？”
未だ咆哮は鳴り止んではいない。にも関わらずフルフルはセシルに向かってブレスを放つ体勢にいた。
つまり咆哮と同時にブレスという……前代未聞の荒技をやってのけているのだ。
「ゴオオォォォァァアアア！」
“んげっ！？　ちょ、嘘ぉ！？”
有り得ない光景にセシルは大いに焦ったがもう遅い。鳴きながら放たれたブレスは三つ又に分かれ、その内の一つが直線の軌道を描いてセシルに直撃した。
「にゃばばばばばばばばばばばばばああああ！！」
電熱が足から頭の上まで駆け巡り、セシルの意思とは無関係に彼女の四肢は引きつって痙攣を起こした。体感する電気というのは不可思議な痛みである。最初は生ぬるい、何か得体の知れないものが体内で高速振動してるような感覚に陥り、そして遅れて電熱の凄絶な熱さが身体を襲い、焼けたことを実感するのだ。
セシルは痺れて身体中の力が強制的に抜け落ち、力めない脚がくりと膝をついてその場に倒れ伏した。身体のあちこちから煙が立

ち上り、ひくひくと全身の筋肉が無意識に収縮している。
「ヴォアッ、ヴォアアァァァァ」
首を高く上げるフルフル。勝鬨(かちどき)をあげているのか、あちらこちらと踊るように首を揺らす様が陽気な風にも見えた。鼻を鳴らし、仕留めた獲物を探して今にも捕食する気でいるのだろうが……、それは叶わなかった。
「ニャッ！」
ボシュッ
「ヴヲォォ！？」
突然投げ込まれた何かによって辺り一面が酷い臭いに満ちる。嗅覚を働かせていたフルフルは堪らずたたらを踏んで仰け反った。
「ク……クサ……」
その臭いは凄まじいようで……フルフルだけでなく、力尽きて倒れていたセシルまでもが気絶しながらにして呻くほどの臭気だった。
「今ニャ！」
声と共にセシルに駆け寄る白い毛並み。救護アイルー達だ。彼らは悶絶するフルフルを余所に、一匹がセシルを「よいしょ」と担ぎ上げ、残りの者はガラガラと台車を押してやって来た。
素早くセシルを台車に載せた彼らは、未だに臭いに苦しむフルフルを一瞥しつつ駆け抜け、あっという間に洞窟の出口を抜けて霧の立ち込める外へと逃げ延びた。
「ニャッハッハッ！　ババコンガの糞で調合した特性の『こやし玉』ニャ！　さしものフルフルとて耐えられまいニャ～！」
濃霧の中、ぬかるみに滑ることもなく高らかに笑いながら先頭を走る救護アイルー。鼻には器用に鼻栓を詰め込んでいる。
「自分だけ鼻栓用意してんじゃニャいこのアホたれ！　オイラ達の鼻もどうにかなりそうだニャ！」
「臭過ぎるニャ！　堪らんのニャ～！」
台車を押す後ろのアイルー達は半泣きになりながら先頭のアイルーを罵倒した。彼らの鼻には何も詰まっておらず、どうやら先頭で

台車も押さずに悠々と突っ走るアイルーの独断の作戦に巻き込まれたようだ。
「ぼやいてニャいでキリキリ押すニャこのクソ後輩共！　お前らニは肥やしの臭いがお似合いニャッハッハッハッハー！」
「おン前……後で覚えてろニャーーーー！」
「火炙りニャ！　丸焼きニャ！」
「聞こえニャ～い！」
　静かな湿地に知られざるアイルー間のやり取りがこだまする中、セシルを載せた台車は慌ただしくベースキャンプへ一直線に向かって行った。

「今の咆哮は……」
「ああ、フルフルだな。まず間違いなく」
　デザートの炎熟マンゴーを皿に切り分けてる最中、突然遠くから聞こえた異様な嘶(いなな)きに全員が振り返った。
「フルフルの咆哮って、高級耳栓じゃないと防げませんよね？　……セシルさん、危ないんじゃないんですか？　耳栓どころかあの装備じゃ……」
「う～ん、命に関わることはないだろ？」
　集会所で『ミス・寄生』と後ろ指を指されるセシルだが、アイツもあれでいて結構立ち回れる方だと俺は思ってる。無駄に緊張さえしなければ上位とはいえフルフルにそう簡単にやられたりはしないだろう。そうでなければ……、
　ガラガラガラガラガラ！
「あ～やっぱ無理だったか……」
　簡単にやられちまったみたいだな。エリア間を繋ぐルートの奥から迫る台車が走る音……十中八九セシルが載ってるはずだ。
「ニャ～～～～ッ！」
　台車の車輪が回る音と猫の鳴き声が、白く霞む景色の向こうから

徐々に近付いて、ガサガサと茂みを突き破って駆け込んできた。
真っ先に到着したのはギルドとの契約を意味する腕章をつけた救護アイルー（何でこいつ鼻栓してんだ？）。それに続いて数匹の救護アイルー（何でこいつら泣いてんだ？）が押す木製の台車が、ガラガラとやかましく到着した。
台車の上にはボサボサに乱れた金髪とやや黒ずんだ赤いザザミ装備……セシルがぐったりして様子で、プスプスと焦げ臭い煙を所々で登らせながらうつ伏せに力尽きていた。
なるほど、フルフルのブレスをくらいやがったな？
「せ、セシルさん！」
慌ててアニエスが駆け寄りそうになるのを、救護アイルー達が制止した。
「ニャッ、無理に動かすとこの娘さんの身体に障るニャ。それにフルフルの電撃を受けて感電してるから、下手に触れるとアンタも危ないニャ」
「で、でもこのままじゃ……」
「よし、後はまかせな」
俺はおろおろするアニエスの脇を抜け、肉球を見せるように手を上げて止めようとする救護アイルーの頭を軽く撫でて退かし、セシルの傍に寄った。
「あ、危ないと言ってるニャ！」
言いながら鼻栓をした救護アイルーは、俺をセシルから遠ざけようと縋（すが）るように俺の脚にしがみ付いた（爪立てんな。食い込んで結構痛い）。俺はしがみ付くアイルーの眼前に、手に着けているものを見せた。
「電気を通さないゲリョスの皮で作られた特注の手袋だ。これ着けてるから平気だよ」
密林やここ、沼地を活動域にする毒怪鳥『ゲリョス』。その表皮は雷属性に強い耐性を持つ絶縁体のゴム質で知られ、その特性から前述の武器の柄に使われたりする。この手袋もその応用で、街の加

工屋が道楽で作ったのを俺が面白がって昔買い取ったものだ。正規の防具じゃないからこういう時ぐらいじゃなきゃ使えないのが難点だが……。

「ニャァ、まあそれなら……」

渋々納得した様子で手を放した鼻栓アイルーは「じゃあまかせるニャ！」と気持ちを切り替えたようで、シャキッと背筋を伸ばして敬礼の真似事をすると、後ろにいた救護アイルー達（まだ泣いてる）に向き直った。

「さあ皆、持ち場に戻るニャ！」

ズバッ！

「ニャフン！？」

ゲシゲシッ！　ゲシッ！

「ちょ、待っ！」

意気揚々と同僚に声を掛けた鼻栓アイルーに、後続の涙目のアイルー達が引っ掻いたり蹴りを入れたりでリンチしだした。何だ？仲間割れか？

盛大に殴（ボコ）られたアイルーは地面に顔を付けた状態からよろめきながら立ち上がった。

「ニャ……、じゃ、じゃあ今度こそ失礼するニャ……」

「置いてかれてんぞ？」

「ニャア！？」

振り返って仲間（？）を確認するがもう遅い。地べたに倒れてる間に他の奴らはせっせと行っちまった……アイルー同士ってこんな殺伐とした仲だったか？　もっと強い結束を持ったコミュニティと思うんだが……。

「ま、待ってニャ～！　オイラが悪かったニャ～！」

叫びながら茂みの奥に帰っていくアイルーを見送り、俺は向き直ってセシルを見た。

「……せ、セシルさん？」

アニエスが甲斐甲斐しく、しかし触れないように声を掛けるが返

事はない。「まさか！」と嫌な結論に思い当ったアニエスの目に涙が浮かぶが、俺には分かる。
少なくともフルフル相手で『まさか』はねえよ。
「セシル～？　セ～シル～？」
……
「今からデザートだぞ～？」
……
「よ～く熟した食べ頃の、甘くて美味しい炎熟マンゴーだぞ～？」
「あ、食べる」
「キャアアアア！？」
何事も無かったかのようにむくりと起き上ったセシルに、意表を突かれたアバウス兄妹がめちゃくちゃ驚いた。だから心配ないっつったじゃん。
パリパリと空中に電気を放出しながら（漏電してる、近寄らない方がいい）セシルは「デザート冷えてる？」と頭を掻きながら聞いてきたので「おう、ばっちり」。それを聞いたら満足してテントに入り、傷を癒すべく一旦ベッドで休みだした。
デザートだけはセシルの分も容易していた俺は、あいつが起きるまで氷結晶を敷き詰めたクーラーボックスにデザートを保管した。
ふと見ると、まだ唖然としていたアバウス兄妹がいたので、俺は笑って肩をすくませた。

第十二話……White darkness.（後書き）

この～木なんの木発情期♪
こんばんわ皆さん。夜更かし大好きむぎとろです。
仕事が深夜帯にシフトして、大幅に狂い始めた生活リズムにテンションがヒャッハーですが、そんな素振りは微塵も見せずにＮＯＳでは取り繕っていこうと思います、（。∀。）ノ
さて、セシルが人間離れしてきた十二話です。
おっかしいな～？　別に萌えキャラ化する意図もなかったけど、これじゃバケモンですよ。
決めた、もっと可愛く書こう「セシルは俺の嫁」コメントが飛び出すくらいに可愛いヤツ。

あ、それからですね？
自分の文章能力がどの程度のものなのかピンとこないので、評価して下さる寛大な方は『文章評価』『ストーリー評価』お願いします
＞ｍ（__）ｍ＜

第十三話……Ｒｅａｄｉｎｅｓｓ　ｃｏｍｐｌｅｔｉｏｎ．（前書き）

明けましておめでとうございます、（ °∀ °）ノ
つい先日両親の帰省に寄生して田舎に行ったら従姉の娘っこが五歳になってました。皆の前で可愛らしくプリキュア歌うその姿に、
私
「ごめん、ちょっと抱きしめていい？」
従姉
「やめて」

とまあ関係ない話はこの辺にしときつつも僅か三文字で全開に拒否されたことに軽く凹んだ私が書いた第十三話目はちょっと短めです
…（；´・ω・、）ノ

第十三話……Readiness completion.

一眠りして回復したセシルはあくびしながら「デザート～♪」と間の抜けた声でのほほんと甘味にありつこうとした。が、俺はそれを止めて水を浴びるよう指示した。何故かって？　だってこいつ、まだ身体中から電気が漏れてて危険なことこの上ない。

「デザートは逃げやしねえよ」

と説得して、何とかセシルはブーブー文句を垂れながらもこれに同意。泥が沈殿しきって固まった水のきれいな場所があったので、そこでセシルは防具とインナーを脱いで裸で水浴びしてる。

「ユノ～ン、もう上がっていい～？」

大きな岩を挟んだ向こう側からセシルの声が響く。厚い雲と霧に視界を遮られて空模様を見ることはできないが、周囲の光が弱くなってるところを見ると、沼地は夕刻に差し迫っているようだ。

「おう、大丈夫そうか～？」

「えっとね、お魚が感電してプカプカ浮かんできてるけど大丈夫と思うよ～？　あ、黄金魚だ、ラッキー♪」

「全然大丈夫じゃねえよ！　危ねえから（俺らが）しばらくそこにいろ！」

「……む～」

天真爛漫を軽く飛び越える能天気加減だ。一回失敗したことで気落ちしてもらってもフォローに困るが、ここまでパッパラパーな態度だとリアクションに困る。恐らくこいつの脳内ではもうフルフルへの恐怖より、炎熟マンゴーの甘い口当たりの方でいっぱいなんだろう。

常々思ってたことだが、自分にプラスになることしかインプットしないこいつの頭はある意味特筆に値する。

ところがそうじゃなかった。
「うん、あれは無理」
完全に電気の抜けたセシルは乾かしておいたインナーと防具に再度身を包み、少し冷えた身体を暖めるために焚き火の前で暖を取りつつ炎熟マンゴーを口に運びながら、同じように焚き火を囲むように座る俺らに妙にはっきりとした――少し怒ったようにも見える――口調でそう言った。
一方俺ら三人はデザートはとっくに食い終えていたので、コーヒーの注がれた木製のカップをそれぞれ手に携えて些か様子のおかしいセシルに注目した。その様子に見慣れている俺はともかく、アバウス兄妹は若干虚を突かれたようにカップを両手に固まっている。
「そもそも女の子にあんな気味の悪いモンスターの相手させるなんて鬼畜以外の何でもないよ。ねえユノン、ちゃんと聞いてる？　この鬼畜」
淡々且つ、まくし立てるように光彩のない目で俺を見ながらセシルは言った（鬼畜ってなんで二回言った？）トラウマになるぐらいの体験だったことが伺える。まあだからといって俺に反省する気は更々無いが。
「私火薬草持ってきてるからさ、大タルとニトロダケ現地調達して大タル爆弾作ろうよ。しかもホラ、さっき浮かんできたお魚の中にカクサンデメキンもいたんだよ」
言いながら右手でポーチからごっそりと取り出したのは、爆薬の素材となる燃えるように猛々しい赤色をした、発火作用のある火薬草。そして左手にはぐったりと息絶えて目玉を剥き出しにした無彩の鱗に覆われた金魚……カクサンデメキン。
カクサンデメキンは絶命時に拡散するように発破する小さな魚だ。可燃性物質が体内の構成成分に含まれていて、こいつを大タル爆弾と調合すると更に威力の高い『大タル爆弾G』になる。
てゆうか、行く時に妙にポーチがパンパンに膨れてると思ったらこいつこんな色々持って来てたのか。

まあこいつなりに考えた上での準備なんだろうが、その提案にイエスと言うワケにはいかない。
「だから何だ。大タルGでもこさえようってのか？」
「そう。で、爆弾でフルフル吹っ飛ばそう」
さも当然のような口振りで言うな、とツッコミを入れようかと思ったが止めた。眼がマジだ。
「駄目、絶対」
勢いづいて力説しようとするセシルをピシャリと遮って、俺は断固反対の意を示した。気概を削がれたセシルはすかさず反論に出る。
「何でよ！」
「何ででも！」
「でも、火がフルフルの弱点なら効果は高いんじゃないですか？」
それに疑問を感じたアニエスが正論を持ちかけてきた。確かに大タル爆弾Gともなれば奴の体表を守っている粘液を諸共にぶっ飛ばせるだろうが、それでも尚俺には爆弾の使用に反対する理由があった。
「セシル（こいつ）に爆弾を触らせたくないんだよ」
そう言ってセシルを指差すとムッとして睨み返してきたが致し方あるまい。こいつは前に支給品の大タル爆弾を誤爆させて、よりにもよってベースキャンプを吹っ飛ばしたという忌むべき大失態をやらかした前科があり、以来こいつには（少なくとも俺の前では）小タル爆弾すら扱わせたことはない。
子供の火遊びはどんな大惨事を引き起こすか分からんと付け足しながらアニエスにその事を説明すると、
「……セシルさぁん」
これには流石にアニエスも呆れ果てて、どうフォローしていいか分からずに情けない声で訴えるようにセシルを見た。
「むぐっ……でも私も上位ハンターだよ？　色んな修羅場をくぐり抜けてきたんだから、そんな心配はもう無用だよ」
無い胸を張って偉そうにふんぞり返るセシルだが、その色んな修

羅場のほぼ全てに俺を同行させたことを忘れてはならない。
「へっ、宛てになるかそんなもん。とにかくお前がいる以上爆弾は禁止！　俺も使わん！　アバウス兄妹も使わん！　いいな！？」
俺のこの発言にアバウス兄妹が「何で私達も？」みたいな顔をした。これは流石に勘だが『セシル』と『爆弾』という組み合わせには妙に凶々（まがまが）しい巡り合わせを感じてしまい、誰が扱ってもこいつがいる限り何か善からぬことが起こるんじゃないかという気さえしてくる。自分で言ってて少々大袈裟な気がしなくもないが、そう言った故に俺は今回に至っては一切の火薬や、その他可燃性物質の使用を厳禁せざるを得ないのだ。
俺が吐き捨てるようにそう言うと、今度はセシルも黙っていられずに猛抗議にでた。
「もう、私すっごい怖かったんだからもっと気遣ってよ！」
言うほど神経繊細じゃねえだろ。
「でかい口叩くなヘボ！　やられる前にペイントボールぐらい付けとけこのヘボ！　ヘボハンター！」
「酷い！　ヘボって言った！　三回も言った！　親にも二回しか言われたことないのに！」
「……言われたんだ……」
本日二度目の口論合戦。内容は売り言葉に買い言葉でいい加減アバウス兄妹も傍観を決め込むに至ってしまったが男として、幼なじみとして、そしてこいつの狩猟の教育を任されている身として俺は断固として言い負けるわけにはいかない。
そうしてしばらくして、
「あの、ビーバーさん。そのくらいにしてそろそろ出発しませんか？　日も沈んできましたし……」
両腕を交互にぐるぐる回しながら殴りかかってくるセシルの頭を左手で押さえつけ、控えめな調子で割って入ってきたアニエスに顔を向ける。そうだ、できることなら夜の沼地は避けたかったが時間は有限。こんなことしてる場合じゃなく、さっさと片付けちまわな

いと後々差し支える。とはいうものの、周囲を見れば群青色した淡い闇と焚火の灯りとが地面と大気に色の境界線を作ってしまっていて、時既に遅く……間もなく沼地は夜の支配下となる。
「おお、そうだな。こいつの言ってた『ブレスと咆哮を同時にやってのけるフルフル』ってのも気になるし」
俺の言葉に全員が真剣な面持ちに変わる。そりゃそうだ。そんなことができるフルフルなんて聞いたこともないし、それがセシルの見間違いでなければ今回の獲物は大変なターゲットだ。
「クエストレベルが上がるに連れてモンスターの攻撃パターンってのは増えるもんだけど……そいつはいくら何でも脅威だな」
「私本当に見たんだよ！　吠えてる最中にブレスを撃つフルフル！」
信じてほしいとセシルが熱弁する。別にお前を疑ってるワケじゃねえよ。確かに内容が内容だけにわかには信じ難いが、それでもお前がブレスをくらってまで得た情報を疑うほど俺も薄情じゃねえよ。
「でも、冷静に考えてそんなことできるんですか？」
まだ温(ぬく)いコーヒーの入ったカップで両手の暖をとりながらアニエスが首を傾げる。
「て言うと？」
「出来る出来ないは別にして……バインドボイスのような大きな音とブレスの電気の塊が、フルフルの口っていう狭い空間の中で一緒に発生し得るものなんでしょうか？」
「ああ、まあ絶対にあり得ない話ではないな」
「……どういうことだ？」
訝(いぶか)しげな表情で聞いてきたディーゼルに、俺はコーヒーを一口啜り、一拍間を置いて説明した。と言っても、俺も学者じゃないから完璧なことは言えない。あくまで推論だ。
「音と電気は同時に発生出来るってことさ。二つを音波と電波の『波動』って考えればいい」
音波は媒質、つまり波動が伝播する場となる物質・物体（空気、

水、その他に固体も含む）が必須であり、これがあって初めて振動の波が空間を行き来して対象に伝わり、また、音その物の存在を可にしている。
　ところが電波はこの媒質を必要としない。媒質無しでどうやって電気は飛び交うのかという話になるが、物凄く大まかに言うと電気は光のエネルギーの性質に近いため、音波とは違い、物理的な影響下に置かれ難い次元で空間を行き来し、存在することができる。よって、二つのエネルギーの存在する次元が異なっていれば、同一空間上に於いても両者を互いに反発もなく発生させることは不可能じゃない。
　と、まあ理屈じゃ何とでも言えるんだが……
「それでも、どう考えても今までにない攻撃パターンであることに変わりはないな。んなことができるならそのフルフルはかなり器官が発達してるか、実はG級を越える新種かのどっちかだ」
「じ、G級を越える？」
　動揺するアニエスに俺は頷くしかなかった。
　個体そのものの単純な身体機能が強くなると今までにない行動をとるようになるのは、下位とG級を比べて見れば確定的に明らかだ。常にモンスターの最新の生態を調査する書士隊も完璧じゃない。今回のフルフルはそういった調査の網を掻い潜った例に該当している可能性がある。
「そんなのに、今から挑むのか……」
「……強敵ですね」
「じゃ、私帰るから」
　ディーゼル、アニエス、セシルの順で思い思いの言葉が呟かれた。俺はとりあえず立ち去ろうとするセシルの頭を腕でギッチギチにホールドしながらアバウス兄妹を見やった。
「ユノン痛い！　凹む！　ユノンの腕の形に私の頭が凹んじゃう！」
「どうする？　リタイアするか？」
　ギリギリと締めあげられて喚くセシルを無視してアバウス兄妹に

問いかける。引き際を見極めるのも大事なことだから、ここでクエストを放棄するのも一つの手だ。
「……」
少し困惑したように黙り込む兄妹。
無理もない。セシルの見たものが本当なら、その時点でクエストの難易度は大きく変わってしまっている。そしてそれは、この兄妹の技量でどうこう出来るものかと言われれば難しいところだろう。
しかしだ。それなら無理してまで相手をする必要はない。フルフルはこの沼地にいる奴だけじゃないんだから、身の丈に合った強さの奴を相手取ればそれで良い……そう思って尋ねたんだが、
「いや、やる」
「ご指導よろしくお願いします！」
決意を込めた眼で、力強く二人とも頷いた。その決断を勇気ある英断か、無謀な臆断かのいづれかと聞かれたら玄人は後者を言うだろうな。
「正直な話、かなり危険な狩りになるかもしれねえぞ？　それでもやるか？」
相手がどの程度強いもんなのかはまだ分からんが、俺だって何でもできるってワケじゃない。相手の実力次第ではアバウス兄妹のフォローだって難しいかもしれない。
「危険は覚悟の上だ」
「守って貰おうなんて甘えたりしません。私たち、自分の身は自分で守ります」
……
……言うねえ
「分かったよ。ただし、マジで危ない時はすぐ逃げること。生き残ることを第一に考えること。いいな？」
苦笑交じりの俺の言葉に威勢よく「ハイ！」と頷く二人。十中八九無謀なんだろうが、それでも俺は敢えて勇気だと信じたい。それに、いざとなったら俺かセシルが囮になればいいんだし。

「あ、そうだ」
まだ腕の中にいるセシルを見て、俺は思い出してハッとして声を出した。
「何か？」
「セシル（こいつ）は言うまでもないとして……属性が弱点って意味では、お前らの装備も危ねえからそのつもりでいろよ」
俺の言葉にアバウス兄妹が息を飲んだのがはっきりと分かった。
火竜・雌火竜の外殻は耐熱性に優れるクセにどういう訳か雷属性の攻撃に対してはめっぽう弱い特徴がある。その外殻をあしらったアバウス兄妹の装備も、当然のことながら電気を通し易い。今回のフルフルの放電やブレスなんかは何が何でも避けなければならない必要がある。
「油断すんなよ？　セシルは無事で済んだがお前らもそうだとは限らねえんだからな」
「……肝に命じます」
ぎゅっとカップを握りしめてアニエスは重々しく頷いた。追い詰めるような言い方で悪いとは思うが状況が状況だ。今の内に釘を刺しておかないと本番の動きに隙が出来るかもしれない。
それにそんなダラダラした調子で相手とぶつかるより、神経を擦り減らすくらい集中しなきゃならないって心構えで挑んだ方が経験が身に付き易いし、得るものも大きいだろう。
「装備と言えばビーバーさん、その腕と脚の防具は……」
「ん？　ああ、リオソウルZだ」
緊張する妹を余所に、程よく落ち着いた様子でいるのはやはり兄としての歳の巧だろう。ディーゼルは自分の装備と質感がよく似ている俺の脚と腕の装備を見ながら尋ねてきたので、俺も答えた。
リオソウル装備はディーゼルの装備の基になっているリオレウスの亜種にあたる飛竜の素材から作られるもので、特に俺のはG級の個体からしか作ることの出来ない『Z』と称される型（タイプ）だ。原種より個体数の少ない亜種、しかもG級のものなので防具としては間違い

なしの一級品で、ディーゼルの装備が赤を基調としているのに対してリオソウルは宵闇のような深い蒼色をしている。
「蒼火竜か……、通常の火竜でさえ命からがらに狩ってるような今の俺では、とても手に入らん代物だ」
苦笑気味に言うディーゼルに何とも言えないネガティブな雰囲気を感じた俺は、別に慰めるつもりもなしに笑いながら右手で肩を叩いた。
「卑屈になることねえさ。これから強くなっていけばいいんだから。その第一歩として今ここに来てると思えよ。な？」
そう言うとディーゼルは少し安心したように軽く微笑んだ。その隣では食器類を皆の分まで片づけてくれていたアニエスが同じく微笑み、アバウス兄妹は気持ちも新たに未来への光明を見出したようだった。ちなみにセシルは俺の左腕に相変わらず頭蓋を締めあげられ、抵抗も諦めて眉間に皺寄せながらぐったりとして大人しい。
「ところで、本当に爆弾には頼らないのか？」
笑顔を一変させてディーゼルが問いかけてくる。まあ、土壇場で右往左往するより使える道具は使いたい、と思う気持ちは分かるが……、
「確かに爆弾使えばずっと楽にはなるだろうさ。でもお前ら、これから先フルフル相手にする度に爆弾使うつもりかよ？」
「そ、それは……」
俺の一言にディーゼルが言葉を詰まらせる。安易に道具に頼り過ぎると技術が伸びないのはもちろん、何より費用が掛かる。農場を使って自給自足で火薬草を確保するにしても、爆弾の所有は金銭的にかなり嵩(かさ)むからバリバリのビギナーであるこいつらには、むしろ単純な武器による狩猟技術を学んで欲しい。
「それも一つのやり方かもしれんけど、どうせなら自分の腕だけで渡り合えるようになった方が良いんじゃねえか？」
「そうか……いや、そうだな。了解した」
頷いてディーゼルは武器を背負い直し、自身の道具ポーチをチェ

ックし始めた。俺もセシルをその辺に放り出し、持ち物に不備が無いかを確認しようとしたが、ふと気に掛かったことがあってセシルに尋ねた。
「あ、そうだ。セシル……セシル～？」
「んぁ？　何？」
俺に放られたままに地面にうつ伏せに倒れていたセシルは（一瞬死体に見えた）、のっそりと起き上って俺に向き直った。
「一つ確認するけど……お前、フルフルが咆哮と同時にブレスを撃つとこ見たんだよな？」
そう尋ねるとセシルは泣きそうな情けない顔になって言い返してきた。
「だから～、それ喰らったから私力尽きたって何度も言って……」
「じゃなくてさ」
遮る俺の言葉にきょとんとするセシルに、もう一度確認した。
「実際にその目で見たのか？　『鳴きながらブレスの体勢をとるフルフル』を」
「え？　……ううん、目瞑ってたから分かんないけど……」
……『見てない』……か。
「ふ～ん……」
「……？　何？」
「いや、何でもない……まあ行きゃ分かるか」
「？」
出発の準備が整い、俺は一抹の懸念を抱きつつも皆を後ろに歩き出した。
辺りはすっかり夜の帳（とばり）が下りてしまっていて、夜目を利かそうと俺は一寸先の闇を睨んだ。

第十三話……Ｒｅａｄｉｎｅｓｓ　ｃｏｍｐｌｅｔｉｏｎ．（後書き）

てなワケで第十三話・『覚悟完了』でした。
改めて明けましておめでとうございます。我が干支が支配する本年度はめでたいかと思いきや厄年でした。しかも本厄──／●─
まあ何が起ころうとも笑って元気に過ごせるように祈りますよ。あんまり笑えないことが起こったら活動報告にて泣き付きます。

そんな私からＮＯＳで頑張る方々に分際も弁えずに捧ぐこの一枚

＞ｉ３７０３─４９２＜

左がアニエス。右がセシル嬢です。まだまだ勉強中の身でこれが精一杯でございます（、◇、；）

さて、そろそろ録画して見てなかったガキの使いでも消化することにして……皆さま良いお年を（。∀。）ノシ

第十四話……High－quality earplugs.（前書き）

ブリ……ハマチ……ブリ……ハマチ……

ブリ……ハマ……ハッ！？ 。д 。）

十四話ですゝ（ 。∀ 。）ノ

第十四話……High－quality earplugs.

宵の口に迫りつつあるアスタルト……城下の街道を行きかう人々は未だ多く、喧騒が窓越しに屋内にまで喧(やかま)しく聞こえてくるのは日常茶飯事のことであり、最近移住した者でもなければほとんどの住人の耳にとっては慣れ親しんだ生活音の一種である。

永く住みついている者なら尚のことであり、これがこの街の色だ、味だ、愛すべき有りのままの姿だ……と、声を大にして高らかに言い放つ。それほどまでに夕刻のアスタルトは美しく、人々を魅了して止まない。

しかし、この日は違った。

いつもなら深い暖かな色に街は彩られるのだが、この日は引き千切られたような悲惨な形をした雲が空のキャンパスに同じく悲惨な影を疎らに落としていた。そしてそのいつもとは違う黄昏の始まりの下で、王都でも有数の巨大建築物であるハンターズギルド本部もまた、その面妖な光と影に外壁を不吉に染められていた。

そのギルド本部の一階……本部集会所兼酒場となるフロアの奥にはギルドを統括する総大将(ボス)、ギルドマスター専用の私室がある。ギルドマスターである藍瞳青髪の竜人族女性――名を『フジカ』という――は、開け放たれた窓から妙に胸を騒がせる空模様を睨みつけながら愛用の煙管(キセル)を大きく吸い込んだ。

「スゥ……」

喉の奥を掠めた煙が肺を満たす感覚がざわつく胸中を淀ませる。

が、気休めにも何の慰めにもならない。そもそもフジカは空に想いを馳せるほど初(うぶ)ではなかった。

「フーーーー……」

吐く。空が哭いたような茜色の中で、夢現(ゆめうつつ)に見る幻の如く彩りの無い煙が散っては消えた。

カンッ！

苛立たし気に煙管を窓枠に叩きつけると、燃えカスとなった灰がハラリハラリと舞うように落ちていった。

こんな色をした空の日は、いつだって見上げると無性に胸の内を掻き乱される感覚に陥る。

理由は彼女自身が一番理解している。まるで業火のような禍々(まがまが)しいあの色……、目を閉じれば脳裏を過ぎって想起する古い記憶。

荒廃した紅蓮の大地。

天を埋め尽くす陽光を拒絶する黒い雲。

風は熱かった。まるで海をも焦がしてしまいそうなほどに。

行き着く先は地獄の玉座。

そこに君臨していた……憤怒の化身。

多くの飛竜を討ち倒して来た。多くの自分に向けられた殺意を屠って来た。

そんな功績がまるで意味を成さないように、それの存在は大きく、絶対的だった。

戦慄の中、絶望を知らしめる鬨(とき)の咆哮(こえ)。

折れる刃。

飛沫(しぶ)く鮮血。

そして……散って逝った友。

「……」

静かに目を開くと、空はその色を暗い蒼に変えていた。室内には蝋燭の灯すらないため、外界の光が無くなれば必然的に室内も暗くなる。

通りを見れば人の流れも穏やかだった。普段ならこのぐらいの時間でももっと人がいていいはずだが……、

“ああ、冷えるね……今夜は……”

肌寒い。窓から入り込んでくる今日の夜風は、熱帯の気候に反してとても冷たい。

冷気に顔を顰めて窓をゆっくりと閉じるが、建物自体が大分古い。キィ……と錆びた蝶番が軋み室内に物悲しく響き、パタンと閉じられた。

「……」

苛立ちは消え、心の内はまどろむように凪いでいた。が、先刻の古い思い出は寂しさと喪失感を残して記憶の隅に去って行った。

“月日が経つのは早いもんだね……ユノンが八つの時だから、あれからもう十三年か……”

暗い部屋の中、フジカはしかめ面のまま反芻するように瞳を閉じる。

言いようのない孤独感に締め付けられる胸を隠すように腕を組み、閉じた窓に身を預ける。

“私は……、悔いてる？　こうして過去に想いを馳せるってことは、そうなんだろうね……”

もどかしさに悶えそうになる身体を組んだ腕で抑えこむ。

数十年生きてきて孤独にも慣れている筈だ。なのに身体に残るか

つての懐かしい記憶が堪える気概を緩やかに縛りつけてしまう。
「ヨアン……、メアリー……、私は……！」
声を荒げて自らを抱きしめる。
寂しい。
苦しい。
この身が張り裂けてしまいそうな程に。
そうして孤独な自問自答を繰り返す彼女に、
「……？」

光が射した。

満月。黒い雲の隙間から見えたそれが放つ原始の白金の光が、まるで優しく語り掛けるように彼女を照らした。
その光を彼女は見つめた。闇に慣れた目には少し眩(まばゆ)いその光が、身体の緊張を徐々に解きほぐしてくれたからだ。
濡れた瞳に染み入るような暖かな輝きに対して彼女は穏やかに微笑むと、満月に向かって静かに口を開いた。
「……ユノンなら心配ないさ。アンタ達の息子で、私の弟子だよ？
毎日愉快にやってるよ」

コンコン！

そこで木戸を叩くノック音と、続く「失礼します」の男性の声に彼女の意識が現実に戻り、急いで袖で目元を拭った。
「ああ、入りな」
「マスター……って、部屋真っ暗じゃないですか？　何してるんですか？」
入って来たのは街の警備を担当する治安組織『ガーディアンズ』の主装備であるガーディアンシリーズに身を包んだ青年だった。ヘルムを外しているため顔が露わになっており、萌葱のような淡い緑

の髪をギルドショートと呼ばれる髪型に整え、顔つきは精悍な中々の美青年だった。
“馬鹿馬鹿しい……、ただの夕暮れに何を弱気になってたんだろうね私は……”
自嘲気味に笑って灯篭に火を入れる。ぼんやりとした灯りが木の棚に積まれた彼女の古い蔵書や置物を淡く照らした。深い闇を掃うには心許無いが、それでも暗い部屋よりかは全然安心できる。
「何でもない。で、お前の方は何か用があるんだろドレイク？」
どかっと革張りの椅子に座って顔を上げる。先刻までの心細さは消え去り、本来の威厳ある態度と自信に満ちた表情でドレイクと呼んだ青年を見据えた。
「その……善くない報せと、善いか悪いかが微妙な報せがあります」
「微妙な時点で私にとっちゃ善くない報せだよ。要するに二つとも善くない報せかい……何さ？」
「これを」
そう言ってドレイクが渡して来たのは羊皮紙の束を細い麻縄で一括りにした小冊子だった。彼女はそれを受け取ると、表紙をめくって中を見た。
「沼地で確認された盲竜の報告書類を纏めた物なんですが……」
「だねえ。私も目を通した記憶があるよ。これが一体……ん？」
一度見た物をまた見せられるのは何故かと問い質そうとした彼女だが、確認しながらパラパラとページをめくる指がピタリと止まり、一文一句見通していた目がある項目を凝視した。
「気付かれましたか？」
「ああ、こいつはつまり……ってちょっと待ちな。私が見逃したっていうのかい？　知らないよこんなの」
「いえ、一方の書類を担当の子が別の書類と混ぜてしまっていたようです」
「……小娘共は一回きつく締め上げる必要がありそうだね」

閉じた扉を睨む。その向こうのフロアで業務に励んでいるであろう受付嬢達に、今度どんな灸を据えてやろうかと思考を巡らせかけて止めた。今はそれどころではない。
「……確かユノンが今行ってるね？」
「はい……、如何いたしましょう？　すぐに伝書を飛ばしてお伝えした方が……」
「いや、必要ない」
ドレイクの提案を即答で断ると、彼女は手にした書類の束を卓上に無造作に捨て置いた。
「『この程度』でどうにかなるような鍛え方はしてないよ。ユノンはもちろん、お嬢（セシル）も大丈夫だろう。新参の二人がいた気がするが、そっちは私の知ったこっちゃないね。次、微妙な報せってのは？」
「……」
「？　何だい？」
「……『知ったことじゃない』とも言えないんですよ」
「……あン？」

セシルがペイントボールを付け忘れたために勘で探すことを余儀なくされた俺達だったが、フルフルの習性から考えてとりあえず洞窟エリアを探索することにした。
「うぅ～ゴメンね～？　いっぱいいっぱいで頭が回らなかったんだよ～」
「大丈夫ですよセシルさん。きっとすぐに見つかりますよ」
心底申し訳なさそうに謝り続けるセシルをアニエスが優しく宥めながら、俺達は夜の闇と霧の白い闇の混じる湿地帯を横切って行く。
沼地は日がな一日曇天に見舞われるから夜間でも月明かりに頼れず異様に暗い。幸い暗くなって大分時間が経ったので皆夜目が利いているが、いかんせんアバウス兄妹は大陸を渡ってきてからの初めての狩場だし、セシルにいたっては論外だ。総合的に見て俺達パー

ティにとってこの暗闇が不安要素なのに変わりはない。フルフルの探索に二手に別れることも叶わず、今になって俺は今回のクエストの先行きの不安さを実感した。
「所々で木の根が出っ張ってるから気をつけろよ？」
よたよたしながらも何とかついてくるアバウス兄妹だったが、
「これは、存外……」
「あ、歩き難い……」
やはりありのままの自然の足場には四苦八苦している。かくいう俺も沼地にはかなり間を置いて久しぶりに来たからイマイチ感覚が掴めないでいた。地理を忘れたワケじゃない。来ていなかった内に植物が繁栄してしまったために、段差とか身体が記憶しているものとズレが生じているんだ。
「ねえねえユノン」
ん？　と、振り返るとセシルが寄り添って耳打ちしてきた。金髪がサラリと頬に掛かってこそばゆい。
「私思うんだけどさ。やっぱりビギナーっぽいアニエスちゃん達があのフルフルと闘うのって危ないと思うんだよ」
その言葉、そっくりそのままお前に返す。
「私のことはいいの！　キャンプではアニエスちゃん達も覚悟はしてたっぽいけど、いきなり直接戦わせるのは気が引けるよ」
「まあ、そりゃそうだが……随分とあいつらに気を遣うじゃねえか」
初めて会ってからまだ一週間も経ってないのに。
「もう仲良しだもん。友達を心配するのは当たり前じゃん」
微笑みながら得意気にセシルは言い切った。この辺は女の子同士、お互いに打ち解け易い親近感（シンパシー）みたいなものがあるんだろうな。男の俺にはよく分からんが。
そしてとりあえず、セシルの言うことも尤もだ。
相手のフルフルのポテンシャルにアバウス兄妹の実力……、敵も味方も未確認の情報だらけで、実際の所今の状況下でアバウス兄妹を敵とぶつけるのはリスキーだ。

“まず俺が戦って……、ある程度弱らせてから兄妹には参加してもらうか……”

これが一番危険が少ないと自己完結に至り、そうこうしている内に洞窟の入口に到着した。

ヒュオオォォォ……

背筋に悪寒が走る。別に霊的なものを感じ取ったのではなく、洞窟の内側から外に向かってまるで吐息のように緩やかに漂ってくる冷気によって、ただ単に寒いだけだ。

皆何をすべきかは言わずもがなで、全員携帯していたホットドリンクに手をかけた。トウガラシとにが虫とで調合されるこの携帯飲料は体力を消耗し易い寒冷地等で非常に重宝するのだが、何せにが虫を混ぜ込んでるもんだから味の方はからっきしだ。ちなみに本日二度目のホットドリンクとなるセシルは、上記の理由に加えて生来の虫嫌いが災いしてこのホットドリンク、そして逆の気温を有する環境に必要なクーラードリンクを飲みたがらない。まあ今はそんなワガママが言える状況じゃないから、我慢して鼻摘(つま)んで一気に飲み干してるが。

「んじゃ行くぞ」

身体の芯から湧いてくる熱にホットドリンクの確かな効果を感じながら、俺は先頭に立って足を踏み入れた。

外の天気を鑑みるに中はさぞや暗かろうと思っていた洞窟だったが、意外にも天井の割れ目からは月の光が差し込んで明るい。この洞窟のちょうど真上は雲に穴が開いてるのかもしれない。

「わぁ、綺麗……」

その光を鉱石が剥き出しになってる岩肌が反射して幻想的な色味で煌めいているのを見て、アニエスが感嘆の声を洩らすがすぐに口を塞いだ。その呟くほどの声量すら反響したこの環境に警戒したのだ。

フゥ……フゥ……
スゥ……スゥ……
声だけじゃない。静寂になってしまえば例え呼吸音でさえも容易に聴き取れてしまう。つまり聴覚の鋭いフルフルにしてみれば、この洞窟に入っただけで獲物と捕食者の関係が成り立ってしまう。
ハァ……ハァ……
ウゥ……ウゥ……
最早ここまで来ると声を潜める意味もなく、俺の後に続いていたアバウス兄妹やセシルは小声で沈黙を破った。
「音が凄く響くな……」
「……」
「こんな所でバインドボイスなんてされたら……」
「うん、めちゃめちゃうるさいよ。私どうしようもなかったもん」
「……」
「フルフルどこ行ったんだろ？」
「一度セシルさんに遭ってますから、警戒して外に出たかもしれませんね？」
「なるほどね～、ユノンはどう思う？」
「……」
「ユノン？　さっきから何で黙って――」
「伏せろ！」
手を柄に滑らせて銀鍋【喜喜】を掴み、身体を捻って鍋底をブン回す。咄嗟に反応できるように皆程よく緊張していたので、俺の号令通りに膝を折ってその場に素早く屈んでくれた。お陰で俺のハンマーは誰にも当たることなく『そいつ』に直撃した。
ドゴォッ！
「ヴオオッ！」
皆の頭上。そこにフルフルの頭が大口開けて構えていた。
「なっ！？」
「キャアッ！」

俺の一撃で天井に張り付いていた脚がはがれ、辛うじて尾だけでぶら下がっていたフルフルは振り子のように揺れていた。
振り子は振れれば帰ってくる……俺は体勢を整えて構え直し、戻ってくるフルフルの伸びきった頭に力の限りを尽くした一撃を再度見舞った。
「もう一丁！」
ドゴォッ！
「ヴオオオオオオ！」
この一発で支えとなっていた尾も天井から剥がれ、フルフルは受け身もろくに取れないまま不恰好に頭から地面の泥濘（ぬかるみ）に落ちた。その拍子に泥濘は深く陥没して、舞い上がった泥の飛沫が俺達の防具を濡らした。
「間一髪セ～フ」
「あ、危なかった～……」
「もう少し遅れていたら確実にやられていたな……」
完全に虚を突かれた襲撃から生還したことに安堵しながらアバウス兄妹も攻撃体勢をとった。
「この手の不意討ちはこいつの専売特許だ……よっしゃ、各自散開して動き回れ！　撹乱して狙いを付けさせんな！」
言うや否や三人はそれぞれ駆け出し、俺、セシル、ディーゼルはフルフルを囲む三角形を描くように陣取り、アニエスはディーゼルの後ろで更に距離を取って愛用の弓・『クイーンブラスター』を構えた。
一方のフルフルはと言うと天井から叩き落とされたのが余程勘に触ったのか、俺に向かってズラリと並んだ鋭い牙を剥いて威嚇していた。アバウス兄妹には出来る限り危険を避けてほしかった俺にとって、相手の意識が俺に向かうのは願ってもない。
「俺と遊ぼうってか？」
「ヴオオォォォォォ……」
「よ～し、良い子だ」

多分セシル達に包囲されていることにも気付いちゃいるだろう。が、それらには見向きもせずに頭の先をひくつかせながら完全に的を俺に絞っているフルフル。

俺は予期せずに上手く進行していく事態に口角を吊り上げてニヤけると、頭を切り替えて集中した。

息を全て吐き、視野を広くして肩の力を抜きつつ、ハンマーのグリップをギュッと固く絞る。肩幅に開いた脚を中腰に屈めて力み、

「かかってこいやァ！」

解き放つように駆け出した。正面から外れるように相手の斜め前方に向かってのダッシュ。当然相手は俺を捕捉しようと巨体を微調整して向きを変えるが、俺はそれから更に逃れるように加速しながら弧を描くようにフルフルの側面に行き着いた。

眼前には折り畳まれたフルフルの翼。関節でもある翼爪部分目がけて渾身の力で銀鍋を叩きつける。

「ふんッ！」

ベシャッ！

けれども、体表を覆う粘膜の層が打撃を阻まれた。やっぱり属性無しの打撃じゃダメージにならねえな。

「チッ！」

不確かな手応えに舌打ちしながら前転して奴の攻撃圏外へと離脱。奴の出方を見る。

「ヴォアアアア！」

何事も無かったように俺に向き直るフルフル。しかし俺にしか注意が向いてないその隙だらけの巨体に幾つかの矢が浅く突き刺さった。アニエスだ。

「ヴォォォォォ……」

何らダメージを負った様子もないフルフルだったが、頭をもたげる方向が俺から逸れて……奴の矛先が今度はアニエスに変わる。

まずい……そう思って前に出ようとしたが、そこで隙を突いてディーゼルとセシルが踏み込んで先に攻撃を加えた。

「ヤア！」
「ハッ！」
ディーゼルが切り付けた後に、小さいが血飛沫が上がるのが見えた。厚い粘液をこうも簡単に切り裂くのは流石というか何というか、太刀の切れ味には恐れ入る。
それにセシルだ。ディーゼルはともかくセシルの武器は唯一奴の弱点を突いてるから、長期戦になるかどうかはアイツの働き次第だろう。
前衛三人（その内一人が属性攻撃担当）に後衛の弓使い……こうして実戦の中でパーティの戦力を分析すると……、意外とバランス良いなこの編成。
「ビーバーさん」
フルフルの周囲を回るように移動していく中で、俺と歩幅を合わせるようにディーゼルが寄って来た。
「ん？」
「さっきは偶然妹に注意が向いていたから攻撃できたが……、それ以外で攻撃できる機会は何か無いか？」
「そりゃ……」
言い掛けて思い出した。そう言や俺、こいつらにフルフルの狩り方レクチャーするって約束してたんだった。
「応、あるぜ。付いて来な。実際に闘(や)り合いながら教えるよ」
言い終わる前に駆け出した俺は、ディーゼルがちゃんと付いて来ていることを横目で確認しながらフルフルに接近する。
奴はと言えばセシルに噛み付こうと首を伸ばしていて、しかしセシルの素早い回避行動とアニエスの援護射撃の連携に翻弄されている。
俺は注意を引くために、敢えて水溜まりに足を踏み入れてバシャバシャと煩(うるさ)く駆け抜ける。すると思惑通りにセシル達へ攻撃していたフルフルがぴくりと反応し、身体を転回させて俺達に向けてきた。
「今だ！」

巨体が向いた直後に奴の懐に潜って左脚に一撃叩き込む。胴体よりは粘液の防御は薄く、今度は中々の手応えだった。
「ハァッ！」
続けざまにディーゼルが飛び込んで右脚に一閃。表皮がきれいにバックリと裂けて派手に血が噴き出す。
「ヴォオオオオオ！」
「離脱すっぞ！」
「ッ！」
叫んで二人で奴の股下を潜り抜けた。
奴はと言うと両脚に一撃ずつ入れられて少しよろめいたが、踏ん張って誰もいない見当違いの所へ突進していた。
その隙に既に体勢を整え終えていた俺達は『奴が振り返るように』再度周囲を小走りに移動する。
その間にもセシルとアニエスのコンビが細々（こまごま）とダメージを与えていく。普通なら俺やディーゼルみたいな一撃の威力が高い武器よりも、二人のような手数の多いタイプが注意を引き付けて狙われ易いんだが、幸いなことにこのフルフルは二人の攻撃の一切を無視して俺とディーゼルを狙ってくれている。対フルフル戦を教えんとする俺にとってこれはまたと無い絶好の機会なので、遠慮なく胸を借りる気持ちで殺（ボコ）らせてもらおう。
「ヴォォォォォ……」
フルフルは首をうねらせながら頭を俺達に向け、俺は奴が振り返る直前を見極めて再びディーゼルに突貫の指示を出す。
「もっかい行くぞ」
「了解」
最初の方こそ尻込みした様子で動きがぎこちなかったディーゼルだったが、飲み込みが早いのか、今度は即座に指示に反応した。
二人して奴の足元に入り込み、ほぼ同時に打撃と斬撃の二発を見舞う。
「っらアアッ！」

「ハアッ！」
叩かれ、斬られた脚を痛みを堪えるようにモゾモゾと足踏み「グゥゥ……」と苛立たし気に唸って放電するが、既に俺達は充分な距離をとっていたので全然無事だ。
「気付いたか？」
「ああ、フルフルは振り返り様が一番安全に攻撃できる。だな？」
「そういう事。どういうワケか知らんがアイツは振り返った直後は放電しない。仮に突進が来たとしても、振り返る隙に足元に潜り込んじまえば回避行動に移り易いし、向こうから勝手に離れてくれるって寸法だ」
更に言えばこれは所謂一撃離脱（いわゆるヒット&アウェイ）という戦法で、一撃の威力が高い武器の方が効果が大きい。そして俺達の得物は図らずもハンマーと太刀……、この戦法との相性で言えば抜群にダメージが稼げる組み合わせだ。
「この調子でガンガン攻め込む。遅れんなよお兄ちゃん！」
「そ、その呼び方はやめてくれ！」
言いながら再度特攻する俺とお兄ちゃん。このままの流れで奴の体力を削っていけば、ほぼ無傷でクエストを成功させる事が出来たんだろうが……、生憎向こうも戦闘慣れしている筈の上位モンスター。状況を打開する一手は当然備えてやがる。
「ヴォウゥッ」
頭が胴体と一体化するんじゃないかってぐらいに奴の首が縮んだ。察していち早く動いたのはディーゼル。距離を詰めて一閃斬り込もうと駆けるが、
「ヴォオオオアアアアア！！」
切っ先が届く手前でフルフルのバインドボイスが轟轟と響く。ディーゼルは攻撃動作を強制的に打ち切られて耳を塞ぎ、その場で無防備に硬直してしまった。セシルとアニエスも同様に蹲（うずくま）って音の責め苦に耐えることに必死だ。
そんな中で平然と余裕綽々で動き回る事のできる奴がいた。俺だ。

「び、ビーバーさん！？」
耳を全力で塞ぐ驚愕の表情をしたディーゼルと目が合うが何も驚くことはない。俺が今回装備しているリオソウルは聴覚保護に非常に優れた防具なのだから。
「まさか、『高級耳栓』！？」
その通り。スキルにも色々あるが、最も実用性に富んだスキルの一つがこの高級耳栓。バインドボイスを無効化し、全身硬直による隙を防ぐ。数多の咆哮の中でも特大とも言えるバインドボイスを使うフルフル。そのバインドボイスを克服した俺に、
「死角ナッシング！！」
首を伸び縮みさせながら未だに無防備に吼え続けるフルフルの頭部目がけて、俺は変なテンションから湧き出してくる妙なパワーを力一杯込めたハンマーの一撃をぶち込んだ。

第十四話……Ｈｉｇｈ－ｑｕａｌｉｔｙ　ｅａｒｐｌｕｇｓ．（後書き）

次回予告

ついにユノン達一向はフルフルと対峙した。だがしかし、フルフル如きと高を括ったメンバーは個人的な問題が山積みだった。

十四歳頃から発症して今尚セシルを蝕み苦しめる、謎の奇病の正体とは？

「腕が！　私の腕が！　落ち着け、私の腕ー！」

真実の愛を求める孤独な男、ユノン・ビーバー。

「俺にも見つかるかな……愛が」

「歌舞伎町とかで」「それは愛じゃない！」

『ある珍』まさかのハーレム化。ユノンの漢が今試される。
「お前ら全員嫁に来い！」

戦闘の恐怖から壮絶なブラコンと化したアニエスにモラルハザードを起こすほど愛されて生きるのが辛くなるディーゼル。
「嫌だな～もう！　寝ている兄の上に馬乗りになって上下運動したくなるなんて妹なら誰でも持ってる願望だよ～？」
「……死にたい」

何の許可もなく進行するコラボ企画。

「ルル・アカツキ。大剣使いだ。つゆだく・ネギ抜きでよろしく頼む」

「ケビンです……好きな子が中々デレてくれんとです！　ケビンです……ケビンです……」

「皆、笑わないで聞いてほしい。僕は真剣に……ザレアちゃんと結婚したい！」

平行世界から来たユノンの同一存在。彼の口から明かされる衝撃の事実。
「君がボヤボヤしている内にガチャピンは宇宙に行ってしまったよ。もうすぐ狂喜の宴が始まる……『けいおん！』の第二期がね」

まあマルっと嘘ですけど（、∀、＊）
てゆうかＦＡＭさんと名無しさんとＰ君、勝手にキャラの名前使ってマジでごめんなさい……ムカついたら遠慮なくメッセージ入れて下さい（、◇、；）
読者の皆さま、『月明かりの大剣』と『隻腕の狩人』と『ベルの狩猟日記』は良い作品だから見たこと無い人は私のお気に入りから飛んでけ！

件のＦＡＭさんの『月明かりの大剣』にイラスト支援しました。

＞ｉ４５４８―４９２＜

第十五話……The Offensive and deffensive battle

生きてるってヴぁ！（、・ω・´）

第十五話……The Offensive and deffensive battle

俺に渾身の力でブッ叩かれたフルフルは、必殺の咆哮の最中の不意討ちだった事もあって大きく仰け反った。暗い中でよく見るとセシルとアニエスが結構良い仕事してたみたいで、首や頭の弛(たる)んだ皮がズタズタになっている。

フルフルはまだ全然動ける様子だが……、片や傷だらけになっている奴と、片や全員ほぼ無傷の俺達四人。戦況はどちらが優位かなんて言うまでもない。

「畳み掛けてやるぜ！」

叫びながら俺は追撃の為に一歩踏み出した。フルフルも体勢を低くして俺を迎え撃つ……と思いきや、

「グウウゥゥゥゥ……」

追撃の入る寸前、奴は低く唸りながら垂直に高く跳躍し、身体を捻って天井にヤモリのようにへばりついた。洞窟内に於けるフルフルの攻撃手段の一つとして、前衛型の武器では決して届かない天井から執拗にハンターを付け狙って襲撃するというものがある。

よもやそれか。と思ったが、杞憂にもフルフルは誰に狙いを定めるワケでもなく、天井の端にぽっかりと開いた大穴へと這い進んで行った。

ディーゼルが慌ててペイントボールを投げ当て、アニエスも撃ち落とそうと上に向かって矢を幾つも放ったが距離が開きすぎてる。結局、矢が刺さっても怯むことなく、奴の白い巨体は暗闇に溶け込むように奥に消えた。

「……」

やがて大穴の奥から翼が風を切る音が聞こえ、遠ざかって行く。この穴は外と繋がっていて、ツタでも無い限り人間には登ることができないから、ちょうどフルフルなんかがエリア移動するための通路になる。

「……行ったか」
羽音も聞こえなくなり、訪れた静寂の中でぼそりとディーゼルが呟いた。それを機に皆の緊張が解け、それぞれ大きく息をつく。
「誰も大きなダメージはないみたいですね」
アニエスが安心したように笑顔になる。俺は首肯しながらハンマーを肩に担ぎ直した。
「ああ、予想以上にスムーズだったから俺は少し驚いてるよ。てゆうか、お前ら自分で言うほど下手でもなかったぜ。自信持っていいぞ？」
「本当ですか！？　ありがとうございます！」
更に笑顔を輝かせながらアニエスはディーゼルと喜び合った。
お世辞じゃなくて素直な感想だった。どんな失敗をやらかすかと闘う前から肝を冷やしてたんだが、立ち回りはスマートだし、滅多矢鱈に突っ込むような無謀な事もなかったし、何で今までフルフルを討伐できなかったのかが疑問に思えてくる。そのくせフルフルよりも手強いはずの火竜・雌火竜は防具一式揃うほど討伐成功してるんだからはっきり言ってワケ分からん。
「……それよりもだ」
半目になって振り返り、緊張を解き過ぎて顔面をふにゃふにゃに緩ませたセシルに向き直った。
「セシル。おいセシル、コラ」
「え？　な、何？」
呼ばれてハッと顔を引き締めるセシルに向かって、俺はハンマーを腰に仕舞いながら詰め寄った。
「何じゃねえよ。ブレスもくると思ったら只のバインドボイスじゃねえか」
こちとら件の『咆哮と同時に電気ブレス』とやらを若干楽しみにしてたってのに肩すかしをくらった気分だ。この行き場のない憂さをどこにぶつけりゃいい。お前か？
「おっかしいな～？　私が行った時は確かに……」

言いながらセシルは首を傾げて唸った。ここまで来て今更セシルを疑いたくはないが、この人数で攻め込んできたのにフルフルが出し惜しむってのは状況的に少し怪しい。と言うのも、そもそもモンスターは切り札を持つとか、そんな知性は持ち合わせないからだ。

飛竜種のような大型の野生動物がハンター（というか人間）を見つけるや否や襲ってくるのは、外敵を縄張りから排除する為でもあるが食事を欲している為でもある。あれだけの巨体だから消費するエネルギーも尋常じゃない。一日数回の食事で活動できる人間と違って、その巨躯を維持するには相応の食糧がいる。

要するにモンスター（特に人間を食う奴）は縄張り意識とか食欲とかが先だって本能のままに攻撃してくるから、切り札だの何だのとそんな回りくどいことはせず、手もちの攻撃手段は全開で使ってくるもんなんだ。場合によってはブチ切れて無茶苦茶な攻撃する奴もいるけど。

「もしくは、『使えなかった』とか……」

「ん」

アニエスの言葉に頷いた。

環境的に、あるいは奴の体調的に何らかの条件が揃ってからじゃないと使えないかもしれないって線はありそうだ。今の段階で分かるはずもないが。

「何にせよだ。移動しようぜ。多分まだ洞窟ん中にいるだろうから外に逃げられる前に弱らせよう」

「え？　闘うなら外の方がいいんじゃないんですか？　寒い洞窟よりスタミナの浪費を抑えられるし……」

「今が夜ってことを忘れてねえか？」

「……あ！」

夜と聞いてピンときたアニエスが声を漏らした。

そう、沼地の水溜まりは夜になると毒気を帯びる。戦闘中は僅かな体力も貴重になるから、毒に冒されるのは避けなきゃならない。

「俺やセシルはともかく、お前らは水溜まりの位置とか分かんねえ

だろ？　少なくともホットドリンクが効いてる内は洞窟の方が闘い易いんだよ」
何度も言うが昼に比べて夜は気温が下がる。人間にとって自然界の中での体温調節というのは、時に命に関わってくることもあるからこれも極めて重要な事項だ。
「……なるほど」
納得した様子でそれぞれの武器を背負ったアバウス兄妹は二人して同じ方向に顔を向ける。入って来た方とは逆の洞窟の奥から微かに吹いてくる風。その風にペイントボールの匂いが混じっていた。
「この先の洞窟エリアか、そうでなければ出口を出た外にいるな」
ディーゼルがその方向を睨みながら呟く。順調な展開に気分が高揚してる為かアニエスと二人、表情が活き活きと、それでいて引き締まって見えた。
「行こうぜ。あ、ホットドリンクの効果時間は常に気を付けろよ？　集中するのはいいけど、集中しすぎて飲み忘れたりしたら自滅するからな」
そう付け加えながら先頭を切って歩き出す俺に皆が頷いて続く。雪山みたいな死ぬほど寒い極寒の地ならともかく、洞窟の冷気は動いて体温が上昇している内はついつい見逃し易く、今みたいに集中力が増している時は尚のこと体温調節を怠ることが多くなる。
無論これは危険だ。スタミナの減少を著しく早める気温の低い環境は、たとえ洞窟といえど軽視してはいけない。逆に言えば、集中した状態が帰って自分の首を絞めることになりかねないということだ。
つってもまあ、これ以上強くは言うまい。何故なら――
「嬉しそうだねユノン？」
「まあ、快調だからちょっとテンション上がってる」
視界の隅からひょっこりと顔を出したセシルに歯を見せて答える。
実を言うと俺も少し舞いあがっていた。調子に乗ってる自覚はあるし、経験上全てが上手くいくはずなんて分かってもいる。分かっ

ちゃいるが折角士気が上がってるんだから、これを利用しない手はないだろ。勢いって大事だし。
見てろよ？　あの無駄に鋭い牙、一本残らず叩き折ってやる。

ペイントの匂いを辿って洞窟内部を歩くこと十数分。気温がまた一段と下がって身体が縛られる感覚を覚えた。
狭い通路を四人歩いていくと前方に淡い光。首をコキコキと鳴らしながら一戦交えそうな広いエリアに出る。
「……匂いが濃くなってきたな」
天井を見渡しながらディーゼルが警戒する。さっきみたいに不意討ちを想定してのことだろうが、フルフルの姿は見えなかった。
「いませんね。まだ先でしょうか？」
「いや、息を潜めろ」
全員押し黙って耳をすませる。全神経を集中して聴覚を働かせると……、微かにだが奴の息遣いが聴こえる。
“どこだ？　音が反響して位置が掴めん”
俺を先頭に全員が微速前進しながら無音で辺りを見渡す。確かに気配を感じるが肝心の姿が目視できない為、皆緊張して迂闊に身動きが取れない。
「右！」
セシルが叫んで一斉に右を向く。
何もいなかった。
「ゴメン！　左だった！」
「どおりゃあああああああ！！」
ほぼ脊髄反射で全員前方にダイブすると、立ってた場所に入れ代わりでフルフルの巨体が飛び込んできて派手な泥飛沫が上がった。
危うく奴の下敷きになるところだったことを考えると背筋が凍る。
俺は顔に付いた泥を拭って立ち上がり、怒鳴り散らした。

「セシルーっ！　こんな時に右と左間違えてんじゃねえぞテメエ！！」
「私が右と左を間違えるなんてよくあることでしょ！　一々そんなことで怒んないでよ！」
「逆切れしてんじゃねえ！　お前後で覚えてろコラ！」
駄目だ。緊張で冷静さを欠いてるセシルに何を言っても聞きやしない。取り敢えず後程セシルは強めに五発ぐらい拳骨するとして、今はフルフルだ。
「第二ラウンドォォ！」
頭を揺らしながら誰に狙いをつけるか決めあぐね、俺に尾を向けているフルフルにハンマーを構えていち早く突っ込む。
「おいディーゼル！　攻め方はさっき言った通りだ！　一人でやってみな！」
接近しながら指示を飛ばすと横目に見えるディーゼルは頷いて鞘から太刀を抜き放った。
フルフルは接近する俺に気付いて振り向くが、迎撃するにはその動きは遅すぎる。
「頭もらったァ！」
血管がはち切れんばかりに腕力の限りを尽くした一撃を奴の鼻っ柱に叩き込む。分泌される粘液の層にまたもや阻まれそうになるが、パワーでブチ破った。
「ギョアアアアァァァ！！」
怯んで一瞬首を引っ込め、すぐにまた伸ばして真っ直ぐに噛み付いてくる。俺はそれを振りの速い攻撃で叩き落とし、捌(さば)く。
こいつなりの意地みたいなものだろうか……、他にも獲物はいるのにこのフルフルは執拗に俺に牙を向け続けた。ならば応えてやると俺も真っ正面から迎え撃って……やりたいところだが、生憎こっちは四人のチーム。悪いが数で攻めさせてもらう。
「脚！」
俺がそう叫ぶとすかさずセシルとディーゼルが攻め入った。機動

力の高いセシルが必然的に最初に行き着き、マニュアル通りの連続攻撃でフルフルの脚の表面を焼いていく。適当なところでセシルが離脱すれば今度はディーゼルが粘液の焼失した剥き出しの脚に、抜群の切れ味を誇る太刀で斬撃。さっきと違って体表を守るものは何も無いので一際大きい血の飛沫が赤いレウスシリーズを更に紅く染める。

「グオオオオオッ！」

堪らずたたらを踏んだフルフルは、その場で旋回して尻尾を叩きつけて追い払おうとする。が、こいつの短い尻尾じゃ間合いが全然足りない。俺は迫る異形の尾を上体を反らしてギリギリで避け、がら空きの腹や脚に追撃を打ち込んだ。接近していた二人は早々に離脱していて、視界の端に見える。

「グゥゥッ！」

不意に奴の動きが止まった。荒々しげな吐息が外気の温度差で白くなり、頻りに吐き出される。

怒った。全ての種族に言える事だがモンスターはこうなった時が一番手強い。

俺は一旦距離を取ろうとしたが、奴の首を引っ込める仕草を見てもう一度懐に飛び込む。バインドボイスの予備動作だ。

黙らせようとハンマーを叩きつけるが間に合わない。

「ヴォアアアアァァァァ！！」

空気を震わせながら洞窟に轟く咆哮。高級耳栓のある俺はともかく他の三人はどうしようもなくその場で耳を全力で塞ぐ事を強いられる。

どうにか咆哮を止めさせようとダメージが残ってるはずの脚を連続で強打するが、フルフルは意にも介さずに吠えまくり、結局咆哮一回を丸々許す事になってしまった。

危機はまだ続く。いかに動きが緩慢なフルフルとはいえ今は怒り状態だ。平時に比べてその動きは幾分か機敏になっているし、攻撃を食らえばダメージもでかい。そして何より怒り状態のフルフルの

一番おっかない所は咆哮の短縮化だ。これは一回の咆哮にかかる時間が短くなるってそれだけの事だが、理不尽な事にハンターが全身硬直によって拘束される時間は変わらない。そう、まさに今だ。

「怯め！　怯めこの！」

最大の隙を晒してる三人の為にもここは怯ませるなり転倒させるなりしてみせたいが、こういう時のモンスターに限ってしぶといったらありゃしねえ。

しかも、

「ヴォアアアアァァァァ！！」

続けざまの二度目の咆哮に状況が更に緊迫した。咆哮自体に肉体的なダメージはないが、その有り余る大音量は時に鼓膜を破ってハンターの戦意を削ぐ。今のところメンバーの誰一人としてそこまで危機的な状態ではないものの、セシルとアニエスなんかは連発の咆哮に軽く泣きそうな顔で堪えている。

そして俺は決定的な瞬間を目の当たりにした。

喧しく咆哮が響く中で、奴はブレスの予備動作に入ったのだ。

“マジかよ！？　セシルが言ってたのはコレか！”

驚く俺を余所に大きく息を吸って未だ硬直する三人へとブレスを構えるフルフル。一瞬何か強烈な違和感に襲われたが、事態のヤバさに焦って考えてる暇がなかった。

何がヤバいって……、三人共等間隔でフルフルの前方に位置取って立ってるから、このままブレスが放たれたら三つに分かれて直進する奴の特異なブレスが綺麗に直撃する。

「やらせねえ！！」

我武者羅に滅多打ちするが奴もしぶとい。これだけは止めないとばかりに俺の打撃を無視して首を戦慄（わなな）かせ、そして――

バリバリバリバリバリ！！

遂に放たれてしまったブレスが三人目掛け、それぞれ一直線に地面を滑るように進んでいく。

「避けろ！」
叫ぶが無理な話だ。三人は未だにバインドボイスの硬直から抜け出せずに身体を強張らせている。
俺の声も虚しく地を駆ける死の光が三人に直撃した。
「がああああああ！！」
「キャアアアアア！！」
「うあああああああ！！」
「ディーゼル！　アニエス！　セシルーーーーーッ！！」
三人の全身が激しく痙攣して上げた悲鳴が徐々に弱々しくなると、皆膝から崩れ落ちて動けなくなってしまった。
「ヴォアアァァァ……」
切迫して咆哮がいつ止んでいたのかも分からなかった。フルフルは低く唸りながら足元の俺を無視して三人の方へと歩み寄っていく。
動けない三人を先に仕留めようとするのは当然だろう。いつまで経っても決定打の入らない俺を相手にするよりもそっちの方が理にかなってる。
しかしだ、
「調子くれてんじゃ……」
柄を持つ両手の間隔を広げて体勢を低く構え直す。
腹の底から力を込めて、全身……頭の天辺から足の指の先まで力を満たす。
イメージする。赤い……、赤い力だ。視界を真っ赤に染める怒りの力だ。
「ねえッッ！！」
散々ハンマーをブチ込んで歪（いびつ）に腫れたフルフルの脚に、後ろから飛びきりの追い打ちを叩き込んだ。
派手な音はしなかったが、骨が砕けたような気味の悪い音と感触。確かな手応えを証明するように腫れた箇所が限界を越えて破裂したように弾け、中に溜まっていた夥（おびただ）しい量の血が飛び散った。
「ギャアアアアア！！」

溜まらず転倒するフルフルを踏み越えて三人に近寄る。
息はある。が、痺れてしばらくはろくに動けそうにない。
「ディーゼル！　おい、起きろ！」
上から滴り落ちる水滴が溜まった水溜まりの水を顔に掛けて気付かせる。ディーゼルは低く唸りながら顔を上げた。苦悶に歪む表情は辛そうだが、今は気張ってもらいたい。
「大丈夫か！？」
「何……とか、な……」
「う……、ううん……」
ディーゼルに次いでアニエスとセシルもよろよろと起き出す。辛うじて無事なようで何よりだが、正直セシルが動けるとは思わなかった。最初に行った時はブレス一撃でノされたのに、今度は力尽きずに立ちあがった。
「セシル、猫メシか？」
俺の声にキツそうにセシルが頷く。
「うん、『猫の防御術』。いや～運良く働いてよかったよ～……」
頭を掻きながら暢気に言うセシルや、頭を振って意識を保とうとするアニエスを見て、何とか全員無事であることを確認するが現状はやっぱり安心できない。皆その場から一歩も動こうと……、否、動けないでいる。身体がまだ麻痺してるんだ。
「グウウゥゥゥゥ……」
唸り声の方に振り返るとフルフルが白い吐息を荒く吐きながら威嚇していた。全身から発している殺気が嫌な感じに肌を撫で、今にも襲い掛かろうと低く構えた体勢を見て冷や汗が背中に奔る。
「ええい、次から次に……！」
奴と三人の間に割り込むように立ちはだかって迎え撃つ為に構える。ここでブレスでも撃たれりゃ俺も危ないが、まともに動けるのが俺しかいないから仕方ない。
「グアアァァアア！」
叫びながら勢い任せに突進してくる奴に対し、俺も目一杯の膂力（りょりょく）

で加速して真ン前から銀鍋の底をブチ当てた。
しかしだ。こちとら所詮平均よりちょいと体格がいいだけの成人過ぎた男だ。飛竜の巨体を抑えきれるはずもない。てゆうか物理的に無理。
「だあああああ！！」
レウス亜種の蒼いグリーヴの靴底でガリガリと地面を削りながら、押し戻されて後退する。脚に力を込めるがちっとも勢いを殺せない。
背後のセシル達に急速に迫る。このままだと俺ごとセシル達を巻き込んでまとめてお陀仏だ。
“こんの……ッ！”
後ろの三人まで残り一メートルというところで、歯を食いしばって踏みとどまる。
銀鍋に牙を立てる奴の目の無い顔面を睨みながら、身体全体を使って弾くように押し返す。胴体はどうにもならんが首から上は弾かれて不気味な面も余所を向いた。
その隙を突く。
「スッ込んでろ！」
すかさずがら空きの胸部に一撃入れる。「ガボゥア！」と奇妙な声を発してフルフルが怯む。呼吸を乱したみたいだ。
「おし、今の内に……」
フルフルが咳き込んでる間にまだ動けそうにない三人に駆け寄る。膝立ちになってるディーゼルや互いの肩を支え合ってるセシルとアニエスを無理矢理抱え込み……
「なっ！？」
「ちょっ！？」
「撤退ーーーー！！」
全力で走った。まず背中にディーゼルを背負い、両脇にそれぞれセシルとアニエスを抱え、銀鍋の柄を大口開けて咥えてエリア間の通路へダッシュ。三人抱えての全力疾走は卵の運搬なんてメじゃないぐらいしんどい。強走薬の一つも欲しいところだが生憎持って来

ちゃいない。
「ユノン、追って来たよ！」
俺に抱えられながら器用に後方確認していたセシルが叫ぶ。見ると天井を這いながらフルフルが確かに追って来ていた。切羽詰まってる事も手伝って中々おっかない眺めだ。夢に出てきそう。
狭い通路まで後僅かだが……、間に合うか！？
「おおおおおおお！！」
通路に跳び込んで三人を放り出すと、その直後に「ズシン！」と通路の入り口にフルフルが落ちてきた。見ると入り口を白い有機的な奴の巨体が塞いでいる。
俺は咥えていた銀鍋を両手に構えた。通路自体が狭いから奴は入れない。だが奴には便利な伸縮自在の首がある。
「ギョアアアアア」
予想通り体勢を立て直し、首を伸ばして執拗に攻撃してくる奴の頭を迎撃する。俺は放り出した三人に後退を指示し、三人は未だに痺れの残る身体に鞭打ちながら這うようにして洞窟の奥へと少しずつ移動していった。

「おし、ここまで来りゃ大丈夫だろ」
奥の暗がりまで来ると奴の牙も届かない。が、まだ奥の方で奴の唸り声が聞こえる辺り、待ち伏せしているみたいだ。
それを無視して三人を見る。各々肩で息をして辛そうだが麻痺は大分和らいでいる。三人はポーチの中から回復薬を取り出して一気に呷り、辛そうな表情を浮かべた顔にやや生気が戻った。
「動けるか？」
「ああ、大丈夫だ。しくじってすまない」
「まあ気にすんな。マジでセシルの言った通りだったから俺も面喰らったし」
「ほら〜、だから言ったじゃん！」

ちょっと怒った様子のどや顔で俺を指差すセシル。多少疑っていた事は認めるが人を指差すのは止めなさい。小さい頃から俺やマスターが口を酸っぱくして言ってるでしょうが。
「あれは……、驚きました」
二人より遅れて回復薬を飲み干したアニエスが呟いた。
「俺もビックリだよ。確かにアレには驚かされた……でもなぁ……」
「……何だ？」
頭を掻きながら視線を上に考え込む俺を見て、ディーゼルが訊ねた。
いや……何か、な～んか引っ掛かってるんだよな？
さっきの戦闘以来妙な違和感が残っている。何だ？　何を見落としてる？
「ねえ、まだフルフルが奥の方でギャアギャア言ってるけど、どうする？」
通路の陰から奥を覗き込んでいたセシルが俺の思考を遮るように呼び掛けた。確かに奥からは未だに奴の唸り声が聞こえてくる。
「キャンプに戻るまでもねえ。もう一回行くぜ。いいよな皆？」
俺の声にアバウス兄妹が力強く頷き、セシルも少し疲れた様子だが頷いた。こいつにしては珍しく素直な反応だ。ブレスを二回も喰らえば普段のこいつならもっとビービー喚いて帰りたがるもんなんだが……。
「何かやられっぱなしで私も悔しいんだよ。もう緊張もしてないし、汚名返上するよ」
おお、良い心掛けだ。成長したなお前。
「じゃあ、どうしますか？　幸い、まだペイントの効果は切れてませんから、フルフルが諦めてエリア移動するのを待つこともできますが……」
「いんや、一々待つ必要はねえ」
「しかし、ああして入り口を塞がれてはどうすることも……」
「こうすりゃいいんだ」

言って俺は駆け出す。突如走りだした俺の意図に気付いた兄妹が慌てるが、それを無視して狭い通路を潜り抜けると、すぐにフルフルの姿が見えた。
咄嗟の行動に意表を突かれたのはヤツも一緒らしい。入り口いっぱいに立ちはだかる白い巨体が僅かに動揺に震えた。
その隙を見逃すような俺ではない。
「リベンジだゴルアアアアアアア！！」
俺は天井の低い通路で器用に低く跳びあがり、邪魔なフルフルの頭に抉り込むような両足蹴りを見舞って入り口から押し戻した。

第十五話……The Offensive and deffensive battle

二ヵ月以上ぶりです。むぎとろです＞ｍ（＿＿）ｍ＜
投稿遅すぎて桜も散っちまいまして梅雨でございますよ。
夏が来ますな。暑い夏であって欲しいとか言っても、いざ夏になれば「暑いもうやだ帰るお家に帰る」ときっと家の中でもうわ言のように呟くのでしょう。これ以上どこに帰ると言うのか。天か？

さてそれはそうと

＞ｉ４８９７―４９２＜
これは以前知り合いに贈ったヤツ

＞ｉ５９１４―４９２＜
いつぞやのツイッター診断のヤツ

＞ｉ７９０９―４９２＜
まあニコ厨ですから東方大好物です。小野塚小町。

＞ｉ８０１７―４９２＜
皆様「ＷＯＲＫＩＮＧ！！」をご存知でしょうか？　ヤングガンガン好評連載中の面白マムガですｄ（´∀｀＊）　ｗｅｂ漫画猫組からのファンでしたがまさかのアニメ化に舞いあがって駄絵化。もうマジ堪んない。

というワケで十五話でした。次回の更新は未定です。リアルが活報書けないくらいにガチで忙しいので、（。∀。）

第十六話……Ｒａｇｅ．（前書き）

更新ペースに風穴を開けましておめでとうございます２０１１年兎年！（、・ω・，）

毎度毎度マイペースで申し訳ないです…（；，・ω・、）ノ

２０１１年は多少は定期的に更新できるようになるといいな（，◇、；）

第十六話……Ｒａｇｅ．

仰け反りながら後退するフルフルに追撃の銀鍋を叩き込みながらエリアに入る。

少し遅れてエリア入りしたセシル達も即座に散開してフルフルを囲む形に展開した。

「グゥゥゥゥ……」

ヴヴヴヴヴヴ……

放電しながらフルフルが四方で構える俺達を見渡して低く唸る。先程までの怒りもほとんど鎮まった様子で、誰を狙うか旋回を繰り返し、そして俺の方を向いてフルフルは歩き出した。

「……はいはい、俺ね」

やれやれと肩を竦めながら銀鍋を構える。まぁ散々ダメージ稼いでたし、仕方ねえか。

攻めの要であり、また、フルフルの攻撃を妨害しまくった俺は、光栄にもフルフルに最大の障害と認知されてしまったらしい。いやめでたくはないが。

フルフルにしてみりゃ、一撃の威力が高いハンマーの攻撃を何度も繰り出されたんだ。本能的に俺を野放しには出来ないのは当然だろう。

しかし、警戒すべきは何も俺だけではない。

“ディーゼル、頼むぜ？”

目を合わせたディーゼルが静かに頷く。

「ゴアアアアッ！」

前傾姿勢のまま首だけを伸ばして攻撃してくるフルフル。俺はその場で素早く踏み込み、銀鍋を横一閃に薙ぐように振るって相殺。不発に終わったフルフルは首を戻そうとして隙を作り、その隙を突いてディーゼルが飛び込んだ。

「おおおおおおお！！」

烈昂の気迫と共に唐竹、袈裟と連続して切り掛かるディーゼルの猛攻に、不意を突かれたフルフルが怯んで身を硬直させる。
脚ばかりの攻撃で目立った活躍はしていないが、一撃の威力の高さならディーゼルの太刀も充分な代物だ。
ディーゼル本人もそれは自覚していたからこそ、さっきの俺とのアイコンタクトで俺の意図を汲み取り、攻撃の要としての役割を、俺じゃなく自分に自信を持って移したんだ。
怯んで更に生まれたこの隙に乗じて、セシルも接近して攻撃。アニエスも会心距離で矢を射続ける。
“さて……”
俺もフルフルの脚を攻撃しようとしたが、ここで幾つか思い返した。

前の戦闘でフルフルが見せた攻撃。
感じた違和感と、その時の状況。
セシルの言葉。
フルフルの生態。
そして現状。

“……試してみるか”
思い当たってフルフルの『足元』の岩肌を銀鍋で叩いて陥没させていく。その行動を近くで攻撃していたセシルが不可解そうに見ていたが、気にせず床の岩肌を砕いて窪ませていく。
やがて一斉攻撃にフルフルが再び怒りに呼気を荒げ出した。
狩り慣れている奴なら知っている事だが、フルフルは怒り出した直後は大抵バインドボイスを繰り出す。俺は冷静にフルフルの動向を探りながら、先刻感じた違和感の正体を突き止めようとした。
「ギョアアアアアアア！！」
予想通りにフルフルは咆哮を発し、離れる間もなく至近距離にいたセシル達は、動きを封じられて耳を塞ぐ。

だが想定内だ。
「ギョアアアアアアアア！！」
痛烈な連続バインドボイスが発せられ。さっきと全く同じ状況になる。
“さあ来やがれ。探った先に鬼が出るか、蛇が出るか……”
「ゴァァァァ……」
“来た！”
フルフルがブレスの体勢をとって口内から青白い光が零れた。
焦ってないと言えば嘘だ。けどそれはブレスに、じゃない。突き止めた違和感の『正体』に対してだ。
「くたばれブサイク！」
寸分違わず狙い通りに、俺はフルフルの足を銀鍋で叩いた。怯むような一撃じゃあない。だが足元が僅かにズレればそれで充分だ。
ズレた先に先程作っておいた窪みがあり、その窪みに滑るように足をとられたフルフルは転倒。口内に溜まっていた光の塊は行き場を失い、空中にバチバチと霧散した。
転倒し、それでも不快な咆哮の音は止まらないのだ。
流石に俺以外の三人もこの異常事態に気付いた。
「よ～し、さて……」
足をバタつかせて藻掻くフルフルを一先ず無視し、前後左右に上下も合わせて３６０度を見渡し――
――そして、見つけた。
「アニエス！」
「キャッ！？」
名前を呼びながら俺は駆け寄り、彼女の尻を軽く蹴って無理矢理

硬直状態を解いた。蹴った瞬間、ディーゼルに悪鬼の如き目で睨まれたが構わず二人に叫ぶ。
「今だけ勘弁しろ！　俺の予想通りならこのクエストちょっとヤバいぞ！」
　叫んでも何故か未だ止まないバインドボイスのせいで耳を塞ぎ続けなければならないディーゼルやセシルには、俺の声は聴こえない。しかし俺の顔を見て、危機は伝わったようだった。
「な、何ですか？」
「あそこだ！　野郎が出入りする大穴だ！　あそこを狙って矢を射かけろ！」
　指を差す俺の指示にすかさず応え、瞬時にクイーンブラスターを展開し、ほぼ同時に滑らかに、しかし迅速な動作で矢筒から矢を取って弦を引く。
　ビシュッと矢尻の擦れる音を残して放たれた矢は、吸い込まれるように『何もないはずの』大穴に飛び入る。

　そして、まるで飛んで来た矢に応えるかのように、バインドボイスがピタリと鳴り止んだ。

「……え？」
「……やっぱりか、チキショウ」
　呻くように疑問の声を漏らすアニエスに俺は舌打ちで応え、遅れて大音量の脅威から解放されたセシルとディーゼルに顔を向ける。セシル達も一体何が起こったか理解できず、表情に動揺が見えた。
「気を付けろ」
　大穴を睨みながら俺は呟いた。声色が嫌でも緊張を孕んで震える。
「お前らを散々苦しめた野郎の正体だ」
　そう言った。次の瞬間、
「ヴォアアアアアアア！」

大穴の奥をひた隠す黒い闇の中から、白い闇の異名で呼ばれる巨体。
そう、今まで自分達と闘っていたフルフルが『もう一体』飛び出して来た。

「……嘘でしょ？」
そう呟いたのはセシルだったが、恐らくセシルがいなけりゃ兄妹のどちらかが同じ言葉を零しただろう。
「フルフルが……、二頭？」
ズシン！　と、地面に着地した新たなフルフル。鼻をヒクヒクと鳴らしながらパーティに正対し、正面に位置取っていた俺達の気配を察しながら歩みを進めて行く。
と、皆の頭が事態についていけない中、真っ先に俺は新しいフルフルに突撃した。
「俺がアイツを引き付ける！　お前らはそこで藻掻いてる奴から何とか逃げろ！」
言われてハッと我にかえった三人は、俺に転ばされた方のフルフルを見た。見ると既に起き上がりかけ、今にも襲いかかりそうな程興奮した状態にいた。
「に、二頭なんて……！」
「と、とにかく逃げましょう！」
言いながらフルフルの脇を通り過ぎようと足を踏み出すが、完全に起き上がったフルフルが逃がすまいとセシル達の前に立ち塞がる。
アニエスとセシルが慌てて陣形を整える。悪夢なら醒めて欲しいところだが、残念ながら現れた二頭目は夢でも幻でもない。
今まで戦闘していたフルフルは決して軽いダメージではないだろう。むしろ弱っていると言ってもいいが、怒りによって昂ぶったフルフルの暴走とも言える動きは、身体中の傷を感じさせない程にパワフルだった。

「アニエスちゃんだけでも出られない！？」
「そ、そんな事できません！　それに、逃げようにもこんなに暴れられたら……！」
苦戦しながらも、何とか二人は連携のとれた動きで対峙する。前衛のセシルが積極的に切り込み、アニエスも矢を射ち込んでダメージを上乗せする。そしてフルフルの意識がアニエスに向けば、セシルが再び連続して切りかかる。
逃走が困難な今、討伐も視野に入れて立ち回らなければならないこの状況は、二人の神経を大いに磨り減らす。
順調にこの流れが続けば先行きも明るいが……、それでも二人はもう一頭のフルフルを意識せずにはいられない。
今は何とか抑えてはいるが俺も万能じゃない。いつ向こうに襲い掛かるか分からない以上、一刻も早く撤退、或いは討伐するしかなかった。
“おかしいと思ったよ畜生！”
険しい顔で目の前の敵の攻撃を掻い潜りながら毒づく。
セシルの話を聞いた時点で、考えられる可能性は幾つかあった。その中に二頭目の存在を疑う考えもあったが、俺は一番『無い』と判断していた。
“だって、まさか二頭で共生してるなんて思わねえよ……、いや、この場合『寄生』って言った方が正しいのか？”
一人ゴチながらフルフルの噛み付きを躱す。横目でセシルとアニエスがもう一方のフルフルと対峙している事を確認して、これからどうするか考える。
“このままこいつを引き付けて……、いや、セシル達が何とか出来るって考えは危ねえな。ダメージから見て瀕死に近いが、死にかけても飛竜種だ。土壇場で何があるか分からん”
二頭以上の狩猟に於いて、今のように同時に二頭を相手にするのは本来避けるべきで、一頭一頭が別離するのを待つのが得策だ。
今はまだ、交戦中のフルフルを俺が挑発してるからまだ良いもの

の、こいつがいつセシル達の方に牙を向けるか分からないし、そうなればジリ貧になるのは目に見えてる。
しかも、セシル達が戦っているのは怒り状態のフルフル。まるで逃がすまいと出口前に陣取って暴れまくる奴に、セシル達も手一杯だ。
そんな状況でもう一頭が乱入したら……、パワーバランスがあっという間に奴らの方に傾いちまう。
そのせいで……、とは言わんが俺も目の前のフルフルを怒らせまいと、あまり派手に攻撃できないでいた。
今、この場を打開する方法が何かないか、と聞かれりゃ――
“いや、無い事も無いんだけど……”
――ある。突破口足り得る『とっておき』を俺は持っている。
だが、俺は『それ』を使うことのリスクを考えると、決断に踏み込めない。それは……
「っ！？」
そこまで考えたところで、視界の端に映ったその光景に目を疑った。このエリアにいる奴らの中で、しかもこんな状況の中で唯一動いてない奴がいたからだ。
「……」
ディーゼルだ。どういうワケか太刀を構えたままその場に立ち尽くして俯いてる。
「ディーゼル！？　何してんだオイ！」
ここで更にマズイ事に、俺が相手をしていたフルフルが俺への攻撃を途中で止め、棒立ちになっているディーゼルの方を向いた。ヤバい！
「ディーゼル！　逃げろディーゼル！」
喉が裂けそうなほど叫ぶがディーゼルは止まったままだ。
何とか行かせまいとフルフルの歩む脚をガンガン殴りまくるが、こっちはＨＰほぼマックスの個体だ。当然こんなもんじゃ止まってはくれない。

万事休す。と思ったその時――

「兄様！！」

「うお！？」

「ふぇっ！？」

「っ！」

フルフルの咆哮もかくやと言わんばかりの大声が洞窟に轟く。アニエスだ。

「……っ！」

そこでようやくディーゼルが動く。焦りやら困惑やらがごっちゃになったような顔面で、アタフタと覚束ない足取りで移動しだした。あ、こりゃダメだわ。

「ユノーーーーン！　助けてーーーー！！」

「げっ！？」

こっちもヤバかった。見るとエリアの端で尻もちをつくセシルに、今にものしかかりそうな勢いでフルフルが威嚇していた。多分攻撃を受けて運悪く追い込まれたんだろう。

慌ててセシル達の方へ向って走り出す俺の前に、新しい方のフルフルが立ち塞がった。

「どけ！」

「グオオオオオオオオッ」

通すまいとでも言うように俺に牙を剥く。そうしている間に向こうのフルフルは首を伸ばし、噛みつかれそうになるセシルは剣と盾で器用にフルフルの頭を挟んでこれを食い止めた。

「ひいいいいいいいっ！？」

あれだけ不快な見た目の生き物が自分を食おうと目の前で大口開けてるんだ。当然のことながら、セシルはマジ泣きしながらジリジリ迫るフルフルの顔面を抑えこむことに必死になった。

「このっ！　セシルさんから、離れなさい！」

アニエスが滅茶苦茶に矢を撃ちまくり、フルフルの巨体に幾つもの矢が突き刺さっていくが刺さりが浅い。フルフルがセシルへの攻撃の手が休まることはない。
「ヒッ……！　ヒィッ……！」
嗚咽を漏らしながらフルフルの口を押し返そうとするが、粘液で滑ってそれもままならない。
「セシル！　立て！　気合い入れろバカっ！！」
渇を入れようと叫ぶが、徐々に迫ってくるフルフルの牙への恐怖で聞こえていないようだ。
“仕方ねえ！　もうリスクだの何だの言ってられねえ！”
そう決意して俺が動こうとしたその時……

ブチっ

何かが切れた……、そんな音が緊迫した状況に似合わない軽やかさで洞窟内に響いた。
「……何の音？」
アニエスが疑問符を頭の上に浮かべながら周囲をチラっと見渡した。
その時――

「アアアアアアアアアアッ！！」

獣が哭いたような雄叫びを上げながら、弾けたようにセシルが動いた。
いや、動いたと認識したその瞬間には、セシルはフルフルの後方に移動して危機を完全に脱していた。
「ギャオオオオオッ！？」
そして突然獲物を見失って呆けるフルフルの首に、遅れて赤い裂傷が幾つも奔って血が吹き出す。

「……は？」
何が起こったか全く分からない様子のアニエスが、蹲るように震えるフルフルと豹変したセシルを交互に見た。
無理もない。間近で見たらまるで瞬間移動でもしたみたいに感じただろう。多少距離のあった俺でも、セシルの動きの全容は捉えられなかったし。
「……あ～あ……」
俺は妙に落ち着いた心境で、ある意味で安堵の、もう一方で諦めの混じった溜息を吐いた。出来る事なら避けたい事態だった為に、温い吐息が嫌に優しく肺と喉を撫でたように感じた。
「セシルが……、キレた」

第十六話……Ｒａｇｅ．（後書き）

何ヶ月も空けちゃダメ。絶対！（、・ω・´）

オマエガイウナー！！（（（（（（；、Д´）≡つ）、Д）、；'．・サーセン！！

この体たらく。ウダウダやってる間に３ｒｄも出ちゃったし。

そう、その３ｒｄですよ。

購入して一ヶ月たってランクも最高まで上り詰め、しかしまだまだ遊びたい。そんなお年頃。更新しろ。

もうね、火山で護石探索ってだけでも楽しい。神お守り出た試しがないけどピッケル振って『古びたお守り』って見るだけで絶頂に達しそうになる。『古びたお守り×２』昇天する。

詳しいことはブログで語るとします。

⇒ｈｔｔｐ：／／ｔａｍａｔａｍａｊｉｒｕ．ｂｌｏｇ１１１．ｆｃ２．ｃｏｍ／

気軽にコメントくれると嬉しいです。

さて、次回十七話。てゆうかセシル嬢、実は凄かった。ぽんこつじゃなかった。

次回で彼女の秘められたポテンシャルにも触れていきたいと思います。

では、なるべく間を空けずに更新できる事を祈って　ノシ

第十七話……Ｑｕｉｅｔ　ｖｉｓｉｔ．（前書き）

そんな暇ないかもだけど、こまめに更新できればいいな！（、・ω・、）

第十七話……Quiet visit.

「フーっ！　フーっ！」
「……せ、セシルさ～ん？」
目を剥いて前傾姿勢でフルフルと威嚇し合うセシルと、そのセシルに声を掛けようとアニエスが近付いた。
俺はフルフルの脇を急いで抜けてアニエスの肩を掴んだ。
「あ、あの？」
「放っといていい。それよりこっち手伝ってくれ」
俺はそう言ってアニエスを引っ張ってセシルから離れた。しかしアニエスは抵抗してその場に踏み止まろうと俺を引っ張り返す。
じっとしているワケにもいかないのでフルフルの攻撃から逃れるように、移動しながら俺はアニエスに説明した。
「ちょ、ちょっと待って下さい！　セシルさんが一人になっちゃいますよ！？」
「今のセシルなら大丈夫だ。むしろ下手に手を貸すと俺らがアイツに攻撃されちまう」
「何を言って……」
「ありゃ完っ全にトサカに来てる。過去にも何度かあんな風にブチ切れた事があるんだが、ああなると敵味方の区別もつかなくなるから放っとくしかないんだよ」
今のセシルにとって、目に映る全ての動く物が敵だ。おまけに身体能力が冗談のようにハネ上がるから手に負えない。差し詰めモンスターの怒り状態に相当するセシルの現状、名付けてセシルスーパーモードだ。
尤も、人間離れしたあの動きがセシルにとってオーバーワークであることも明らかなので、ある程度暴れさせればその内疲れて大人しくなる。だが、その間は絶えずあの速度で動き続けるから、ほぼ無敵と言っていい。あの動きをまともに捉えられる奴と言えば、恐

らくマスターぐらいだろう。あの人もっと速いし。
「セシルも昔は俺と一緒にマスターの戦闘指南を受けててな。普段はへっぽこのクセにああやって理性が飛ぶと嘘みたいに強くなるから、教えられたことはしっかり吸収してたんだろうさ。マスターも言ってたよ。あの状態のセシルなら教える事は何も無いってね。俺を差し置いてな」
「あの、つまり今のセシルさんは戦闘面でビーバーさんよりも……強いと？」

……。

「……大変認めたくない事実ではあるが、その通りだ」
言って後悔。苦々しく首肯してこちら側の敵に向き直った。
一先ずセシルは一人でも問題ないだろうから、こっちのフルフルを三人で片付けよう。
とはいえ、理由は不明だがディーゼルが未だに挙動不審で使い物になりそうにないから、実質は俺とアニエスの二人だけだ。まあ、何とかなるだろう。
「お前の兄貴は一体どうしたんだ？」
「……」
アニエスから返事はなかった。一瞬表情が曇ったところを見ると、何かワケ有りなんだろう。
「……分かった。でも後で説明してもらうからな？」
それだけ言って前に出て、フルフルの間合いの一歩手前まで距離を詰める。
目の前の二頭目……、別に無視してもよかったんだが状況がそれを許さない上に、俺の狙う報酬は『アルビノの霜降り』、希少素材だ。
一頭より二頭を仕留めた方がゲットできる確率も上がる。現状はやや危機的だが、今なら乗り越えられそうな気がする。

……『危機的』か。
“フルフルニ頭にピンチ……、マスターに聞かれたら絶対鼻で笑われるな”
脳裏に不敵に笑う、俺にとっては親も同然の蒼い髪の女性の顔が過ぎる。
あの人（マスター）は強い。現役を引退した今でも、きっとこの状況を余裕綽々で攻略するだろうなって確信がある。
俺はその強さに憧れたし、惹かれた。
だからさっきまで事ある毎に焦り、動揺していた自分を殴りたくなる。あの人に師事した以上、それは許されないことだし。そうすることが自分の誇りでもあるからだ。
“ここで一丁名誉挽回するか”
「来ます！」
そのアニエス叫びの直後に迫った牙を叩き落とし、セシル対フルフル、俺とアニエス（あとディーゼル）対フルフルの戦闘が始まった。

さて、どんぐらい時間経ったんだろうかね？
天井の裂け目から僅かに見える景色は黒に近いほど暗い。言うまでもないが、夜だ。
「アニエス、大丈夫か？」
「……」
「……おい」
「あ……、ハイ、大丈夫……です……」
答えたが横目に見たアニエスの表情は、明らかに憔悴しきっていた。
無理もない。二人掛かりとはいえ、長い時間を通して大型モンスターと対峙してきたんだ。疲れない方がおかしい。
「グルゥゥゥゥ……」

「にしても……、こいつも全くしつこいなオイ」
正面を見ると、俺達の相手であるフルフルが威嚇の唸り声をあげている。
奴の全身には俺とアニエスがつけた傷や痣だらけだ。かなりダメージを与えたはずだ。が、未だ倒れる気配はない。
“セシルは？”
振り返って孤軍奮闘してるはずの金髪の少女を探す。
「ウッキャアアアアアアアイ！！」
いた。奇声を上げて元気に片手剣を振りかぶり、もう一頭のフルフルに跳びかかっていた。まるで猿だ。はしたない。
とはいえ、俺の体内時計が確かなら……、経過した時間的にセシルもいい加減限界のはずだ。
一旦この場を全員で離脱して拠点（ベースキャンプ）に戻りたい。でもその為には二頭のフルフルの攻撃を掻い潜らなきゃならんのだが、二頭して執拗に追い回してくるのでこれも難しい。
せめてどちらか一頭が痺れを切らしてこの場を離れてくれりゃいいんだが……。
なんて考えていると――
「グフッ！」
「お？」
俺とアニエスの前にいたフルフル、そしてセシルが相手をしていたフルフルが、ぶっさいくな声を漏らして、二匹揃って天井に跳び上がって張り付いた。
そして、天井脇の大穴に向かって方向転換して、のっしのっしと天井を伝って逃げていく。セシルとアニエスを休ませたかった俺としては願ったり叶ったりだ。
「……行ったな」
「フーーーー……」
アニエスが大きく息を吐いてその場に座り込んだ。緊張から解放されて、さっきより顔色が良くなった。

「座ったところ悪いけどさ、休むなら拠点で休もうぜ？」
「えへへ……、そうですね」
「ギャウアアアアアア！！」
聴き覚えのある声色の奇声に、何事かと思って振り返る。
セシルだ。まだ闘うつもりなのか、フルフルが逃げて行った大穴によじ登ろうと岩肌にへばり付いてジタバタしていた。
「あーもう……、世話の焼ける……」
呆れながら歩み寄り、足首を掴んで引き摺り下ろした。床にビタンと落ちて、「ギャフンッ！」と狙ってるとしか思えんような声をあげる。
「セシル。もういい。一旦戻るぞ」
プルプルと小刻みに震える幼馴染を見下ろしながら、何事もなかったかのように告げる。するとピタリとセシルの震えが止まり、やっと正気に戻ったと思ったがそうじゃない。セシルは素早く立ち上がると、俺に向かって剣を振り上げて襲い掛ってきたのだ。
「ウガアアアアア！！」
「危ねっ！　こんの……ッ！」
尚も攻撃してくるセシルから距離を取り、俺は腰のアイテムポーチに手を突っ込んで『それ』を掴み取り――
「オラァ！」
「ムグ……グ……ッ！」
セシルの口に放り込み、吐き出さないように口を手で塞いだ。さあ、よ～く味わいやがれ……。
「ンムッ！？　ムォォォォ！　ムォォォォン！」
見る見るうちに顔色が青く変色した後、口を塞いでる俺の腕を何度もタップした。正気に戻った意思表示だ。
俺が拘束を解くと、「んばあああああ！！」と絶叫しながら唾液を撒き散らし、発狂したように地面をゴロゴロ転がって藻掻き苦しんだ。
「大げさな奴め」

「あの……、セシルさんに何を」
「ん？　ああ、にが虫を生で食わせたんだ」
究極の不味さで一発で目覚めるんだが、そんなことより今は拠点に戻りたい。腹減ってしょうがねえや。
「それと……、アイツのことも聞かせてもらうぜ」
「あ……」
「……」
視線の先にいるディーゼルは、洞窟の奥の闇に半分浸かって俯いていた。

第十七話……Ｑｕｉｅｔ　ｖｉｓｉｔ．（後書き）

震災に関して、なろうユーザーの皆さん無事でしょうか？
私も親戚が北海道から鹿児島まで全国に散らばっているので、特に東北・関東の親戚の捜索に時間を費やしました（全員無事でした）

第十八話……Ｃｏｎｆｅｓｓｉｏｎｓ（前書き）

会社の付き合いで打ちっぱなしゴルフとかバッティングセンターに行きました。

勘でフルスイングして、大体当たって球が前に飛んだものの、両手がスポ根漫画の主人公みたいにマメが潰れまくった。

得物のあるスポーツは素手でやるもんじゃないね。

第十八話……Confessions

夜の気が濃くなって肌寒い。眼前で煌々と燃える原始的な焚き火は、光や熱に乏しい沼地の深夜には、暖をとるために必要な生命線に等しい。

「いただきます」

俺がそう言って今しがた出来上がったこんがり肉にかぶり付くと、焚き火を囲む他の三人も一斉に肉を食い始めた。

ベースキャンプに戻ったらまず飯にしようと考えていたから、戻るついでに群れからはぐれたアプトノスを一頭仕留めて持ち帰った。携帯食料でも別に良かったがありゃ味気ない。どうせ腹に入れるなら暖かくて美味いもんが良い。

それに……、しっかり聞いておかなくちゃならんこともあるしな。

「さて、食い終わった直後で悪いんだがな……、説明してくれねえか？　ディーゼル」

「……」

食後、パチパチと音をたてて燃える炎を背に、焚き火から離れた位置に腰を下ろしていたディーゼルの前に立って、俺は説明を求めた。

が、説明しろって言ってんのに、ディーゼルは俯いた顔をさらに下に向けて沈黙した。

折角用意した飯もディーゼルだけは半分ほど残していた。話を聞いてみないことには何も始まらんが、こいつがこんな態度だと事態が進展しないから正直困る。

「おい、黙ってちゃ分かんねーぞ？」

一歩近付いて上から浴びせるように声を掛けるが、答えない。月明かりと揺れる焚き火の光だけが頼りの暗がりの中、輪郭のはっき

りしないディーゼルの姿が酷く頼りなく見える。
「……」
「……やれやれ……」
明らかに聞こえてるクセに、答える素振りすら見せないディーゼルに苛立ちを覚え、俺は振り返って背を向けようと身を捻った……、と見せかけて、勢いをつけて奴の頬を強烈に張って倒す。
投げ出されたように泥濘にディーゼルが倒れ込み、泥飛沫が上がった。いきなりの俺の挙動に驚くセシル達を尻目に、低い声で僅かに呻くディーゼルの胸ぐらを掴み、顔を引き寄せる。
「テメエ……、いい加減にしろ！」
「……」
「ハァ……」
俺は完全に頭に血が昇っていた。ため息混じりに大きく息を吐いて、努めて冷静になろうと、ディーゼルに話しかけた。
「ビビったなら……、尻尾巻いて逃げりゃいいだけの話だ。俺は別にそんなこと責めたりはしねえよ。だってそうだろ？　今回のは完全にイレギュラーなんだ」
「……」
「俺はなディーゼル……、そんな大事な場面で、お前が逃げるどころか動こうともしなかったことにムカついてんだ。あの時がどういう状況だったかは、言わなくても分かるだろ？」
「……ああ」
ようやく返ってきた返事は、何とかして絞りだしたってくらいに弱々しい肯定の言葉だった。どうしてこいつがこんなに意気消沈しているのかは今を以て知らんが、全く会話出来ないワケではないらしい。
「俺やセシルなんて結局他人だ。だからパーティ組んでるからって、別に助ける義理なんて無いみたいなもんさ。特に今回は突然のことだったし、お前のキャパを越えちまったってのも分かる……、でもアニエスはお前の妹だろ？」

頑なに逸らしていた視線が俺に向けられた。眉根が歪んでいて今にも泣き出しそうな表情だ。何かを言いたいのか口元が開いたり閉じたりするが、言葉は何も出てこない。
本当はコイツも分かってるし、反省もしてるんだ。せめて妹だけでも守らなければいけなかったあの状況で、何もできなかった兄としての不甲斐なさを。
「立てよ」
掴んでいた胸ぐらを開放した。が、膝が地について、ディーゼルは力なく項垂れる。
俺は何度目かのため息をついて、視線をディーゼルに合わせるように片膝立ちに屈んだ。
「お前らのいた国のハンターってのは、皆お前みたいなのばっかりか？」
少し我慢できなくなって、つい嫌味っぽく言ってしまったが、答えは帰ってこなかった。
「何とか言えよ。それとも……、お前がそんな風なのは、実は『貴族』のお坊ちゃまだからか？」
「っ！？」
明らかに驚いた様子でディーゼルが俺を見上げた。
俺は意を決して、核心に迫ることにした。一言も口にださなかったどころか、自分達の事を農家の子供と偽ったことから考えて、恐らくこいつらにしてみれば知られたくない事だったんだろう。
「……何故」
「分かったかって？　正直なトコ……、お前らと初めて会って話したあの時から、何となく怪しくは思ってたよ。はっきりと分かったのは、ここに来て飯食った時だけどな」
「……飯、だと？」
「あんな風に丁寧に食器まで持ち出して、狩場で飯食うなんて普段ならしないんだよ……、ちょっとお前らにカマ掛けたくてな？」
俺もセシルも狩りの時は基本的に、焼いて香辛料振っただけの肉

を素手で持ってかぶり付いて済ましている。
だが、今回はフォークやナイフ、それに皿まで持ってきてこの兄妹に馳走した。その理由は――
「お前ら二人……、テーブルマナーが完璧だった。農家から出た奴の立ち振る舞いじゃねえよ」
多分、二人とも幼い頃から矯正されてきたんだろう。俺が皿に盛って次々に出した料理を、この兄妹はまるでそれが自然体のように綺麗な姿勢で食事していた。
その時にほぼ確信した。この二人、平民じゃないってな。
「しかもだ……、さっきアニエスはお前のことを『兄様』って呼んだんだぜ？」
他にも言葉の端々に育ちの良さが見え隠れしていた。自分達のことを『我々』って言ったりな。ここまで来ると分からん方がおかしい。
「へぇー……、私全っ然気付かなかったよ？」
お前（セシル）は別だが。
「まあ、とにかくだ。どうする？　このクエスト、諦めるか？　別にそれでもいいぜ？」
「そ、それは……」
ディーゼルが慌てて反論しようとするが、いまいちバツが悪そうに途中で言い淀む。
振り返るとアニエスも俯いて何も言えなくなってしまった。途中で投げ出したくはないんだろう。
でもこの二人が何も言えない、何もできないのは、こいつら（てゆうかディーゼル）が何かを恐れているからだ。そして、それはさっき出てきた二体目のフルフルじゃない、別の何かだ。
「……一年ぐらい前、かな？」
「……？」

俺は、似たような奴と一緒に狩りに出たことを二人に話した。その時の相手はイャンクックだったが、火炎液をくらった途端、そいつも狩りの最中に動きが急に悪くなった。
原因は肉体のダメージじゃなく、トラウマによるものだった。そいつは故郷の村を火竜に襲われ、その時両親が火竜の吐いた火球に焼かれて死んだのを目の当たりにしてしまった。それ以来、そいつは大きな火を見ると脚が竦んでしまうようになってしまったらしい。
イャンクックは無事に狩れたが、そいつは俺に負担をかけたことを深く詫びて、泣きながら何度も頭を下げた。「気にするな」と言っても決して頭を上げることはなく、結局そいつはハンター業も辞めてどこかへ旅立ってしまった。
「そいつみたいに……、お前が何か心を病んでいるとしたら、今回のクエストはリタイアした方がいい」
「そ、そんな……」
弱々しくアニエスが呟く。ディーゼルも悲しげな表情の顔を上げる。俺は少し躊躇ったが、厳しく告げた。
「中級飛竜を二体同時に……、俺一人ならともかく、そんな状態のお前らの面倒見ながらは出来ねえよ」
ディーゼルが悔しげに歯噛みして俯いた。
「なあ、何かあったのか？」
言われてディーゼルがビクリと反応した。
二人の態度を見る限り、過去にトラウマになるくらいの何かが起こったことは間違いない。
知り合って間もない間柄で、こんなことを聞いていいものか迷ったが俺は聞いた。出来るならこの二人の力になりたかったからだ。
大きなお世話かもしれないのは百も承知だ。でも、この二人が交わしてきた言葉や行動は、真面目で、誠実なものだった。
無論、そんなものは力を借りたいと言ってきた方が、最低限示さなきゃならない当然の態度だ。でも、それだけじゃない。二体目のフルフルが現れた時……逃げ出したかっただろうあの時も、ディー

ゼルは殆ど動けなかったものの、それでも逃げようとせず、アニエスに至っては自分達だけが逃げる選択を「それはできない」とはっきりと否定してみせた。
俺は、俺に向けられていた、この二人の真っ直ぐな心根にもっと答えたかった。放っておけないんだ。
「……ディーゼル、話してくれねえか？　力になりてえんだ」
「……あ」
ディーゼルの肩にそっと手をかけ、俺は本心からそう言った。
「あの……、私が……」
アニエスが一歩前に出て何かを言おうとした。が、ディーゼルが片手を上げてそれを止める。
「いい、アニエス。私が……、言おう」

第十八話……Ｃｏｎｆｅｓｓｉｏｎｓ（後書き）

やあ皆、白濁エングリッシュの時間だよ！

『エ』ングリッシュとか言ってる時点で危険だねッ、ハハッ！

サブタイの『Ｃｏｎｆｅｓｓｉｏｎｓ』は日本語に直すと『告白』の名詞だよ！　これさえ覚えておけば、明日のテストはバッチリだね。ホームランさ！　仮に間違えたとしても僕は一切責任をとらないよ？

さあ、どうなるかな？　真実はいつだって闇の中さ！　せいぜい苦悩して痛い目を見るがいいよ！　ハハハッ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1046e/

MONSTER HUNTER　～ある料理人の珍事～

2011年6月6日00時40分発行